
ループ

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ループ

【Nコード】
N0667D

【作者名】
星河 翼

【あらすじ】
遠未来SF風味ファンタジーです。核戦争後、時代は原子暦を迎えた。人間がヒューマノイドを造ることだけを条件に生きている時代。そして法律はたった三箇条しかなかった。そんな時代に生まれたアメリカ人のアイーシャは、バスケット選手のヒューマノイドを造るエンジニア。しかし、決勝戦を迎えてそのヒューマノイドが暴走し壊れる。代わりに選手として出場してしまったアイーシャは嘘がバレてしまい、死刑宣告を受ける。そんなアイーシャの未来の成長と伝説の物語。バスケット好きの方が必読していただけると嬉しいで

५.

#1 アイシャの罪

人は、生と死の狭間で生きている。

もし、罪を犯してもやりたいと思う事があるとしよう。そんな時あなたならどうしますか？

それが、罰として死を宣告される物であったならば、あなたはど
うしますか？

諦めるか、引き継ぐか？

それは、あなたの心一つ。

神は何も応えてくれません。

さあ、どうしますか？

勿論、悩むでしょう。

それが、人の心です。

心無くして人は生きていけません。

感情は、動物の本能。

そして、計り知れない物。

目に見える物すべてが真実じゃ無い。

見えない物に心が隠されている。

だから、それを見つげ出してください……

原子罅。それは、核を用いた戦いの果てに創られた時代。それ迄人は、色んな戦いを些細な日常に生み出し、そしてそれを実行して来た。

メディア間の論争、批判。それを煽る民衆。

その結果、争いは各国を揺るがし、その勢いは最終手段として、核スイッチを押させてしまった。そして世界は闇に閉ざされた。

それから、二千年の時を経て人類は、苦難を乗り越え核排除に乗り

出し、全ての戦いと言う物を切り離れた。ただ平和を願う為に。

原子暦ではヒューマノイド（心の無い電子頭脳を持ったロボット）が全てを担っている。人が生み出したモノとして、日常に欠かせない者として存在しているのである。勿論、性能の良いヒューマノイド程貴重とされた。それを造り出した者にはそれに応じた報酬が得られる。人に近い高性能のヒューマノイド。それを造り上げる事が人類の生活の全てである。その事を、人類は当然だと信じていた。それこそが平和の糸口であるのだと。ヒューマノイドに一縷の望みを託してきた。

- 一、 核を持たない。
- 二、 人類は争う事をしてはいけない。誘発する事も許されない。
- 三、 ヒューマノイド以外仕事に従事してはいけない。人はヒューマノイドを造るだけであり、それ以上ではない。

この三箇条を守れない者は、即刻死刑。

各国の掲げた法はたったこれだけであった。

争い……それは、ヒューマノイドだけが許された特権でもあった。故に、スポーツも、ヒューマノイドしか出来ない物であった。男女を問わない平等な世界。人は、ただ、観戦するのみ。自ら造り出したヒューマノイドに全ての思いを託し、見守る。その為、優秀なヒューマノイドを造る勉強は人類の憧れであり、誇りでもある。人間の出来る事は、限られた制限の中、なされる。そう、ヒューマノイドが全てであった。これはそんな時代の物語。

「アイーシャ！そろそろ始まるぜ？試合！お前観るって言ってただろ？時間だぞ！」

ここロサンゼルスは、核戦争で、他程被害がなかった温暖な土地

であり、放射能汚染も無い豊かな都市であった。大昔は、ハリウッドからも近い有名都市で、観光客で賑わっていた。らしいが、今はその影は無い。ヒューマノイド制が出来上がり、ただの居住区と化していた。

東半島は、海に沈没。有名なニューヨークや、首都ワシントンは沈んでしまった。アメリカ合衆国は、ミシシッピ川を中心に地図中央で断ち切られ、西海岸側が残されるだけとなった。

世界は、ここロサンゼルスを中心に回り、公用語も英語を使われるのが当たり前の中となっている。

「ジョン！ワツリー行こうって思ってたけど、この子の調整が上手く行かなくてね。試合は次だろ？何とかしなくちゃ……しかし、何だって決勝からガードの身長が五・四フィート（一六五センチ位）でも良くなっただらうね？」

アイーシャは文句を垂れなくなっていた。中学生の身長を考えると、頷ける（アイーシャ自身同じ身長）のではあるが、造る方に言わせれば、高い方が良いに決まっている。このスポーツは、身長を必要とする種目だ。それを考えると、時間があれば少しでも性能を重視したい。だから最終調整の出来るロッカールームでこの手を休める事など出来やしないのである。

「知らねーよ！上が考えている事なんざ。只の気紛れだろうよ……とにかく、俺は先に行ってるぜ。調整がついたらお前も来いよな！」
「判ってるって！このあたしを誰だと思ってるの？ガード兼、ポイントゲッターのこのアイーシャ専属のエンジニアよ！今回だっこの子に頑張って貰わなきゃ！優勝で得られる賞金はこの子で決まるんだもの！」

背中 of 装甲板を開きコードを引きずり出しながら、まだまだかかりそうな調整に熱中する。

この子はあたし。あたしの夢なの。

ヒューマノイドの造りは、アイーシャ自らを模した体つき、顔つきをしている。（いや、胸だけほんの気持ちだけ少し大きめに造っ

ているが……) 皆、それぞれ好きな顔や体つきを造り上げるのが普通なのである。しかしアイーシャは、そう言うのを嫌った。ヒューマノイドには、必要な知識、言動、行動パターンは埋め込まれているが、心は無い。必要に応じた反応は見せるが、まだまだ子供の造るヒューマノイドに人間らしい表情は見せられない。アイーシャは、そんなヒューマノイドをどれだけ人間に近づけられるか？それに没頭する事に力を注いでいた。

「けど間に合うかなあ」

あと、一時間余り。その間に、底上げの為の装置と、それに合わせたモーシオンを造り上げなければならない。調整とかそんなレベルの話では無かったのである。

「ま、出来るところまでやろっか。」

気軽に考えていた事が、後々大変な事になるとは……今この時点では考えも及ばない事態が起こるうとは知る由も無かったのである。

試合会場は、中学生対抗の準決勝との事で盛り上がっていた。それぞれのベンチには、エンジニアと、ヒューマノイドが控えている。その他の控え選手はいない。故障や退場が出たらその時点で負け。完全なる五対五の戦いである。

スコアボードには、『ライトウェイティング』と、『ミステイングウォーズ』の名前が表示されている。透明ボードはライトで光り、それに設置されているリングと底なしネットは静かにそこに取り付けられていた。

「ジョン！アイーシャは？」

「最終調整だつて。全く、この地区で一流のエンジニアと謳われているのに、身長のお知らせを忘れるなんてボケかますんだからなあ」
「ま、そのうち来るだろうよ……俺らは決勝に行く前にこの試合を観戦して事で良いじゃん」

「そうシケ込んでるか？アイーシャなら何とかするだろうよ？さて、時間だ！」

抑揚の無いヒューマノイドがコートに入ってきて来る。審判のヒューマノイドが一礼を促す。そして、中央の円に入る二人のヒューマノイド。笛が鳴り審判はトスを高々と宙に放り投げる。お互いのヒューマノイドはジャンプをし、試合は始まった。この種目とはこの時代でも有名なバスケットボールであった。

「凄い歓声……観れないのが残念だ。」

ロッカーの片隅に胡坐をかいてツナギをタオル代わりに汗を拭きつつ工具を扱っているアイーシャは、集中力に欠け始めていた。人間集中力を欠く事もある。どんなに熱中していても気になる事が頭を過ぎらないなんて事は無い。時間に追われている身であろうと気になる事は頭に有るものだ。

ライトウエイティングが勝つのは目に見えている事だけど……ミステイニングウオーズは今調子を上げ始めたチームだわ。どんなヒューマノイドを調整して来ているんだろう？負けられない！

底上げ部品は取り付けた。後は、それに見合うプログラム装置だけ。厄介だなとは思うが、これをしないと、コートでの働きは上手く行かない。

ヒューマノイドの頭の装甲板を開くとアイーシャは細かい修正プログラムを植えつけようと、要のブレインを取り出す。そして、持ち運んでいたノートパソコンのデータを交換し、直結回路に繋げた。ここ迄は順調だった。後は、データを新しくインストールするだけ。

しかし、ミスを犯したはずは無いのだが、突然ヒューマノイドは暴走を始めた。メモリーにバグがあったのか？それとも、拒絶なのか？ヒューマノイドは、奇妙にギシギシ音をたて立ち上がり、ロッカーに激しく頭をぶつけ始めたのである。

「何なのさ！これは！」

突然の暴走に、手を施すことなど出来ない。アイーシャは、この不可解な暴走を止めようと慌てて直結したコードを思いっきり引き

抜く。すると、暴走を止める事は出来た。止める事は出来たは良いが、ヒューマノイドの体の至る所から煙が立ちのぼったのである。

シヨート？そんな莫迦な！

焦ったアイーシャは、直ぐさま、ヒューマノイドの全ての装甲板を取り外し、原因究明を試みようとした。が、原因は判らずじまい。「もう、時間が無いってのに！この莫迦〜！」

ヒューマノイドに罪は無い。しかし、自ら間違った操作はしてはいない。ただの不慮の事故。こうなると自信が無くなった。これからシヨートしたこのヒューマノイドを直し、もう一度データ書き換えをし、皮膚移植。など出来はしないのである。

前半戦はもう終わった頃だ……落ち着け……こうなった時の対処は……？

選手登録が済んでしまっている今、予備のヒューマノイドを使う事は出来ない。いや、予備を持ち合わせていないのが現状だった。胸の鼓動が鳴り止まない。緊張感と絶望が押し寄せてくる。

落ち着け！この日の為に、頑張つて来たんじゃない！チームに迷惑を掛けるなんて冗談じゃない！……落ち着け！

アイーシャは、チームを大事に思っている。賞金も掛かっている。アイーシャをポイントゲッターと信用しているこのチーム。それを絶対裏切れない。

そして考えた末……

あたしが責任をとって、ヒューマノイドとして参加するしかない！

これだった。

これは、バレたら最期、死刑である。でも、残り少ない時間でこのヒューマノイドを選手として直す事などアイーシャには出来はしないと観念した。そして、アイーシャは、ヒューマノイドに着せる

はずのユニフォームに着替え、逆にヒューマノイドを自らに見立て、今着ている油と汗の臭いがするツナギを着せながら、せめてこの試合だけエンジンニアとしてのアイーシャの働きが出来るように改造を一か八か試みたのである。

「アイーシャ！試合終わったぜ！ライトウェイティングが決勝に残った！観に来なかったようだけど、調整は済んだのか？」

ジョンを含めたチームメイトの四人が揃ってロッカールームのドアを開け戻って来た。

「スゲー試合だったぜ！」

「最新ヒューマノイドが居たんだ。あれはこの試合用に調整して来たんだろっよ！」

興奮冷めやらぬ雰囲気、ザワザワとジョン達は話をしている。

「そう。こちらも負けてはいられないわ」

一言。アイーシャは瞬きもせず振り返った。

「それが、最終調整済みのアイーシャか？もう、ユニフォームまで着せちゃってさ！意気込んでんな！」

皆がロッカーにもたれ掛かっているアイーシャのヒューマノイドを眺めた。

「すっげーな！まるで人間みたいじゃないか！」

ジョンが駆け寄ろうとした瞬間、

「そう。でも触らないで」

素っ気無くアイーシャはそれを言葉で止めた。

「んだよ！触っても減るもんじゃなし……」

触れようとしたジョンは、ぶつくさと自らのヒューマノイドに今度は手を伸ばし、赤地に黒の『エンジェルズ』と言うチーム名が入ったユニフォームを着せ始めた。それを合図に、他のエンジンニア達も自らのヒューマノイドにユニフォームを着替えさせ始める。

ホッ……取り敢えず、何とか誤魔化したようだ。このままバレない様にしないと……

ヒューマノイドのアイーシャに化けた、アイーシャは、ロッカーにもたれ掛かったまま冷や汗を背中に感じながら一息つく。その頃には、皆、ヒューマノイドの電源を入れ、自らのヒューマノイドの性能を確かめながら、決勝戦での作戦を練り始めていた。

こうして改めて控え室内はこれからの決勝戦に向けて活気に満ち溢れ始めるのであった。

試合開始。エンジニアとヒューマノイドと共にベンチに入ったアイーシャは、自らこれから行う罪深き行為。選手としてコートに立つ事に生唾を飲み込んだ。

バレないだろうか？もしバレたら？

最悪なことを考える。でもここ迄来て出れないなんて事は言えないし……自ら勝ちに行く事をぶち壊す事なんて出来はしない。賽は投げられているのである。否、投げってしまったのは自分だ。だから文句は言えない。

決断した自分が、今更何を考えているんだろう？無敵のエンジニア、アイーシャらしくない！

いつだって、自信に満ち溢れていたハズの自分。でも、生か死か？二つに一つの局面だ。

神よ、貴方ならどうすれば良いと思いますか？

そんな事を考えながら、今鳴った笛の音に身体を強張らせる。これ程緊張した事などない。初めてヒューマノイドを試合に出した時の緊張感とは全く違う。今コートに踏み込んだ瞬間、心臓の音がコート中に反響してしまったのではなからうか？そんな事迄考えてしまっただけだ。

……えい、成るように成れ！

天井から照らされる眩い光の渦。コートに足をまた一步踏み入れると、周りからの歓声が地から沸き起こったかのように鮮明に耳に届いた。その感触が余りにリアルで、足が地に着いてない気分だ。

静まれ心臓！

バスケットのルール、及び、どうすればゲームを制することが出来るかは自らの身体で何度も研究して来たはずである。ヒューマノイドに植えつけるブレインの為、試合自体出る事は無いのだが、自宅の備え付けゴールでシユートのタイミング、角度など念入りにやっけて来た。ただ心配なのは、このゲームに耐えられるスタミナがあるかどうかであった。でもそんな事で弱気になっではいけない。他の誰よりも、このバスケを好きなのはアイーシャ自身である。そんな自分が、今このコートに立っていた。

こんなアイーシャの気持ちを知らない他の、感情の無いヒューマノイド達と共に整列し、一礼。キャプテンであるアイーシャは、円の中に入り、トスが上がるのを待つ。敵のアンドロイドとの身長差は歴然。敵はセンターのヒューマノイドなのである。

身長差が何？負けるもんか！

いつしか、闘争心なるものが芽生えていた。映像のスローモーションかとも思える程ゆっくりボールは高々と上がった。それと共に、今、アイーシャは高々とジャンプしたのである。ボールは、ジャンプのタイミングの良かったアイーシャの手に弾かれ味方の手に渡る。

『速攻！』

味方の手に渡るや否や、アイーシャは一直線に敵のコート内にダツシュ。そして、味方からのロングパスを受け取ると、一気にドリブルし、ゴール下に潜り込むと同時に先制点を入れたのである。

それから先、相手にボールが回るのを見越してスティール。既にダツシュしている味方にパス。いつしか、アイーシャはこの試合の核となっていた。

「あのエンジニアズスの四番……えらく精密に造られてるんだな。本当に人間みたいだ！」

ライトウエイティングのエンジニアの一人が感心して見詰めていた。

「ドリブル、シュート、パスカット、判断力。どれを取っても無駄な動きが無い。それに、汗？皮下組織まで人間の物を植え付けているのか？信じられない！」

そんな事をベンチ中で囁いていると、

「あれが、天才エンジニア、アイーシャのヒューマノイドだよ。よく観ておくんだな！」

ベンチの上の客席から一人の東洋系の少年が叫んだ。しかし、その表情は何かを悟っているかのようでもあった。

前半戦。それは、六十対三十のダブルスコアでのエンジニアズスの圧勝だった。そしてハーフタイムに入る。ヒューマノイド達は、自らのベンチへと足を運んだ。

「アイーシャ！すっげーな！どうやってたら、こんなヒューマノイドを造る事が出来るんだ？」

チームのエンジニア四人は、ベンチに下がって来たアイーシャを歓迎した。

「あたしが造った。当たり前だ」

控えているアイーシャのヒューマノイドは答える。冷ややかな、まるで心の入って無いような視線に、どうしたんだと言う視線をエンジニア達は向けていた。

「何でもない。気にしないで」

無表情の一言一言。それは、人間味の無い言葉である。それを不審に思ったジョンは、

「お前、何か変だぞ……どうしたって言うんだ？」

「何でもない。気にしないで」

同じ言葉にジョンは、瞬きもしないエンジニアに扮装しているアイーシャの胸ぐらを掴んだ。それを見兼ねたアイーシャは、
「何をするんだよ！アイーシャは、気分が優れないんだ、そんな乱暴な事はしないでくれる！」

思わず、選手で出ていると言っことも忘れ、ジョンの腕を掴みあげてしまったのである。

「！」

アイーシャはしまった！と身体を強張らしてしまった。それと同時にジョンは、細い目をギョツとする様に見開き、そして、アイーシャの二の腕を掴んだ。

「……悪いけど、アイーシャ……こいつ借りて行くな……」

その言葉の返答を待たずに、控えているアイーシャに断りを入れながら、アイーシャの腕を掴み、ジョンは控え室へと向かったのであった。

それは、端から見ると不思議な光景だったかも知れない。

「どう言っつもりだ！ヒューマノイドと入れ替わって試合に出るなんて！お前、死刑になりたいのか！」

ジョンは、控え室のドアを閉めると、怒りの頂点にでも達したかの勢いで、アイーシャを罵った。こういうことは良くある事だ。ジョンはアイーシャとは幼馴染。今迄喧嘩は日常茶飯事だった。でもこの時ばかりは事態が事態だけにジョンの表情は強張っていた。

「覚悟はしてるわよ……もし、バレたとしても、ジョン達は共犯なんかじゃ無い！あたしが全ての責任を持つ！だから、この決勝戦このまま行かせて！」

真剣だった。今のまま出たら、この試合は勝てる。負ける事なんか考えられない。

「勝ち負けの問題じゃねーだろうが！それに、俺はこんな事してもらっても嬉しくも何とも無い！チームの皆だっそうだ！な、今からでも遅くは無い、辞退するんだ。いや、俺から辞退を申し出てく

る！」

ジョンが、扉を開こうと背を向けた時、アイーシャは、ジョンの腕を勢い良くとった。

「嫌！あたしの意思なの！お願い！このまま出させて！これが、中学最後の試合なのよ？あたしのミスで負けるなんて、辞退するなんて言わないで！悔いなんか残したくない！」

アイーシャは真っ直ぐな瞳でジョンを見上げた。それは揺るぎの無い澄んだ瞳だった。

ジョンはこのアイーシャの迫力に押されてしまっていた。今まで、このアイーシャの頑固な姿勢は何度だって見た事が有る。が、その何倍もの真剣な、何かに魅入られているような色が見え隠れするのは？何故？

「何がお前をそんなに掻き立てるんだ？落ち着けよ……チームから死刑囚なんか出したくないんだ……頼むから、終わりにしよう？な？」

限界だ。大切な仲間を失いたくは無い。こんな事で！ジョンの思いは一つだった。まだ先が有る人生を、こんな事で無くすのは間違っている……思いとどまらせたい。

「楽しいんだよ……」

思わず溢したアイーシャの言葉に、

「え？」

禁断の言葉を聴いてしまった。

「試合に出て、どうやって攻めたら良いのか？守ったら良いのか？シュミレーションしながら、勝ちに行くのがこんなに楽しいだなんて……自分一人で想像していた頃には無かった物が今ここに有るんだよ！こんなに心が熱くなる物が有るなんて、考えもしないぐらいに！」

アイーシャ自身では、心の中の突き動かす物の正体は何なのか判っていない。だけど、確かに存在するのである。言葉にはし難い想いが。

それがアイーシャを捕らえてならなかった。思わず自らの掌を見てしまった。ワナワナと震えが止まらない。しかし、アイーシャ自身がそれを握り潰す。

「ダ、ダメだ！」

「ならここで、あたしを殺しなさい！今、直ぐ！」

アイーシャの眼は瞬き一つせず、ジョンを睨み付けていた。

「出来る訳ないだろう！何を考えているんだ！」

「バレたら死刑なんでしょ？なら、今殺されたとしても問題は無い！」

それだけ、あたしは真剣なのよ！という決意が固まった、覚悟した眼だった。

「何を言っても、無駄なんだな……？」

「二言は無い！あたしがキャプテンよ！」

誰にも止められない！あたしの意志は！

時間だった。ジョンは、この不穏分子の意志を曲げる事が出来なかった。死を正面から見詰めている人間程強い者は無いのかも知れないと、そう判断した。

「地獄に堕ちるぞ……」

「もとより承知！」

ジョンは、最後に一つだけ言い残した。

「俺達は無関係……それで良いんだな？」

「判っている！」

その後二人は無言で控え室を後にしたのである。

コートに戻ったとたん、後半戦が始まる。

この試合の結果は誰の目にも明らかだった。ぎこちないヒューマンノイド達の中に混じって、生身の人間が闘っているとは知らないが、俊敏なアイーシャの防御の手は蜘蛛の巣の網の目に掛かった餌のように身動きが取れない。

逆にアイーシャの判断力。ポストプレーに徹する味方の動きを察

知して投げ込むボールは確実に得点を重ねる。カットインして行くタイミング、スリーポイントシュート。どれも、頭に描いたような美し過ぎる位の完璧さがあった。アイーシャは、満足だった。これ程の事が出来るなんて、思ってもいなかった。何故人間ではいけないの？この試合をするのが……唯一つ疑問が残る。

結果は、トリプルスコアで終了。エンジェルズの完全なる圧勝による優勝だった。

全ての歓声は、アイーシャに向けられていた。誰の目にも明らか
な優秀なヒューマノイドとしての働き。このリーグ戦での決勝戦、
VPは彼女以外ない。皆の気持ちは一点に絞られていた。アイー
シャ、ジョン、そして、観客席にいたもう一人の者以外は……

試合終了後、程なく表彰式が始まった。

エンジェルズのチームの一人一人のエンジニアに手渡される、表
彰状。皆感極まり無いと言った感じで受け取っている。それからキ
ャプテンのアイーシャに賞金が……

しかし、最悪な事にその賞金を受け取った瞬間、アイーシャはシ
ョートしてしまったのである。

審判団、そして観客は何が起こったのか、驚きの表情を見せる。
何が起こった？と言う事？煙？しかし、事を察した者達はブーイ
ングを浴びせ始めたのである。あの表彰台にいるのがヒューマノイ
ドで、試合に出ていたのが生身のアイーシャ。だと気がついたから
であった。

「し、死刑だ！そんな奴は、今直ぐ死刑だ！」

そんな罵声が飛び交い始めると、咄嗟にジョンは振り返り、

「逃げる！アイーシャ！」

故障したヒューマノイドのアイーシャの後ろに放心状態で突っ立
って事の成り行きを見詰めていたアイーシャは、ハッと気がつき、
莫迦！そんな事言ったら共犯になるじゃない！と心で叫んでいた。

疲れた身体でアイーシャは、表彰台の上にいるジョンの腕を取り上げると、引っ張り、このコートを出るように促した。

「バカじゃない？これはあたしの罪！他の誰も関係ない！」

罰はあたしが受ける！

観念したアイーシャは、審判達の取り押さえに身を委ねた。為されるがままに。

今このコート内に誰一人味方はいない。観客席にもだ。そう、今このコートには犯罪者、アイーシャに物を投げつける物達で喧々囂々。荒れてしまっている。こうなってしまうては、誰も止めることなど出来ない。前代未聞の犯罪者なのだから。

そこに、

「犯罪者、アイーシャ・ヘイズ。逮捕する！観客席の者達！これ以上の愚拳を行う者は即刻逮捕だ！」

特殊警備員にガチャリと手錠をはめられたアイーシャは、俯いたままコートを横切るように、その場を後にした。

「一体どうなっているんだよ！ジョン！」

チームメイトはアイーシャに何が起こったのか？未だ理解出来ていなかった。束の間の喜び。

「……本当。莫迦だよ、あいつ……」

ジョンは、独り罪を背負ったアイーシャに対してボソリと呟く事しか出来なかった。

特殊警備員に導かれ、護送車に乗せられたアイーシャは、一度も口を開かなかった。両親、兄妹に何と言う汚名を残してしまったのだろうか？自らのエゴで行ってしまった事はもう取り返しはつかない。でも、満足感と言うモノが心には有った。罪深き行為の果てにこれとは……涙より、笑いが込み上げて来た。

「何を笑っている！ふざけた小娘だ！さっさと死にやがれってんだ！」

警備員の一人がアイーシャを蹴りつけた。

それでも、アイーシャの口元は笑っていた。どれだけ罵られても、この気持ちは揺るがないものである。と信じ切っていたからだ。

そんな折、無線が入ったみたいであった。

「了解しました」

運転している護送警備員は、今走って来た道をいきなりUターンした。その為、アイーシャは車の端まで転がってしまった。

アイーシャは、何が起こったのか判らなかった。一体今の無線は何だったのか？その事に意識を馳せ様とした時、先程ケリを入れてきた警備員にもう一人の警備員が何やら囁いた。そして、アイーシャはその警備員が次の行動を起こすのを防ぎ切れなかった。自由の利かないアイーシャの口元に何かの薬品を嗅がせようとしたのである。抵抗しようにも無理だった。アイーシャはまともにその薬品を嗅いだ。その瞬間、ゆっくりと意識は遠く夢の中へと誘われたのである。

#1 アイーシャの罪（後書き）

バスケットが好きの方が読んでいただければ、多分判り易い内容となってるかと思えます。ルール説明、余りしていないもので。それでも、楽しんでいただければ幸いです。

#2 邂逅

「御気分はいかがかな？」

白い服を着た一人の医者らしき者が囁いた。

「ここは……」

自らが何処に居るのか把握できなかった。

真っ白い天井。それに綺麗な昇目が入っている。身を起こそうとしたが、身体が痺れてしまっているかのようで動かない。

「麻酔が効いています。まだ動くことは出来ませんよ。え〜では質問します。君の名前は？」

「……アイーシャ。アイーシャ・ヘイズ」

「歳は？」

「十四歳……何です？この質問は！」

「成功です！ミスター八神」

医者のお尻に控えていたのか、その八神と言う、黒髪を綺麗に短く切りそろえた少年が腰を上げて、自らの横に近寄って来た。

「ドクター。サンキュー」

軽く会釈したのと同時に、八神の横を医者は歩いてこの部屋を何事も無かったように出て行った。

「ここは、何処なの！あたしに何をしたの！貴方は何者なの！それに……さっきの医者は人間じゃないか！」

アイーシャは、訳が判らないこの状況を打開したかった。あの時の事はよく覚えている。薬を嗅がされた。でもその先の事は全く判らない。

死刑は済んで、あたしは、死んでしまったの？

でも、身体に痺れがあると言う事は、生きている証だ。

「アイーシャ。君は、これから、僕、八神の下で働いてもらうようになる。僕が造り上げたヒューマノイドとしてね」

意味が判らなかった。何故あたしがヒューマノイドとしてこの少

年に従わないといけないのか？

「君を、僕が買い取ったからさ。死刑囚になるよりはましだろ？言っておくけど、君の脳にはチップを埋め込ませて貰った。僕に逆らおうとすれば、その時点でジ・エンド。だよ」

何だ？つまり、あたしの頭に、爆弾が埋め込まれていると言うのか？一体何故そんな事をされなくてはならないのであるのか？

「君の体力が戻ったら、日本に飛ぶ事になる。僕の祖国さ。僕の忠実な者達と共に、そこで、君にバスケットをしてもらいたい」

このあたしに、バスケットを？日本で……

「ちよつと待って！あんた、日本人なの？あの国は、既に海に沈んだんじゃ……？」

そう聞かされていた。小学校でも習った。先進国の中で、一番最初に沈んだ国。日本。

「いや、僕は生粋の日本人。よつて、日本は海の底ではない。ちやんと存在するよ」

八神と言った少年は、初めて言葉を発したあたしに気がつき、クスリとだけ笑った。

「あと、僕はこう見えても、君より遥かに年、取ってるから」
年を取ってる？つて一体何歳なんだ？どう見ても、あたしより年下か同じくらいに見える。

それより待て？何でこいつには、あたしの考えていることが分かるんだ？埋め込まれたチップとやらが、思考パターンを読み取れるような仕組みにでもなっているのか？疑問が沸いた。しかし、八神はその事については何も語らなかつた。

「まあ、命拾いはしたんだ。好きなだけバスケットが出来るんだつたら、あたしは文句無いよ？」

その時は本当にそう思っていた。そしてこれが、アイーシャ・ヘイズの伝説の始まりであった。

次の日、体調が良かったので退院したあたしは、この得体の知れ

ない八神と一緒に日本へとロサンゼルス空港から飛行機で発つ事になった。この時代、パスポートなんて物は存在しない。身分証明書さえあれば、何処にでも行き来することが可能である。便利と言えば便利だ。面倒な手続きがない分だけ、時間が掛からない。それに、あたしの存在を隠しておくには全く持つて良いシステムであった。「アイーシャ？君の身分証明書。無いと困るから僕が用意したよ。偽造ではないから心配しなくて良い」

八神があたしにそう言うて渡してくれた物は確かに本物だった。カリフォルニア州の判子が有る。が、何故かカードの色が違う。

「新しく発行してくれたからね。色が違うのさ。何も気にしなくて良い」

八神は言い添えた。

そんな事が有りながら、あたしは安心して日本に着くまで、ずっと寝ていた。まだ少し体がだるいのも手伝ってか、機内食を食べることなく熟睡していた。だから、日本に着いた時の衝撃は何とも言えないものだった。飛行機から降りる前、あたし達以外誰一人として席には着いていなかったからだった。

「ここが日本？」

空虚な世界が辺り一面に広がっていた。スモッグが掛かったかのように視界は白く、パラパラ舞う埃で目が霞み乾燥しそうだった。そして建物という物は、見当たらない。そう、有っても鉄骨の残骸だった。

「日本は、こう言う所さ。四季など無い、荒れ果てた世界の果てのような所。誰も来たがらないような、寂しい国なんだよ」

八神は何か思いつめたかのような、眉間に皺を寄せた表情でそう言うつと、荷物を運び始めた。

「この荷物は、殆ど君の物だから。自由に使いなさい。発つ前に一揃えしてはおいた。何か足りない物が有ったら言いなさい。これからの生活は、この僕の判断で決まるからね」

一言そう言つて、八神は空港のスロープを降りて行つた。

その後、空港前にあるロータリーに止まっている、一台のおんぼろ車に声を掛けてあたし達は乗り込んだ。タクシーって訳ではなさそうだった。

「八神？その子か？お前が捜してきた最期のパーツは？」

運転手が何か話しているが、何処の言葉なのか？あたしには聞き取れなかった。

「ああ、最期の駒だ。これで、試合も出来る。良い駒が揃つたよ」

八神も、自分には分からない言葉で何やら話している。どう言う事なんだ？今では英語が共通語のはずではないのか？日本と言う国は、一体どういう国なんだ？気になり、あたしは、八神に尋ねた。

「日本は、隔離されているような場所なんだよ。だから、皆日本語しか話さない。いや、公用語を話せる奴もいるが、話そうとはしないだろうな？コミュニケーションを取ることは難しいかも知れないね？特に君は」

特に君は。ってどう言う意味さ？あたしはこれでも少しは融通が利く方だつて思っている。何だかカチンときた。がしかし、目的地に到着してから、その理由が分かった。

「ここは、静岡県と言つてね、富士山を一望出来る所だ。そして日本が一番栄えている。と言うか、一応首都なだけどね？」

一つだけ突き抜けて高い山が見える。あれが富士山？頂上から裾野そのにかけて、白い雪らしい物が掛かつていた。

「寒いですね……」

あたしは、飛行機を降りる時渡された、コートを深々と被り直した。こんなところで生活など本当に出来るのか？それが頭を過ぎらない訳は無かった。

「それは仕方ないね。日本は冬しかないんだから……ロサンゼルスとは大違いさ」

そう言つと、八神は車のトランクから荷物を運び出した。それを

手伝うように、ブルゾン姿の運転手も手を貸した。

あたし達は、空虚な土や砂しかないだっ広い世界にポツンと建っている、プレハブの様な小屋へと足を運んだ。

「八神監督！お帰りなさい！」

狭いプレハブの中は人でギュウギュウ詰めになっていた。むさくるしいとは思ったが、その分暖かい。しかし、何処を見回しても男ばかりだった。それに、ヒューマノイドじゃ無い。皆れっきとした人間だった。まあ、こんな辺境の地に、ヒューマノイドなど居る筈も無いか……

「みんな元気にやってたか？これで僕の旅も終わりだ。最期の一人を紹介する。アイーシャ・ヘイズだ」

あたしは、ドンと背中を押されてその輪の中に入っていた。

「ふ〜ん。外人かよ。しかも、女？けっ！」

何か今、差別的な言葉を発せられたような気がする……と思うのも、侮蔑に似た視線を周りから感じたからだった。

「彼女は、ロサンゼルスから来た。ヒューマノイドのエンジニアとして参加していたのを、自らが試合に出たつわものだ。まあ、仲良くやってくれ！ポジションはポイントガードだ」

何を話しているのか分からなかった。けど、ロサンゼルス、ヒューマノイド、エンジニア、ポジション、ポイントガード。だけは聞き取れた。つまりは、あたしについての自己紹介なのだろう。

「英語しか喋れない、温室育ちの根性なしにここでの生活が耐えられるのかねえ〜？」

一人の、やたら体のでかい男が腕を組んであたしを見下ろしていた。何を言っているのか？でも、完全に莫迦にされている気がする。「そう言ってくれるな。彼女の根性は、筋金入りだぞ？死刑だと分かかって、試合に出たのだからな？」

何なんだ？この日本語の嵐は！言葉が通じないと言うのがこれ程イライラするなんて、思ってもいなかった。

「皆、何て言ってるんですか！」

短気なあたしは、ついに切れて、八神に問いかけた。すると八神は、日本語に慣れなさい。とだけしか言わなかった。

「慣れる？だつて！ふざけないでよ！」

あたしは、英語でまくし立てようとしたが、

「おい、女のヒステリックって嫌だよな？おおコワ〜イ」

あたしよりほんの少し身長の高い位の狸顔たぬきの男が英語でそう言った。

「あなた、英語喋れるんじゃない！なら、英語で喋りなさいよ！」

しかし、次の瞬間、

「俺は、英語、喋れま、せ〜ん？」

と、さっきの流暢な英語を忘れたかのような口調でそう言ってきた。ムカツク。何でこんな扱い受けなきゃならないんだ？そして、この思いを何処どこにぶつければ良いんだ？腸はらわたが煮えくり返りそうな気分だった。

「おいおい、お前ら。冗談を言うのはその位にしとけよ？仮にも女の子だ。それに、これからは仲間なんだぞ？チームとしての力は何処から生まれる？信頼関係だ！」

八神は、彼らに何か言ったらしい。それが、注意だと分かったのは、彼らの目が真剣な物に摩り替わったからだだった。

「アイーシャ？郷に入らずんば、郷に従えだ。だから、今はとにかく早く慣れる。今日は、こっちに着いたばかりだから、練習風景でも見ておけ。明日からは、お前も練習に参加だ。以上」

八神は、それを言うと、

「お前達、練習しに行くぞ！用意しろ！」

また、日本語だ。

気が狂いそうだ。ロサンゼルスが懐かしい。しかし、郷に入らずんば……ってのは理に適う事だと思う。今まで、世界がどうなっているかなど全く興味が無かったあたしだったが、少しだけ理解できたような気がした。この日本という国の有様を見て。

あたしは、他の皆の後に従って、建物の残骸の間を潜り抜けるように自転車を走らせた。八神は車で移動してしまった。そして一時間かけて辿り着いた先には、大きな古びた古代の遺物かとも思えるような建物があった。

屋根が一部、破損しているかのように概観からは見えだが、中に入ってみると、何て事は無い。しっかりとしている。まあ、それでもあちらこちら傷^{いた}んではいたが。それにしても暗いなあ、電気が無いのか？

辿り着いたらまず、着替えを始めた。あたしの場合、今日は見学だから皆が出てくるのを倉庫の外で待つていた。

「さて、先^まずは掃除からだ！」

何やら話しているが、いきなり、モップを奥の倉庫から持ち出して、床を掃除し始めた。こういう風景は、見たことがある。しかし、人間がすることではない。異様な光景だった。

何人いるんだろう？一人、二人……指を折りながら、視線を向けた。全部で九人。あたしを入れたら、十人？あ、成る程。これで試合が出来る人数になったのかとあたしは理解した。

しかし、皆あたしよりやたらでかい。女だから仕方が無いけど、一人くらい小さい奴が居ても良いだろうに……八神は何故あたしを選んだんだろう？たまたま日本からロサンゼルスまで来て、そしてこんな奴をチームメイトに引き込んで？その辺りは全く解らない。彼が考えている事など何一つ。

そんな事を考えていると、掃除が終わったらしい。あたしは、コート^{コート}の端で、モップを片付けている皆に気がついた。

「さて、始めますか？」

どうやら、指図している者は一定している。一番体格が良い、プレハブで、あたしの事を腕を組んで見下ろした奴だった。

「キャプテン、真島健^{ましまけんじ}二。お前より二つ上だ。ポジションはセンタ

ー」

八神が、パイプ椅子に脚を組んだまま座って、日本語であたしに言った。

「キャプテン？まじま、けんじ？センターポスト？」

つまり、チームの自己紹介をしていると言う訳だ。日本語をマスターさせるために、わざわざ日本語を使う。ここでやって行くには早く慣れないといけないのだから。という配慮なのだろう。

あたしは頭の中で、真島健二というキャラクターをインプットした。

「あ、言つとくが、ファーストネームが健二だからな。日本では「ファーストネーム……けんじ」

成る程、日本との違いはそんな所にも有るのか……

「まずは、ストレッチ！」

柔軟体操ストレッチを、始める。こんなに寒いと体中が硬くなるだろうに。

でも、自転車をこいだから少しは違うのか？今、自分は日本に着た時の寒さを感じなくなっていた。

「アイーシャ？神崎かんざき雲ぐもの柔軟ストレッチを手伝ってやれ！」

指を差した先を見た。九人しか居ないから一人あぶれてしまうのだろう。

「かんざきしずく……ストレッチ……」

そこには、あの英語を喋れた狸顔の少年が居た。先程の事を思い出すとムツとしたが、行かない訳にはいかなさそうだ。

「イエス！」

「はい。だ！」

「はい……」

あたしは仕方なく、そいつの背後に行つて背中を押してやった。前屈姿勢ぜんくつをしていた雫は、

「痛てーっ」

と言いながら、跳ね起きるようにして体を起こした。

「加減しろよ、バカやろう！」

何か怒っているみたいだが、さっきの借りは返した気分になった。

多分痛かったのだろう。思わず笑ってしまった。

「てめー！可愛い顔してやること考えること結構エグいんだな……
つたくよー！」

何て言ったのかさっぱり解らなかったが、何を言われてももう良い。笑つとこつ。

「解らんくせに、笑うなバカやろう！」

言いながら、押せと言っているらしく、体を前に伸ばしていた。だからあたしは、思いつき押しやってた。

そんなこんなしながら、柔軟体操が終わり、コートのをランニング。基礎的な事ばかり。いつになったらボールに触るんだろう？そんな事を思いながら、あたしはコート脇の八神が座っているギシギシ音を立てているパイプ椅子の横に膝を抱えて座っていた。

「これが大切な事なんだよ。人間にとつては。ヒューマノイドには必要無い事かも知れないがな？」

八神は、ボソリと呟いた。あたしには、ヒューマノイドの単語しか聞き取れなかった。

お次は、フットワークの基礎。ハーフコートでダッシュしては、戻って来てまたダッシュ。腿上げダッシュに、スライドステップ。サイドキックにワンステップジャンプ。特に守備に欠かせないフットワークの数々をこなしているのが分かった。

「さて、軽く汗を掻いたところで、次始めますか？」

キャプテンの健二が、皆を呼び集める。すると、一人、雫がコート奥からバスケットボールが入った籠を押してきた。ギコギコと音がする古びた籠だなと、あたしは苦笑いしてしまった。

「まずは、パス練習！」

コート両脇に立って二人一組で、チェストパスを始めた。皆均等にボールが余り弧を描かないようなパスを送り出していた。力強く手首できちんとスナップが効いたパス。ボールに回転が少し掛かるそんな美しいパス。それを見て練習し慣れているのが手に取って分かった。あたしのパスなど、こんな風にはいかない。ちょっと、悔

しい気分きぶんに陥おとっていた時、

「アイーシャ？一人足らないんだよな。行って来てやれ」

また、八神は雫しずくの方かたを指差し、三人で三角形を描くように離れてパス練習れんしゅうをしているのを指摘しゆさした。

「練習れんしゅうに加われと？あたしは今日、見学けんがくなんでしょ？」

しかし、八神は、

「基礎練習きそれんしゅうだ。走れとか、試合しあひしろとかそんな事は言っていない」

八神の表情へいしやうから、有無いうむを言わせない否定的ひていてきな事を言っいてのけているのが分わかった。

「はい……」

あたしは、渋々しぶしぶ（しぶしぶ）雫しずくが居る所ところまで行き、そして、

「練習れんしゅうに参加さんかしろって事ことだよ。相手あいてするから、雫しずく、向こうむこうに行いって！」

英語えいごでそう言いった。雫しずくは何なにを言いっているのか直ただぐに理解りかいしたよう
で、他の二人ふたりに、

「俺おれはこいつとパス練習パスれんしゅうするから、もう良いよ」

と日本語にほんごで言いった。きつと、了解りかいの意いなんだらう。パスと言いう言い葉はだけあたしは汲ひみ取とった。

「お前まへく力ちからないな。やっぱ温室育かむしちのお嬢ぢやうちゃんだな。もっと、鋭えいく、力ちから強くパスしてくれよな！ククク……」

笑わわれてしまった。あたしのパスが、他の誰たれよりもフヨフヨと宙そらに浮うかんでいる。確たしかかにここにいる中なかでは一番いちばんあたしは下手ただ。誰たれの目めから見みても歴然れきぜんだらう。でも……これでも、ロサンゼルスロサンゼルスの州しゅうの試合しあひでは活躍かつやくしてるんだぞ！と、つい過去かこの事ことが頭あたまを過すぎった。

しかし未完成みけんせいなヒューマノイドヒューマノイドとの試合しあひだったんだけどね。など決けして言いえないのが悔くしい。人間にんげんとしての能力のうりき下したで、何処どこまでの力ちからが発揮はつぎ出来るかなど、この時点しじふんで判わったり出来こるやしないのだから。そんな事ことを考かんがえながら、なるべく宙そらに浮うかないようような、せめて、取りやすいパスを投なげる事ことを心こころがけた。

それから先は、パスの基本を一通りやった。

バウンドパスに、オーバーヘッドパス。フックパスに、ワンハンドパス。

それらが終わると、今度こそ、あたしの出番は無くなった。

「連続タップ！始めるぞ〜！」

人数的には半分に分かれ、皆が一行に並び、バグボードに向かってジャンプしてからボールを置いてくる。その繰り返し。

ジャンプのタイミングがこれって難しいだろうなと思った。一人でしか練習したこと無いから、これはやったことが無い。明日からこれをやれと？自分でも全く未知のお話だ。大体、あたしは、基礎が出来てないのだ。体力だスタミナって無い。皆より出遅れている。それなのについて行けるのであるうか？だんだん不安が押し寄せてきた。

「不安か？」

八神が、ここに来て初めて英語を話してくれた。

「不安……じゃないなんて決して言えないですね。バスケットは好きだけど、皆みたいに上手くは無いです。それに……体力が無い」

思わず膝をギュッと引き寄せた。

「そう思うなら、今から脇で練習を見ながらランニングでもしろ。少なくとも、お前の心意気は買っているんだから」

「心意気？何ですかそれは？……それにあなたは一体何を考えてるんです？こんな僻地で人間がバスケットをして？一体何になると言うんです？ただのお遊びじゃ無いですか！」

あ、要らない一言が出てしまった。この言葉は失言だ。自分で言っただけ、そして虚しくなった。

「すみません……」

あたしは、自分で言った事を自分で訂正することが出来ず、行動で示そうと思いつき立ち、皆が練習するのを見詰めながら、ゆっくりランニングを始めた。これはとても辛かった。これ程体力が無いとは……とにかくそれでも休みながらも足を動かすことにした。今の自分が出る事。あたしはそれをただやるしか無かったのである。

「全員集合！」

かれこれ一時間は過ぎている頃だろう。キャプテンの健二が皆に召集を掛けた。あたしは、もう殆ど動かない足を引きずりながら、コートの外からその様子を眺めていた。

「アイーシャ！お前も来い！」

何て言ってるんだ？呼ばれた気がしたが、とにかく疲れている。足がもう動かない。

そんな時、雫があたしの所まで駆け足でやって来て、皆が集まっている方へと腕を引っ張った。

「何よ！痛いじゃ無いか！」

「集合！」

「しゅっしゅっ？」

「そう！早く覚える！わかんなきや、後で辞書でも貸してやるから！」

ズンズンとあたし達は、八神を取り巻いている円陣へと足を進め、そしてその中の一員として話を聞き始めた。

「だいぶ、身体も動かせているようだし、今から五対四の試合をする。今日はそんなに時間も無いし、三十分で良いだろう？お前達のことの所の成果も見せて貰いたいしな？」

そう言うと、チーム分け用の赤いゼッケン付きのユニフォームを五人に手渡した。どうやら、チームと言うのは決まっているらしい。「では、始める。審判は自おのずとやれ」

八神はそう言って、皆をコートへと入るように促した。

「アイーシャ？お前はここで見ている。チームの紹介をしてやる」

あ、英語だ。流石に日本語で語るには今のあたしの頭では無理だろうと思っただろう。

皆は、センターサークルを出て仮審判と、ジャンパーはそこに立っていた。

「健二は紹介したな？もう一人の方が支倉はせくわがわの薫。同じくセンター。健

二ほどには体が出来てないが、俊敏さは彼の方が上だと俺は見て
いる。年は健二と一緒だ」

ゼツケン四番を付けている、ひよろりとした背丈の高い男を言っ
ている。よく見れば、健二とほとんど同じ身長ではなかるうか？六
フィート強（百八十五センチ位）体が出来てないから、余り印象に
は残らないが……とにかくチエツク。支倉薫ね。

ここでの審判は、雫がしていた。雫がトスを上げる。と、ジャン
プ力の勝った健二がボールを叩いた。しかしそのボールは、敵方の
ゼツケン五番に渡った。

「あいつが、副キャプテンの飯塚真。スモールフォワード。ムード
メーカーで個人技を得意とするプレーヤーだ。スリーポイントは狙
ったらまず外す事は有り得ないね。年は、健二達と同じだ」

飯塚真。スモールフォワードと言っても、そんなに背が高い方
ではない。五フィート強（百七十五センチ位）ではなかるうか？見た
目クールな二枚目に見える。って、あたしの好みを言っただろう？
？さてと、チエツク。チエツク。

真がドリブルし、シュートしようとするのを遮る、一人の男。そ
れが雫だった。

「雫はさつき名前を教えたな？あいつは、ポイントガード、お前と
同じポジション。年もお前と同じだ。よく見とけ？あいつの判断力
は並外れている。まあ、アメリカ人とのハーフだからな。ここでは
浮く存在だ」

「雫ってハーフなの？そんな風には見えないけど……」

「ん？見えなくて当然だけどな？なんたって自称だから……」

八神はそう言ってクククと笑った。

「自称ね……」

しかし、雫って凄い。あの身長差で確かに真に得点を許さない。
すっかりディフェンスで喰らいついでいる。フェイクも利きはしな
い。そこに走り寄ってきた男、

「ゼツケン六番。橋田友則。あいつはパワーフォワード。機転の利

くプレイヤー。時々荒が目立つけどまあ、これからの選手だと俺は思っている。年はお前より一つ上」

友則はボールを上手く身体でスライドして取りに行き、ワンバウンドしてシュート。しかし、健二が既にゴール下をキープしていたので、高さを上手く利用しリバウンドして今度はゼツケン無しがボールを手にしての速攻。

既に走っている味方にロングパスが渡った。

「今、ボールをキープしてるのが、南英治みなみえいじ。お前と同じポイントガード。チーム、足が速くスタミナがある。粘り強いプレイヤーだ。後には引かない性格をしてるから、それがプレーにも影響しているのだろうな」

英治は確かに足が速い。誰も後ろに追いつけない。そのまま単独でドリブルしてレイアップシュートを決めた。

こうしてゼツケン無しが先取点を決めた。そう言えば、ゼツケン無しの方が、一人少ない。四人でこの試合をしているなんて思えない程に上手く纏まっている気がする。

「このチーム分けに、何か意図でも有るんですか？」

あたしは思わず訊いてしまった。

「力配分を検討してのチーム分けだ。お前には、ゼツケン無しの方に入ってもらおうと思ってる。が、ポイントガードばかりのチームになるのはおかしいから、またこれから検討し直そうかと思いつながら見ているって訳だ。ここの所ゆつくりとこいつらを見てなかったからな。また考え直さなければならぬ。だけど、みんなまだまだ成長期だ。誰がどのポジションをやるかなんてのを考えるのは、早計かも知れないがな」

確かに、言われてみればそれもそうだと思う。もし、あたしがゼツケン無しの方に入ったとする。しかし、三人ものポイントガードをチームにするのは変だろう。船頭が三人なんて……何処に重点を置けば良いか分からなくなる。

そして、試合はこちらの会話とは関係なく続けられた。エンドラ

インからのゼツケン有りのスローイン。

「今スローインでボールを受け取ったゼツケン七番が、根元春樹ねもと はるき。ポイントガード。ムードメーカーな奴だ。器用なボール捌きは見習え。年はお前より一つ上だ。」

春樹。オールコートでのディフェンスで、一人ビハインドザバツクで雫を綺麗に抜き去る。それは見るに鮮やかだった。

そのままハーフコートまで持ち込むと、ゼツケン無しは、ゾーンディフェンスに切り替わった。

「ふーん。プレスの仕方は上手くなったものだな。人数の事を考えて、力を温存することも身につけたか……」

ゾーンディフェンスとは、ゴール下に描かれている台形のラインを取り囲むように、守ることである。つまりこのディフェンスは、マンツーマンディフェンスより体力を消耗しないで済む。本来は五人で守るようになるのだが、四人しか居ないため、ボックスワンと同じようにスクエア状に陣取っていることになる。

「春樹！こっちにボール回せ！」

パワーフォワードの真が、左サイドからパスを要求しているみたいだった。それに気が付かないのか？春樹は右に右にとオフエンス陣を寄せるように指示している。おい、左が空いてるって！気が付かないのかな？と思っていたら、ノールックパスで真の手にパスが渡る。すると、真はワンドリブルで一步引いて、スリーポイントラインからの綺麗なフォームでジャンプシュートが決まった。

「作戦だったのか……」

これで、三対二。あっさり逆転。こうして観ていると、それぞれに良い所が有るように思えるから不思議だ。

「人間の力つてのは未知の物だ。ヒューマノイドにはそれが無い。心が無いからだ。決められたことは出来るが、それ以上が出来ないそれを、人間同様やっていると思われるのが僕には気に入らない……」

「そんな事を思ってたんですか？でも、人類は、罪を犯した。その

為にヒューマノイド制は出来上がったんでしょう?」

あたしは、歴史で学んだ事をそのまま問い掛けた。

「それはそうなんだけどね……」

八神はそこまで言っ言葉を切った。表情がかなり硬い。その上何を思っているんだろう?言葉では肯定しているのに表情とは裏腹だ。計り知れなかった。でもあたしは問いかけることが出来なかった。それは自分が、既に罪を犯した人間だったからだ。何も言う資格など無いのだから……

そんな話をしていると、既に、ボールはゼツケン無しの雫の手に渡り、ハーフコート迄運び込まれていた。相手は、オールコートのデイフェンス。四人しか居ないチームにとって、これはかなり不利としか思えなかった。

そんな時、ドリブルしている雫に付いている春樹がスティールに入ろうと手を伸ばしたが、それを見越して、ロールでかわすと一本のラインが出来た。

「雫!」

すかさず、雫はワンハンドで、空いたスペースにボールを投げ込んだ。あたしの目にはそこには誰もいないように思われたが、走り込んで来た、一人の男が見事にキャッチして、

ワンドリブルし、高々とジャンプした。そして、思いっきりそのままリングに叩き込んだ。

あたしは、初めてこの目でダンクをかました人間を目にし、目が点になった。

「あいつは、春日部亮^{かすがへとおる}。ポジションはセンター。このチームでのジャンプ力は一番ではなからうか?背はそう高くはないが、ここって時に実力を発揮する奴だな。ゴール下は、亮、健二、薫の三人で殆ど占めてしまっ。あ、亮は年、お前より一つ上ね」

亮。どう見積もっても、六フィート弱(百八十センチ位)だ。しかし凄い、身長差なんて関係ないんだとこの時初めて理解した気がした。

「ヒューー！流石、亮！見事に決めたじゃん！」

雫が、亮の背中をバンツと叩いていた。

「痛いぞ……雫……」

軽く手で合図している。守備に就けと言っているらしい。

「ハイハイ、旦那」

ゴールが決まったので、またエンドラインからボールが放り込まれた。

それを見越して、雫が春樹に渡るであろうボールに飛び付き、パスカット成功。よく動く足だ。

「健二！」

ゴール下は、スツカラカンで、健二しか居ない。綺麗にボールが渡った。が、すばやくチェンジして走りこんだ春樹が汚名返上と、健二のガードに付き足止めする頃には、ゼツケン有りの皆はゾーンディフェンスに入った。

「健二！ボールを出せ！」

三秒ルール。ゾーン内では三秒しか仕事が出来ないからだ。

「おう！」

健二はオーバーヘッドパスですばやくボールをゾーン外に出すと、自らも外に出た。渡ったパスは雫の元に集められる。ここからが、ポイントガードの仕事。ゲームの組み立てはここから始まるのだから。あたしは思わず魅入ってしまった。

まずこのゾーンの鉄壁防御の中で四人と言う人数で何処までやれるかだ。

あたしならどうする？センターを利用するのが基本だと思うんだけど……

そんな事を考えている内に、雫は何を思ったか、トップ二人のガードの中へとダックインで駆け込んだ。英治と春樹がステイルしようとして手を出したが、雫の方が一枚上手だった。上手く中に入り込んだ為、ゾーンは小さくなりゾーン外のスペースが空く。それを見越して、バウンドパスでボールを外に出した。

「今ボールを手にしている男で紹介は最後だ。一条陸。ポジションはスモールフォワード。オールラウンドで何でもそつ無くこなすプレーヤーだ。年はお前より一つ上」

陸。受け取ったパスを両手でキャッチすると、一つ左に揺さぶりを掛け、右サイドからドリブルで入り込む。しかし、ゾーンの中心で守っている薫が待ち受けていた。が、それをも上手く交わしてゴール下を通り越し、バックシュート。それが綺麗に決まった。

「す、凄い！」

あたしは、感動してしまっていた。雫の無茶なプレイから、ここまでの流れがすんなりと決まるなんて……まるで、示し合わせているかのようだった。

「相変わらず強引な奴らだな……」

八神はやれやれと言った風に息を吐いていた。だけど、あたしは心から凄いつて思っていた。あたしが頭で考えてる間に既に行動に移してしまう辺りが特に。

始まって間もないのに、六対三。地道に点を入れているゼツケン無しチームと、外からの攻めが濃厚なゼツケン有りチーム。これは確かに人数的にも実力的にも均等かも知れない。そんな事を考えていると、

「うーん。どうするべきかな？」

などと、八神はボソリと呟いていた。

「何がですか？」

あたしは試合の方が気になつて、上っ面な事しか言えなかった。

「このメンバーをどう編成して、アイーシャ？お前を組み込もうかと言う事だよ」

あつ。あたしもこの中でやるんだつた……っけ？すっかり見入つててそんなことすっかり忘れていた。

ちよつと待て？こんなレベルの高い連中とやりあえる筈が無いじゃないか！

……など、言えない。もし言ってしまうえば、それこそあたし自身

を否定することになる。少なくとも、ここから引き返すことなど出来る筈などない。ここがあたしの住むべき所。居場所になるんだから。

「……」

八神の問い掛けには答えることが出来なかった。そして、あたしは再び戸惑いを内に秘めたまま試合に眼を向けたのである。

最後まで見ていたあたしは、このチームの豊かな人選と、戦力を目の当たりにした。一体皆はどうしてここに集ったんだろう？あたしと同じ理由？しかし、日本にヒューマノイドなんて造ることが出来る者など居そうに無かった。と言うより、そんな高度な技術を持った文化なんて無いだろう。あの荒れ果てた土地を見れば分かる。

ならば、八神が連れて来た？それとも自然に集まった？そんな事を考えながら頭の中が悶々とする。あたしは本当にここでやって行けるのか？ただ、その事はばかりを考えていた。

#3 考えられない一日

キャプテンの健二、副キャプテンの真、そして雫、友則、英治、春樹、薫、陸、亮。もう、名前は覚えた。

試合後、皆の笑顔が八神の下集っているのを見回した。誰も疑問すら持ち合わせていない様な笑顔だった。そんな中、

「明日からの練習では、チームの変更をする。アイーシャが入ったらまた違ったチームになるだろうと思われるからな。今日はこれで練習は終わりだ。そうそう、言っておくが、来年にはお前達を連れて、ロサンゼルスに行こうと思ってる。これがどう言う事を意味するか？十分に考えて練習に励め。以上、解散！」

ロサンゼルス？って言った？今……

あたしは、皆がモツプで掃除している中、一番気軽に話せるであろう雫を捕まえて問いかけていた。

「あん？お前何にも聞かされてないんだな？俺達は、八神監督の下で、ヒューマノイドとしてロサンゼルスでの試合に出るのさ。それが目的で俺達は今バスケットをやってるの。分かったら、お前も手伝えよ。掃除。この後、食料の買い出しして、飯めし作らなきゃなんないんだからさあ〜言っとくけど、今日の飯当番は俺とお前だから」
雫は、ケロリとした顔で英語であたしにそう言った。

聞いてない〜！何だよそれは？確かにヒューマノイドとして働いて貰うとは言ってたけど、ロサンゼルスでなんて聞いてない！あたしの事が有ったつてのに、何故なのよ？八神って一体何者なんだ？バれるに決まっているじゃない。こんな人間臭い人間達が、他に何処にも居ないでしょうが！

「アイーシャ！早く掃除しろって！」

何やら日本語で雫が言っている様だが、今のあたしの頭の中はパニック状態で、それどころじゃなかった。

「アイーシャ！」

そんなあたしの肩を叩いたのは、キャプテンの健二だった。流石にハツと気がついた。かなり高いところから見下ろされている気がした。そして、この威圧感。馬顔で刈り上げた頭はスッキリしている。

「お前もこのチームの一員なら、掃除をしろ！」

日本語で言っている。解かないって！逃げ出したくなる。が、掴まった。

「掃除！」

健二があたしの手にモップの柄えを握らせていた。

「……はい」

あたしは、仕方なくモップを握って足を動かした。広い建物。使ってもいない場所まで掃除した。こんな扱いは始めての事だった。

自転車で一時間掛けて戻ったプレハブの小屋。へとへとだった。

皆が、部屋の中をうろついて、着替えをしているところを見ると、どうやらここに住むことになるらしい。にしても、汗臭いなく一瞬にして浮浪者になった気分だった。

あたしはそんな中で、自分の荷物を自ら用意されていると教えてもらったスペースに入れた。色々手が掛かる。そんな時、雫があたしの所にやって来て、

「これから自転車で買い出しだ！さてと、今日のメニューはと……」

メニュー？雫が日本語でそんな事を言っているから、眺めている物を見た。

プレハブ小屋のキッチンは二人入るにはキツイ。献立はどうやら一週間を分けて表にして書いているらしい。何とまあごく丁寧な事で

……

「今日は、木曜日だから、カレーか……面倒じゃなくて良かったぜ」

「カレーね……」

「んじゃま、行きますか？」

あたし達は、自転車に跨またがつて富士山が見える方角へと道ならぬ道を走り抜けて行つた。道案内は雫がしてくれるから、あたしはその後を付いていだけだ。にしても、人っ子一人いない。本当に店なんて在るのか怪しい物だつた。

そんな時、急な上り坂に出くわした。こんな自転車で登れるわけ無いっ！と言う程の傾斜で、あたしは仕方なく自転車から降りた。しかし、雫は何も無いかのようにスイスイと上つて行つた。

「ちよつと、待ちなさいよ！」

しかし、あたしの声が聞こえないらしく勝手に先に行つてしまつた。悔しい！と思い、あたしは走りながら自転車を押した。

「雫の野郎、初めから置いていくつもりだつたのか！」

「ゼエゼエ言いながら上つた先に、雫は居た。」

「とろいな、皆、こんな坂くらい朝飯前だぜ？」

「何言つてるのか、解んないわよ！」

雫はニタニタ笑いながら、あたしの顔を覗き込んで、

「だから待つててやつただろ？」

狸顔の癖に生意気な、ムキになつたあたしは、道も分からないのに勝手に自転車をこいでいた。

「アイーシャ！おい、そつちじゃないぞ？こつち！」

自転車に跨つたまま呼びかけられて、指をさされ、墓穴を掘つてゐるあたしは、恥ずかしくなり顔を真っ赤にしていたことだろう。

でも、力を使い果たしている今の私は、暑さで顔を赤らめっていると勘違いされていた。

「お前、体大丈夫か？」

「……」

どうしてもつと素直になれないのか？いや、まあ、あたし自身が負けず嫌いなだけださ？つて自慢にも何にもなりはしない。

その先をずつと進むと、野外販売の小さな店が出ていた。木であしらわれた露天商みたいな物だつた。

「俺、野菜類買い込んでくるから、ルーと、肉類買い込んで来てくれるか？肉は鳥チキンな。これお金だから。うん。多分これで足りるはず。買い終わったら、ここに集合」

流石にここでは英語を話してくれた。

「はい」

あたしは、肉をかう為にウロウロと辺りを見渡した。古びた服を着た人でごちゃごちゃして分からない。只でさえ視界が悪いってのに！全く何処にこんな人達が隠れていたのだろう？と思うくらい人で溢れ返っていた。仕方なく、思い切つて中に潜り込んだ。

「おっと！その姉ちゃん威勢が良いな？どうだいこの魚！獲れたて、新鮮だよ〜！」

何を言っているのかさっぱりだ。見た所、魚を手で持ち上げているから、望んでいる物とは違う事は判った。

「ノー！」

あたしはそうやって、色々な勧誘？を切り抜け、やっとの思いで必要な物を買いきり、

元の場所まで戻って来れた。

「確かに……どう？慣れた？」

雫は既に買い終えて、あたしを待っていた。そして、買い物袋の中身を眺めてそう言った。

「慣れるも何も無いだろう！殆ど押し売りじゃ無いか！」

まくし立てるあたしを宥なだめる様に、

「これが普通なのさ。ロサンゼルスがどうなのか知らないけどさ？」

クククと笑つて、自転車またがに跨ると、

「戻るぜ！これ以上時間を掛けることは出来ないから！」

また日本語を使う。ちくしょう！良い奴何だか、悪い奴何だか判らない〜！

買い物籠に一杯入った食材を乗せて、あたし達はあのプレハブ小屋に戻った。行きに有ったあの坂は、帰りは楽だった。

「たっだいま〜」

雫はノリノリで、ドアを開ける。中では、筋トレをする者。読書に勤しむ者。などで一杯だった。また胸焼けがする。男所帯は慣れているはずなのに、息が詰まる気分。

「遅かったな？明日の分まで買って来たなんて言うんじゃないだろうな？」

友則が、黒く長い髪を結びながら言った。

「んなんじゃないけど、アイーシャがまだ慣れてなくってね？」

「なら、お前が全部買ってやれば良いじゃ無いか？いつもお前が買い出しに行く時はそうだったんだから」

真がそっけない感じで言った。

でも、あたしには何を言っているのかさっぱりだった。

「慣れなきや意味無いだろ？それとも、俺達がアイーシャに合わせる事が出来ないって言うんじゃないだろう？」

「おいおい、何だかこじれている気がするぞ？と思っていた所に、何でも良いから、早く飯めしを作れ！食べれる事を待っている！」

健二が一喝いっかうした。何て言ったのか解らないが、纏めたのだろう。そう思うことにした。

「アイーシャ！カレー作れる？」

「ノー！」

んなもの、作ったこと無いわ。お手伝いヒューマノイドの仕事だもの。

「ノーじゃなくて、いいえ」

「はい。いいえ」

「仕方ない。見てるよ、そこで……」

ジャガイモの皮、人参の皮、お肉を切り、玉葱の皮を剥いで切り…… 凄く手馴れてる。

「あ、お米研いでおいて！」

「お米、研ぐ？」

「あ。アメリカ人がお米知る訳無いか……」

そう言うと、キッチンの床から白い粒々の入った半透明の袋を取り出し、そこから十杯位木箱で掬ったのを、鍋に入れた。

「これに水を入れて掻き混ぜて！白く濁らなくなったら終わりだから！」

そう言うと、勝手にあたしに任せて、雫はカレー作りの方に取り掛かった。

あたしは、白く濁らなくなるまで水を足し、抜きしながら、お米という物を洗った。こんな手間な事をしなければならぬとは……ヒューマノイドを造る方がどれだけ簡単か？など思ってしまった。

「出来た！」

あたしは、出来た物を自慢げに雫に見せた。

「ならそれ、火に掛けて。弱火でな」

「？」

何を言っているのか解らないあたしに気が付き、

「あはは、こうやって、ガスの元栓開けて、火を点ける。分かった？弱火はこの位」

「はい」

結局あたしは、お米を研ぐ事位しか出来なかった。後はみんな雫がやってのけてしまったからだ。他にあたしがしたのは、お皿を出したり、お玉で、カレーをよそったり。昨日の残りのサラダを冷蔵庫からしきひんやりした箱から出したりしただけ。

しかし、これだけの人数分をよく把握しているなと感心する。お皿に分けちゃんと足りるんだから驚きだ。

「じゃあ、食べますか？」

健二が指揮をとるかのようにして、皆が部屋の真ん中に在る台を取り巻くように座って手を合わせた。あたしも習ってそうしていた。宗教の違いだからなのか？お祈りは一切無し。これにはカルチャーショックを受けた。

「いただきます」

あたしも習ってそう言った。

「ご飯を食べる際、気が付いたんだけど、皆、右利きなんだな〜って事。あたしは左利きだから、肘が隣とぶつかって食べにくい。」

「すみません……」

と、真に言いながら食べてしまった。この席、あたし変わった方が良いのかな？なんて思っていた時に、

「あ、アイーシャ、左利きサウス（ポー）か？なら俺の隣に来いよ！俺、本当は左利き」

雫が、あたしを台の端で呼んだ。ちよつとまごついてると、

「良いから行きなよ！気にしながら食べるのって美味しく感じないよ？」

真がそう言った。

「同感だ」

健二も。皆、頭を縦に振っていた。

「皆、こつちに行けって言ってるんだぜ。来いよ！」

ああ、そうか〜何も遠慮する必要は無いんだ。あたしらしく無い事してた。って思い、

席を雫の隣に替わった。ここに来て、自分が一人で出来る事が無いと分かってしまったから、知らない内に畏かしこまってしまったんだ。

そうか……そうなんだ。そう思うと、狸顔の垂れ目の雫に思わず微笑んでしまった。

「ん？何だよ……気持ち悪いな〜」

何て言ったのなんて解らない。けど、

「後で、辞書貸してくれるんでしょ？勿論貸して貰えるよね？」

今は、この日本語の嵐を吹き飛ばす位の勢いで必死に勉強しようと思っていた。

「風呂〜沸いたぞ〜」

陸が、外から入ってきた。あたしと雫が夕食後の後片付けをしていた時の事だった。

「何て言ったの？陸は？」

「お風呂が沸いたって、言ったの」

「ふん。お風呂って、何処に在るんだ？」

このプレハブの中にはシャワーなどない。

見た覚えが無かった。トイレは在ったけど。

「外。ドラム缶に水を張って、下から火を点けるのさ」

「へ……」

あたしは聞き流していたが、

「……ちよつと待った！あたしはこれでも女よ！普通にお風呂は無いの？冗談じゃ無いわよ！」

そう、冗談じゃ済まないわよ！何処で髪を洗って？何処で身体を洗って？只でさえ凍えるように寒いのに、外って一体、何！

「あ、カーテンはちゃんと付いてるから」

雫は事も無し気にあつさり言った。

「カーテンって……」

ワナワナ震えている時に、

「アイーシャ？先に入れよ。男共が入る前の方が湯は綺麗だぜ？」

陸が、ギユウギユウ詰めキツチンに入って来て言った。が、あたしの怒りが爆発寸前を見越して、

「アイーシャ？郷に入らずんば？はどうなっているのかな？」

と、ニタニタ笑いの雫が止めを刺した。

「分かったわよ！入れれば良いんでしょ！入れば！着替えは何処！タオルは何処！」

ドスドスと辺りにわめき散らしながら、あたしは外のお風呂場とやらに行った。皆があたしを見て不思議そうにしているのにも気が付かずに。

「あ、本当に外に在る……しかも何これ？レーンをプレハブに固定して、カーテンを垂らしてるだけじゃない？風が吹いたら捲れるかも知れないって……ここは露天風呂かつての！」

でも仕方ないから入る。ここ以外に無いのなら仕方が無い。入れないよりはかまじだ。

「何だか疲れたよ……明日からは、練習も有るって言うのにこんなんで大丈夫なんだろう？先が思いやられるよ。トホホ……」

身体を洗い終えた後、水を足してドラム缶に入り、身体を温めた。ドラム缶は、鉄で出来ているため、念のため竹を内側に張り巡らせていた。まあ、そうよね？こうしないと、皮膚が火傷するわ。そして思わず空を見上げた。ロサンゼルスで見る夜空とは違う。くすんだ空気に星が瞬いているのが分かった。そうか、これだけ寒くても、このスモッグで綺麗に見えないんだ。全く残念だ。そんな事をなんと無し気に思った。

「ただいま」

確かこんな響きだった。覚えてたの言葉で、あたしはドアを開けた。

「何してるの？」

あたしは、皆が集まっているのを見て、不思議そうに問いかけた。だって、コソコソしてるんだもの。

「あ、早かったんだね？」

雫は、アハハ……と笑って、あたしを輪から外した。

「ん？」

訳が分からないけど、何かしら企んでいるのだけは分かった。

「ちよつと見せなさいよ！」

強引に、突っ込んで入った先に有ったのは、紙と鉛筆。で、紙に何かしら交互に線を引いていた。

「何これ？」

「ああ、本人が来ちまつたら意味無いじゃん！」

英治がそんな事を言ったのけた。

「ん？」

あたしには、解らなかつたので、雫に、通訳を依頼した。その内

容とは、あたしが何処で寝るか？のくじ引きをしていたと言う事だった。

「……あのですね？あたしは何処で寝ようと良いんですけど？寒い所だったら！」

マジ切れ寸前。雫が止めなかつたら、この騒動はやばかつたかも知れない。思わず、フライパンが飛ぶ所だった。

「雫。あたしの隣で寝なさい。以上！」

まあ、雫だったら安心だろう。という配慮だった。皆それぞれ反省はしてるようだったので、この件は後には引かない物となる。

あたしは、結局、この日夜遅く迄、日本語の基礎を蠟燭の明かりの下、雫とマンツーマンで教わった。

「日本語。言葉、多くて、難しい」

「単語一つ一つ意味が有るからね？それに、動詞の位置が違うし。慣れたら良いだけだよ」

確かに。言っている意味は判らんでもないが、それでもかなり時間が掛かるだろう。

「ねえ、雫。あなたハーフって本当？」

そう言えば、そんな事を八神は言っていた。

「自称って、聞いたけど？」

その事に関しては、雫は何も言わなかった。

「ハーフでも、そうじゃなくても良いじゃん？俺達は、人間なんだよ？それだけで十分じゃないかな？」

雫は、今まで見せたことの無い表情で真面目に言った。だから、あたしはこれ以上突っ込んだことは聞けなかった。人間であることそれが、一番大切な事だと言いたいのだろうと判ったからだ。

「明日、八神監督が新しいチーム分けを提案してくるから、楽しみだな？同じチームになるか？ならないか？それは判らないけど、お互い頑張ろう！」

あたしはその言葉を聞いて、
「そうだね」

としか言えなかった。足を引つ張る存在になるだろう自分の事を考えると、余り喜んではいられなかったからだ。

「さて寝るか？」

あたしは、雑魚寝雑魚寝の畳の上。布団は皆にあつらえられた薄い物だけ。それでも有るに越したことはない。そんな中、一番奥に陣を取っていた。そこは他より少しだけ暖かく感じられた。だから、疲れた体を癒すには素晴らしい待遇だと素直にそう思った。

その夜夢を見た。

あたしがまだ三歳の頃の事。家は、ロサンゼルス的一角。青空が広がる中、キラキラの陽射しが降り注いでいる。

あたしは、そんな外の印象よりテレビ画面に食い入っていた。ヒューマノイドがバスケットをやっていた。スムーズな動きが印象的で、瞬きもせずに見入っていた。そして、一人のヒューマノイドに釘付けられた。まるで人間の様に心を持っているかのような、意志を持ち合わせているかのような動きと判断力に魅入られてしまった。そしてバスケットに興味を持ったのである。

両親は、バスケットのヒューマノイド開発のエンジニアをやっている。大きな会社に属し、あたしは何度も両親の会社に出したことがあった。そこはトレーニングセンターのような設備があった。不思議な空間。

だから、きつとあたしもバスケットの選手になるエンジニアになるんだろうと思っていた。しかし、何故か自らがユニフォームを着ている姿を鏡に写し取って、夢から醒めた。

そう、現実にはあたしを光り輝くライトの下、選手として向かえたのであった。

#4 ポジション

「朝だぜ！起きろ〜！」

ガンガンと耳元近くで鳴り響く鉄の音。何が起こったんだとあたりは跳ね起きた。

「何！」

あたりは、冷たい空気を感じて、再び布団を引き寄せていた。

「朝。起きろ」

せつかく引き寄せた布団を、健二が引っぺがした。

「何時よ。今……」

まだまどろみの中にいたい気分。

「六時！もう皆起床してるぞ！起きてないのは、アイーシャ、お前だけ！」

周りを見回した。あ、本当だ。あたり以外もう着替え終わってる。あたりは渋々起き上がり、着替えを始めた。寝惚けていた為、周りが男だと言う事さえ忘れていた。パジャマの上を脱まなこごうと裾を引っ張り上げた時、ふと、視線が気になり寝ほけ眼で振り返った。皆がこつちを見ていた。

「見てんじゃないわよ！バカ〜！変態！痴漢！」

思わず自分の荷物の一部を投げつけ叫んでしまった。皆は笑いながら外に出て行った。本当に、疲れる生活だ。

外は、朝が早い為か風が肌を刺す様に冷たかった。そこに、ラジカセを持って健二が立ちはだかった。

「おはよう！皆。朝飯前のストレッチを始める！位置に付け！」

って、何だかこれからやり始める気らしい。健二が、地面にラジカセを置くと、皆が配置に付くように並んだ。暫くすると音楽が流れてきた。日本語の男の人の声と音楽。何だこれ？歌か？

あたりは訳も判らず皆を見ていた。すると一斉にリズムに合わせ

て踊り出した。

「？」

何じゃこりゃ？思わず吹き出してしまった。それを、
「アイーシャ？これはラジオ体操と言つて、朝の柔軟には効果的なんだよ？」

横に居る真がそう言った。が、朝、ストレッチ以外は解からない。まあ、皆もやっているし真似を試してみた。その内に体がホカホカとしてきた。ああ、体操か？位に思った。

今日の朝御飯は健二と、真が作る予定になっているらしく、慌しくキッチンで物音を立っていた。

不思議そうにキッチンを覗いているあたしに気が付いたのか、雫が、

「ご飯の用意は、一日交代なんだよ。朝と夕方の二回。特に朝はキツイよな。残った材料で作らなきゃならないしさ？」

「その上、眠たいしね……」

雫が欠伸をしているのを捕まえて、あたしは意地の悪い事を言うてのける。

「あはは、バレてるのね？良いけど……」

その通りと言わんばかりに、雫は頭を掻いていた。

「あ、悪いんだけど、また日本語教えてくれる？練習はお昼からならんでしょう？」

「あ、うん良いぜ」

あたしと雫は二人して日本語の勉強を始めた。雫は別に面倒臭がらないから、親しみが沸く。それに話しやすい。同じ年だからだろうか？接しやすい気がした。

その頃の皆。友則は外でランニング。英治、亮は読書。春樹はストレッチ。薫は腕立て伏せ。陸は腹筋とそれぞれのことをしていて。三十分経った頃であろうか？健二と真が朝御飯の用意をするように言い渡した。流石年長者であり、キャプテンと副キャプテン。威厳

が違つ。皆ゾロゾロと集まつた。

「健二？今日の味噌汁少しダシが薄いぜ？」

文句を垂れたのは、のつぽの薫だった。

「それは俺のせいではない！真だ！」

「僕の？全く都合が良いですね、あなたは……皆？キャプテンが嘘付く時は、鼻を見て下さいね？」

にこやかに、真は言った。

「何の事だよ！全く……」

あ、鼻が膨れた。自分で気が付いてない様子が可笑しくて、ドツと爆笑した。

「五月蠅ひめいじいな〜ったくここの連中は！」

健二の怒る顔はもう見慣れてきた。結構短気なんだと分かった気がする。怒らすのが面白い。ん？もしかしてあたしもその類たぐいに入るのか？気を付けよう……人の振り見て〜だなと。

しかし、この箸はしと言う物は使い辛い。皆が扱はうようにやってみたがてんで使いこなせない。その様子を見ていたのか？隣に座っている事が、

「こつやつて、使うんだよ」

と、わざわざ使い方を教えてくれた。

「初めは慣れないかもな？俺達だって、使いこなすの難しかったもの？」

あの、ボール捌くきが器用な春樹が言った。なら、分かる気がする。とあたしは頷うなづいた。

「使えないようだったら、スプーン出そうか？何も無理して食べなくたって良いことだし？」

真が気を遣つかつてくれたようだが、あたしは、それを断ことわった。ここであれから生活するのに日本の文化に慣れないのは……それに、負けず嫌いのあたしの性格が許さない。

「いいえ。このままで、良い、です」

かたこと日本語で、喋しゃべつてみた。

「おお、アイーシャが日本語喋ってるぞ！」

皆がどよめいた。あたしはそれだけで少し嬉しい気分になった。もっと早く覚えよう。そうしたら、会話コミュニケーションが出来るようになる。もっと、ここでの生活が楽しくなる。

あたしは気付くと、皆と一緒に笑うことが出来るようになっていた。

お昼になる頃、昨日と同じようにこのプレハブの小屋を出た。そして、新たなあたしの門出が始まる。自転車をこぎながら、身体を温める。これがこれからの日課。そう思うと、張り切る気持ちも、不安もごちゃごちゃと頭を巡る。皆も少し考えることが有るのだろうか？何も話すことなく自転車をこいでいた。

時代遅れの建物の中に入ると、既に八神がパイプ椅子に座っていた。

「こんにちは！八神監督！」

皆が皆、八神に声を掛けて頭を下げる。

着替えを終え、モップがけの掃除が終わると、柔軟体操を行った。昨日と同じだ。その後軽くランニング。そして、フットワークを終えるとボールを使つてのパスの練習。

全て基礎の基礎。そんな中、あたしはかなりの疲労感を感じていた。端はたから見ただけならそう大変ではないように思えたけど、実際にやってみるとかなりキツイ。あたし一人せえせ工肩で息をついていた。特に、フットワークはあたしの身体を消耗させた。身体を低い体勢にキープしなければならなかったからだ。

それから、昨日あたしが不安に思っていた連続タツプの練習が始まった。五人でのこのタツプ。難しい上に疲れる。

いつもあたしの所に来ると、詰まる。流れるに止まるのだ。

「アイーシャ？空中にジャンプするだろう？その時に、一時溜ためるんだよ。空中で止まるように！そうしたら、ボールを置いてくるように手放す。まあ、この練習苦痛でも何とも無いぜ？」

雫はそう言った。言葉で言うのは簡単なのよ……体がそれに付いて行かないと意味が無いでしょ？と言ってやりたいが、そこはあたしの頑固な所。

「了解！」

負けず嫌いは治らない。

「空中で、止まるようにと……」

考えながらやると、今度はジャンプしボールを取るタイミングが合わない。身体で覚えるしかないのかな？と思い始めていると、

「うーん。練習にならないな……アイーシャ？壁に向かって一人で練習して来い！」

健二が溜息をつきながら、壁を指差した。

「う……はい」

悔しいけど、邪魔にしなければならないなら、その方が良いかも知れない。

あたしは言われた通り、壁で練習を始めた。

壁でやると、自分一人でのタップ練習になり、さっきまでの流れは無くなった。気になる物が排除されたわけだ。

より高い所でボールを取る。それから、空中で少し身体を止めるようにしてボールを放つ。その練習を何度も何度も繰り返した。少しだけコツらしい物は掴めた様な気がする。

その練習が終わったら、今度はドリブルシュートの練習。

これは、あたしが何度もやって来た事だから苦でも何でもない。

逆にウキウキして臨んだ。基本のレイアップシュートは得意中の得意。だから、練習も楽しく出来た。

「アイーシャ？これは少し様になるな？」

雫が苦笑いで言った。

「これだけはね……」

あたしには雫の苦笑いの意味が判らなかつた。

「雫？アイーシャにドリブルの基礎教えとけ！」

「ほーいー！」

しかし、健二はあたしのドリブルが気に入らなかったのだろう。雲に言って聞かせていた。

「アイーシャ？こっちに来いよ」

雲は、コートの中いた所にあたしを呼んで、ドリブルの基礎を教え始めた。

「もつと腰を下げる！重心は体の中心。そして、ボールは後ろから前に少しスナップを利かせる様に回転を加える！」

「はい……」

あたしのドリブルって、ただボールを下に叩きつけているだけの物だと見えているらしい。確かに、そう見えるだろうな。他の皆がドリブルをしているのを意識して見ると、違うんだなと初めて分かった。皆がシュート練習している間あたしは、ドリブルの練習だけを行った。基本を教えてくれている雲に集中しながらも……：……：……またもや前途多難だ。

そして、ドリブルシュートの各練習が終わった所で、八神があたし達皆を集めた。

「今日は、昨日話しておいたチーム分けのメンバーを発表する。考えに考えた末、次の様が変わった。まず、Aチームは健二、真、友則、雲、アイーシャ。そしてBチームは、薫、亮、陸、英治、春樹。何か意見が有る者は居ないか？」

あたしが、Aチーム？キャプテンの健二に、副キャプテンの真。

友則に、雲。で、あたし。それがチーム……

「あ、はい！八神監督！訊きたい事が有るんですが？」

英治が挙手して八神に何か言っている。

「キャプテンと、副キャプテンを一緒のチームにしてしまっただけでいいんじゃないか？」

その言葉に、健二と真は確かにそうだと言う表情で顔を見合わせていた。

「アイーシャが何処まで成長するか？それを考えての配慮だ。今の

ままではまず、こついう方法を取らなければならない。他に質問は？無ければ、各ポジションについて発表するつもりだが？」

英治以外の質問は無かった。

「ならば、ポジションについての発表だ。まだまだ成長期だから、変更は可能だが、僕の意見として言わせてもらう。まず、健二。変更無くセンター。真、変更無くスモールフォワード。友則変更無くパワーフォワード。雫、変わりなく……と言いたい？オールラウンドでやってもらう。アイ……」

「ちよつと待った！」

雫が、あたしのポジションを八神が話そうとした瞬間、口を挟んだ。

「俺、無理です！オールラウンドだ何て！この背ですよ？センターもフォワードも向かない！ポイントガードにして下さい！と言うか、ポイントガードが良いです！」

あつさり本音を言い出してしまった。自分に素直だな。

「あ、まあ〜今まで一番馴染んでいたから分かるけれども、僕は君の成長を面白く感じているんだ。ここは、一歩引いてくれないか？」

ポイントガード。それは、ゲーム自体を作り上げる要かなめ。言うなれば、頭脳ブレインだ。バスケットが好きで、ゲームを楽しむことが出来る者は、このポジションを大切に感じているはず。

勿論、得点の要となるセンターやフォワードも欠かせない。けれど、身長の高い者が憧れるポジションはやはり、ポイントガードである。それを、オールラウンドだなんてと思うのも分からない心境ではないであろう。

「じゃあ、誰がポイントガードを？」

雫は一步も引かない様子である。

「アイーシャ。お前だ！」

当然残っているのはあたし。覚悟はしていた。ああ、雫の視線が痛い……

「アイーシャにやらせるんですか？ポイントガードを？笑わせるな

「じゃあ、言わせてもらいますが、これから一週間で俺とアイシヤのどちらがポイントガードに向いているか？それをテストしてもらおうじゃ有りませんか！」

ああ、雫が反撃に出ている。言葉は解らないけれど、確かに、悪意を感じる。

「ちよつと待て？オールラウンドは、ポイントガードも兼ねての事だ！何もそこまでムキになる必要は無いだろう？雫？」

八神は雫に言い聞かせようとした。しかし、雫は口をへの字に曲げて聞き入れようとはしていなかった。

「そこまで意地を張るならば、分かった。一週間のテスト期間をお前達にやる。アイーシャ？雫と競争をしろ！それで納得いく道をお前達で選べ！」

「はい」

あたしと、雫は返事をした。何だか嫌な雲行きだ。

「次にBチーム。薫、変更無くセンター。亮、変更無くセンター。陸、スマールフォワード。英治、ポイントガードと言いたい所だが、パワーフォワード。春樹、ポイントガード。以上だ！」

Bチームは何も問題は起こらなかった。変更のあった英治だったが、自らの身長がフォワードとしても生きるから、別にこだわりがあるようではない。あたしは、そんなBチームを羨ましく思った。これからの一週間、あたしは、雫と張り合わないといけない。仲良くやって来たのに、何て事だろう？たった一日でこの関係を清算しなければならぬのか？そんなことを考えながら、練習に戻るうとした時、

「アイーシャ？宜しく！」

雫が、右手を差し出してきた。

「何？」

「握手！どういう結果になっても、チームはチームだ！俺は喧嘩がしたい訳じゃ無いからな！正々堂々と勝負だ！」

「そう言う事ね？判ったわ！宜しく！」

あたしは、雫の言葉に少し気分を入れ替えた。そして、硬く握手を交わしたのであった。

八神の収集が終わると、各チームでの練習に早速変わった。

Bチームはキャプテンも副キャプテンも居ない為、仕切る者がいない。だからか、ポイントガードでムードメーカーの春樹が指示を出していた。遠目で見ていたが、一つ年上の薫達に比べれば向いている気がする。それを支えるのが、英治。粘り強さではこのチーム内で一番だからか、春樹の言う事を纏めていた。うん。あれならば、大丈夫だろう。

それにしても、問題はこちらだ。健二の指示は的確だ。で、ムードメーカーの真の言う事も射ているものばかり。けれど、何故だろう？お互いの主張が反発している物が見え隠れする。お互いが今まで仕切ってきたからなのだろうか？主張がちぐはぐ。

その上、あたしと、雫の件で良いムードとは決して言えない。こんなので上手く行くのか？だんだん不安になって来た。

「あ、このままじゃチームとしてどうなんだかな？」

そんな中、友則があっけらかんと言つてのけた。何だ何だ？と思つていると、雫が隣に来て通訳してくれた。

「どういう意味だ？友則！」

健二は渋い顔で友則に詰め寄つた。

「だって、キャプテンも副キャプテンも、言ってる事がお互い噛み合っていないじゃないか？これじゃ、このチームの色カラーが分からない」

あ、同意見。健二の堅実なチームプレー重視と、真の柔軟な個人プレーでは噛み合わない。

「どうせなら、ここで決着して貰えば良いんじゃない？ポイントガードをどちらがやるか分からないお二人さんに……」

友則は意味有り気にあたしと雫を見比べた。

「雫とアイーシャにこのチームの柱になれと？まだ無理だ！」

健二ははっきりとそう言った。

しかし真は、

「面白そうじゃん？やってもらおうよ。別に僕は自由にプレーが出来れば文句は無い。副キャプテン自体、面倒臭いしね？」

にしても、真らしい言葉が返って来た。全く無責任なものである。綺麗に整った顔して言う事全く筋が通ってない。自分勝手だな

「おい、真！無責任にも程があるぞ？そういう考えで今までやって来たのか！」

真面目一本やりの健二がついに切れた。真に詰め寄り胸倉を掴んでいる。

「はいはい。お二人さんちよつと待った！俺はここでこのまま格闘を拜見するのも楽しいなって思うけど、練習をしたい。どうする？雲、アイーシャ？」

ここで、友則はあたし達に話を振った。どうするって言われても……あたしに何が出来る？まともに練習も出来ないのに！

それに相反して雲はニツコリと笑ってこの話に乗り始めた。

「これで、チームを引っ張ることが出来て、ポイントガードのポジション貰えるんなら俺としては何も文句は無いぜ？この申し出、承ったよ！」

断然、強気発言。あたしは頭がクラクラした。あたしはどうしたい？ポイントガードじゃなければ、もう何処のポジションも出来ない。只でさえ女だ。雲と違って、今の身長がこれ以上伸びると限らないし……いや、これは真剣に考えなければならぬことだ。あやふやな気持ちで答えることは出来ないのである。悩みに悩んだ末、自らの重い腰を上げた。

「あたし、ポイントガード、したい」

まるで宣戦布告のようだなと思った。

「んじゃ、決まりだね？僕はのんびりと傍観視出来るし、楽しいよ」「本気か！真？それで良いと思ってるのか！」

健二は未だ拘こたわっている。それもそうだ、今まで作り上げた物を一から訳の分からない者の手に委ねないといけないと言う事は無謀に

近い。新しい事をやるって事は、それだけ危険リスクを伴う事だ。

「冗談じゃ無いよ？勿論本気さ。どういう風に仕上がるか？楽しくない？」

真はこの意見に食いついた。

「そうですね。健二さん？もうこうなったら、二人に任せてみましょうよ！じゃあ、多数決！これで良い人、手を挙げて〜」

友則が勝手に仕切った。勿論四対一で、健二は敗北。

「任せたよ！お二人さん？」

真はニツと笑って、これからの事に耳を傾けたのである。

「じゃあ、これから三対二の練習をする。俺と、友則と健二がディフェンス。真とアイーシャがオフェンス。三本取ったら交代。アイーシャ？お手並み拝見するよ！」

真はクスリと笑ってあたしを見て、ポーンとボールを投げて渡した。何だか気分がスッキリしないけど、だけどあたしはとにかくこの真とのゲームに負けることは出来ないんだと、改めて感じ取ったのであった。

三対二の初めての練習。味方は真。この個性キャラクターを使つての攻め方は？短くドリブルをしながらあたしは、考えていた。今は、ゾーンでのディフェンス。真は外からの攻撃に使える。ならば……

あたしは、真がいる右サイドまでボールを運んで行った。真がゴールを背にし、あたしの動きを見て、ガードしてくる。あたしはそれを見越して、真をガードし、外にいる真にパスをする。

「真、シュート！」

「え？」

そう、狙ったら外さない。それが真の長所。

真が、真を押さえに回ろうとしたのを身体で止めた。行かせない！

慌てて友則が駆け出し、押さえようとしたが、真の方が一足早かった。綺麗な弧を描いたボールはリングの中に吸い込まれるかのよ

うに入った。

「ナイス、シュート！」

あたしと真はお互いの手を叩いた。

「ヒュー。やるじゃん？真の使い方を理解わかってるみたいだな？」

負け惜しみとかさう言う訳ではないらしい。雫は思った事を素直に口にするタイプだ。だから、嫌な気分にはならなかった。

「んじゃ、こちらはマンツーマンと行きますか？」

あたしには雫が、真には友則が付く。健二はどちらにでも対応できるように中心に待機。

何だか攻めづらいな……まず、この雫をどうにかしないといけない。そこが難しい。力の差は歴然。スティールされないように、雫に体を向けながら腰を下げドリブルして考える。ドリブルの注意は今日教えられた通りだ。ああ、初心者丸出し。だけど、何とかしないと……

あたしは、見よう見真似。昨日春樹がやって見せたビハインドザバックをやってみようと思いついた。左に行く振りをして、ボールを体の後ろに回し、素早く右手で受け取ると、

右に向かつて走った。まさかやるとは思ってなかった雫は、上手く騙されてくれた。

「あつ！健二ヘルプ！」

抜いたそのカバーを健二に任せた。しかしあたしはきちんと、真の行動が見えていた。真も上手くフェイントで友則からフリーになっている。

あたしは素早くバウンドパスでここまで走ってくるだろうと予測出来た範囲にボールを送り込んだ。受け取った真はゴール下までボールをドリブルしていくと、ジャンプシュート。決まった！

「イエーイ！ナイスプレー！」

何だか上手い事行っているみたいだ。こう、上手く行くと気持ちが良い。

「すまん、抜かれちゃった！」

「ドンマイ！」

雫の顔が真剣になってくる。そりゃそうだ、ドリブルもまともに出来てなかったあたしが、この雫を抜いたのだから。余計に力が入るだろう。

「アイーシャ？お前、器用なんだな？」

ドリブルしているあたしに雫は話し掛けてきた。器用？なのかな？

「意外に見えていないようで見てる。うん。張り合い甲斐があるよ！」

そう言っただけ笑った雫は、今度は真剣な表情で、あたしの前をガードした。

ピッタリと付いてくるディフェンス。隙がない。力では突っ込むことが出来ないし。昨日の雫みたいなダックインなんてあたしには到底出来ない。そうだ。分かっている。力では勝てない。ならば頭を使うしかない。

あたしは、真のいる方へと勢い良くドリブルして行った。勿論、雫も付いて来る。そして、友則をガードするように、スクリーンを掛ける。真にはボールを手渡した。丁度鉢合わせになった雫は、

「しまった！健二ヘルプ！」

健二は真を捕らえたが、ここは、真の演技力の勝ち。シュートすると見せかけて身体を沈め、ワンドリブル。一歩引いてジャンプシュート。勿論決めてくれたよこの男は！

「ちっ！やられた〜」

雫は、苦笑いして腕を組んでいた。

「これで交代ね？」

あたしは自慢げに腰に手を当てて、踏ん返り返っていた。

「アイーシャ、やるね〜！見直したよ。基本が出来て無くて、ゲームを理解してる！」

真はニツと笑ってあたしの背中をバンッと叩いて行った。

「痛いよ、真〜」

あたしは、ゴホゴホと咽むせてしまった。

「さて、俺達も始めますか？」

雫は、ニンマリと含み笑いをして、あたしの手からボールを取り上げた。

「健二、友則、俺達も負けずにやろうぜ？」

ああ、張り切ってる。雫も負けず嫌いなんだなと、よく分かった。それでも素直に言葉に出せるのが羨ましい。

こちらは二人。あたしは、友則と、雫をマークしなければならぬ。腰を落として、動きを察知！後は基本を忠実に！目標を見失わないように！考える事はそれだけ。点を入れさせてなるものか！

「健二！相手は背が低いぞ！積極的に中に入れ！」

雫がそう言くと、健二はゴール下へと入り込む。あ、高さで対抗してくるつもりか？

思わず真を見てしまった。その隙を突いて、雫自らが得意のダックインをかましてくる。

あたしはシマツタと、足が動かず雫の手を叩いてしまった。

「ハッキング！ディフェンスのファール……ね？」

雫は上手いこと言って、また、始めからやり直し。いや、ファールなのは分かってるけれどもね……ああ、足が動かないと意味が無い。もつと、この辺りを重点的に練習しないと！

雫は、再びドリブルを始めた。友則の存在がやけに気になる。健二を使わずに、友則か？

などと、勘が先走る。チリチリと頭の何処かで鳴っている。

その通りだった。雫は、友則にパスを出した。あたしは、思わずバツと飛び出してそれをカットしていた。

「え？」

勝手に動いた足は、そのままそこで止まった。

「何で……分かった？」

雫は有り得ないと言った表情であたしを見た。いや、あたしにも分からない。どうして出来たのかなんて……あたしはボールを握り締めたまま突っ立っていた。そのボールを、雫は取り上げた。

「勘が良いんじゃないかな？」

真はのほほんとなんな事を言っていた。

「もう一回行くぜ？」

またもや、雫がドリブルを始めた。低い体制。これはこのまま突っ込んでくるだろう。そんな予感がする。あたしは、友則を無視して雫の前にはだかる。すると、雫と正面衝突してしまい、あたしは床にお尻からドスンと倒れこんでいた。

「オフエンス、チャージング！」

真が、審判気取りでそう言った。

「俺か？ちよつと待てよ、今のはアイーシャのファールだろう？」

雫は、真に抗議していたが、健二も、友則も、そっぴら顔で見ている。

「雫の場合、力で攻めてるからそう見えるんだよ」

真は何故そうなのかを具体的に言った。

「そんなつもりは無いぜ！」

雫は思いつきり膨れ面をして言い返したが、誰から見てもそんなんだから仕方ない。

「分かったよ！ファール一個ね！」

ブツブツ言いながらも、あたしの腕を掴んで引き起こしてくれた。そして、もう一度仕切り直した。

「今度こそ得点に結び付けてやる！」

いきなり、ダックインしてきた、あたしは突然の事で擦り抜けた雫を追うことが出来なかった。それを追い掛けようとしたが、友則がスクリーンであたしをディフェンスしてきた。しまった！二対一に纏れ込んでしまう。あたしは気が付いたら、友則にフェイントを掛けて雫の後を追い掛ける。そして、後ろからボールを弾いた。勢いでボールはコート外へと飛んで行く。

「！」

皆が驚いていた。あたしだって驚いている。何故か体が勝手に動くからだ。考えるより先に体が動く。不思議な感覚だった。

「アイーシャ、お前……」

雫は不思議な物を見るような目であたしを見ていた。

「あ、今のはファールじゃ無いよね？」

自信が無いわけではないけれど、この感覚があたしをぐら付かせていた。

「ナイスカット！アイーシャ、少しはこっちにも華持たせてくんない？」

真は笑いながら言い切った。

雫は、逆に頂垂うなだれてしまった。

「一週間つての、もう良いや……ポイントガードはお前に任せる！雫は不本意だと思っっているかも知れない。あたしは、何だか釈然としないけれど、ポイントガードを譲り受けてしまった。」

「でも、オールラウンドでも、ポイントガードは出来るんだし……」

この言葉は、今の雫に対して失礼かな？

「……そうだよな？だからもう良いって言ったの。俺、八神監督の所に話しつけて来る！」

負けず嫌いの雫なのに、こうアツサリと引き下がるのは何故だろう？根に持たれるのも問題だけど、あっさりしているのも変な気がした。

「あゝあ、一週間が一日？雫も張り合いの無い奴！」

友則は初めて英語でそんな風に、あたしに話し掛けて来た。もしかしたら、雫以外も皆英語いちごうごを話せるのではなからうか？そんな気がしてくる。じゃあ、今までのあたしの会話は筒抜け？ああ、自己嫌悪！でもそんな事で落ち込んでいられない。

「どう、思い、ます？」

雫の事が気になって訊いて見た。

「うん。俺は、アイーシャの方がポイントガードとしては雫より向いてると思う。それを悟さとったんじゃない？あいつ……」

友則は日本語でそう言った。あまり聞き取れなかったけれど、雫を傍観視した言葉を言っているような気がした。表情が、他人事の

ように感じられたからだった。

「ま、問題はないぜ。気にするなよな！」

友則が、あたしの金色の癖っ毛の髪をクシャクシャに混ぜてポンポンと叩いた。安心しろって事なのかな？それならば良いけれど。

雫は、依然とパイプ椅子に座っている八神と話している。八神が雫の肩をポンポンと叩いて何か言っているようだった。そして、雫は戻ってきた。

「これで問題はないよ。さてと、俺も心を入れ替えて練習に励みますか？」

八神は何と言ったんだろう？励ましの言葉？それとも、叱咤しつた？判らない。ここに居る誰よりも八神の事はあたしには理解出来ない存在だった。

#5 初めての練習試合

その後、チーム間の練習を終えると、五対五の試合ゲームを始めることになった。新しい新メンバーでのチーム戦。これは胸が高鳴った。

ロサンゼルスでのあの決勝戦以来だ！バクバクと心臓が鳴り響いている。たかが練習試合だというのにこの有様だと、一年後の本戦は一体どうなるんだろう？ワクワクするけど、頭が痛い。喉の奥から何かが出戻って来る感じがする。

「よっ！アイーシャ？気分が優れないのかい？」

雫が声を掛けてきた。

「ポイントガード、お前にはかり任せないから、安心して仕事しろよ？」

サークル内には健二と薫が既にスタンバイしている。

「今日からは僕がトスを上げよう」

八神は、審判を兼ねて、ストップウォッチを片手にそう言った。

多分、本当の試合らしくしたいのであろう。今までみたいに各自が審判なんて事は有り得ないのだから。

高々と上がったボールを叩いたのは、やはり健二であった。その零れ玉を拾ったのは、雫。あたしはそれを確認すると一気にゴールへと走った。勿論パスが来る。しかし、あたしの足は遅い為、英治が目の前に立ちただかる。細かくドリブルを重ねてメンバーが所定位置に着くまで待った。さて、どう攻め込もう？あたしに付いている英治の身長を考えると、下からの方が攻撃可能範囲オフエンス。春樹だったら上からにした方が無難だけど。

「ヘイ！パス！」

雫があたしに向かってパスを要求した。相手はマンツーマンテキ。さて、雫にボールを渡してこの先どうする？あたしは走り寄ってきた雫にバウンドパスをした。すると、一気にあたしを背に一緒に付い

て来ている春樹共々抜きに掛かった。あたしは、春樹と、英治を抑え隼にボールを任せた。一人自由になった隼は、一気にゴール目指してドリブルで駆け込んだ。そこに、薫が立ちはだかった。身長差を考えると無謀過ぎる。だけど、隼は誰にもパスを出さずに強引にシュートへと持ち込もうとした。

「隼！無理！」

健二は、それを見てリバウンドする為に亮を抑えてスクリーンアウトしに掛かった。入らないだろう事は予測できる。しかし、薫がジャンプするのを見計らって、隼は薫の懐に潜り込み、レイアップシュートを掛けた。

細かく動き回る身長の高い隼だが、見事に決めてくれたのである。「まったく入ったから良いものの、無理すんな！」

健二が隼の背中を一発叩いた。

「へへっ、俺、オールラウンドなんだから細かいこと言つなよな！健二？」

隼は舌を出した。

「これだから、こいつとチーム組むの苦手なんだよ！」

健二は何やらぶつくさ言っている。

次はエンドラインから相手の攻撃が始まる。勿論、ボールを運ぶのは春樹。あたし達はオールコートのマンツーマンで挑んだ。しかし、春樹のボールをスティールするのは困難だった。本当にボール捌きが上手い。取れると手を出すと、ステップバックして、後退するし、あたしの手には負えない。けれど、ここで引き下がるのは避けたい。そして抜かれるのもだ。ひたすら、春樹のドリブルの姿勢を見ていた。この人から技を盗むのも一興。一度、大きく賭けに出るのも練習の内なのだろうか？

頭の中で、色々と考えてしまう。考えるより、身体を動かす方が先決だと言っのに！

思考と行動がバラバラのあたしは気が付いた時にはすでに、春樹がハーフラインまでボールを運び込んでいた。

しまったという感情が無いわけではない。が、ここからは三十秒ルールが成り立つ。ゴールさせるまでに、三十秒粘ればあたし達のボールになる。だから、必死で春樹の持つボールに喰らい付こうとした。が、やはり春樹の方が一枚上手であった。あたしが意を決して右手でドリブルしているのをステイルしようとするのを予測していたかのように、レッグスルーでかわし、体のバランスを失ったあたしを何事も無かったかのように抜き去って行った。

「英治！」

春樹は、英治にボールをパスする。元ポイントガードの彼だから、この辺り一番信頼出来るのである。今度は英治がボールを持って攻撃に入る。英治を守っているのは雫。何の因果か元ポイントガード同士。あたしは急いで春樹のガードに回った時、二人が笑っているのをこの目で確認した。

「何笑ってるんだか？気持ち悪い奴ら」

思わずあたしは呟いていた。

「お互い楽しんでるんだよ。アイーシャにはそう言うの、分かんないかねえ」

聞こえていたんだろう。春樹がボソリと零した。あたしはまた驚く羽目に合う。あ、春樹が英語を話した……やはり、皆話せるんだ。そりゃそうだよな。一年後にロサンゼルスに行こうって奴らなんだから。話せない訳が無いんだ。

雫は、ピツタリ英治をマークしていた。英治の俊敏な足は役に立たない。色々と試しているが、雫が後に引かない。このまま行けばゴール下にボールが回るまでに三十秒は過ぎてしまっただろう。そう思っていた時、英治がドリブルで加速し、春樹の所まで下がって来た。何故戻って来る？あたしは春樹と英治のアクションを交互に見ていた。すると、英治があたしをスクリーンに掛けるようにして春樹にボールを手渡した。

「雫！チェンジ！」

引っかかったあたしは、自由に動き始めた春樹をマークするよう

に雫に言っただけだ。

まあ、雫もどうなるか把握していたのであろう、春樹に既に付いていた。

「こつちは任せろ！ボールはこれ以上中に入れさせないぜ？どうするよ？」

春樹対雫。これも後に引かない良い勝負。まったく上等じゃ無いか！これ迄ゾーン内にはボールは入れられていない。良い守備。

八神が手元のストップウォッチを見ていた。そろそろ時間。そう思っていると、笛が鳴った。

「ちっ！」

春樹が舌を鳴らしていた。ついに時間切れ。

攻撃の権利はあたし達に移った。

あたしは、サイドラインから雫にボールを渡した。ボールを持った雫は静かにドリブルに入った。相手は英治。あたしは春樹にマークされていた。

センターラインまでソツ無く進められていくボール。雫はどう攻めようと言っただろう？あたしは、雫とは逆サイドにいる。此処まで運んで来るつもりなのか？などと客観視してどうする！あたしは、一度右に身体を揺さぶって中央へとダッシュした。さっきの返しだ。フェイクは決まり、あたしはフリーになった。それを雫は見落とすはずもなく、あたしが走りこむ先にボールを放り込む。私は必死でそのボールに飛びつき、体制を整えると、今の状況判断をした。

ゾーンのトップにいるあたし。健二は薫がマークしている。真は陸。友則は亮。マークはピッタリと付いている。フリーなのはあたしだけ？と判断すると、一気にゾーン内に突っ込む。春樹が後ろからガードしようとして来る前に、この状況を上手く利用しないと！そう考えていた。すると、カバーで健二に付いていた薫が前にはだかろうとした。あたしはそれを見越し瞬間、バウンドパスで健二へとパスを送った。健二はノーマーク。ゴール下へと入り込むと、ジャンプシュートが決まった。

「よっしやー！ナイスパス！」

健二があたしに向かって手を叩いていた。

「健二こそ！ナイスシュート！」

すんなり攻撃は決まる。ここで春樹が、

「これからディフェンスは、ゾーンで行く！」

マンツーマンから切り替えるらしい。まあ、付き纏われるよりは気が楽だ。それに、そうなる今度は外からの攻撃が使える。こっちは真がいるのだ。

エンドラインからの相手の攻撃。あたし達は、しっかりとオールコートマンツーマン。

疲れるけど、一番得点に結びつく。で、あたしは春樹のガードに付く。同じ事の繰り返しだけど、その時々で異なるシチュエーション。だから面白く感じるのか？バスケがこんなにも面白いと思える。あの時、ロサンゼルスでやった試合で感じた疑問が今まさに蘇ってきた。そうだった。

心のないヒューマノイド。彼らに楽しむと言う事が分かるのだろうか？この感覚を味わうのは、やはり人間であるべきではないのか？

疲れきった体を駆使し、想像して、ゲームを制する。それは、人間であるべきあたしたちの特権で無ければならないのでは？そう、あたしは思った。

歴史は何を変えてしまったんだろう？過去の過ちあやまちを繰り返さなければ良いだけの筈の事があたしたち人間には出来ないものであるのか？全てはループしている。そう考えられているから、あたし達は限られた世界に足を地に着けている。ああ、考えていたら頭が混乱してきた。いけない。試合に集中しないと！

春樹のボールを見詰めながらあたしは頭を振った。その隙を春樹は見抜いていた。フェイクであたしを抜き去った。あたしは崩れた身体を床に手を付き起こすと、直ぐに駆け出した。

「春樹。パス！」

亮が友則を抑えてパスを要求している。あたしがやっと春樹に追

い付いた時には、ボールは亮に渡っていた。亮对友則。ジャンプ力がチーム一番の亮。しかし、友則も黙つちやいないだらう。ゴールを背に腰を落とし立ちはだかる。ピボットを使い一時肘で友則を避けるように次の体制を考えている。そこに、雫がガードしている英治が走り込んで来た。

手渡しパス？と思わせておいて、亮はクルリと反転すると、ダックイン。友則もそこまで考えて無く、亮はすんなりとゴール下に潜り込んだ。ゴール下は薫と健二がいる。健二は勿論カバーに入る。亮の方がジャンプ力が有るから、付かなきゃ必ずダンクをして来るだらう。その事が頭を過ぎらない者はいないはず。

ここに来て初めて観た時の印象が強いから、特にそうあたしは思った。しかし、ジャンプした瞬間、後ろに英治が走り込んで来た。雫が付いていたんじゃないのか？と、雫を捜したが、雫は居ない。何故ノーマーク？

「健二！ジャンプしないで！」

叫ぶけど、間に合わない。健二がジャンプした瞬間、亮もジャンプした。が、亮はボールを上からスリりと後ろに回した。英治が走り込んでいるのが理解わかっているんだ。あたしは必死でゴール下に駆け寄った。しかし何処から走り込んで来たのか？雫が現れた。放ったボールが弧を描いて英治の手に収まるのと同時に雫の手に納まった。

「ヘルドボール！」

どちらのボールが分からない、力で奪い取る図がそこに有った。

八神が、ヘルドボールの指示を出した。

「英治、雫。ジャンパーは位置に付きなさい」

サークル内に二人は立っていた。雫はオフエンスの用意をしると言いたげに目配せしている。ちよつと待ってよ。英治と雫の身長差ってかなり有るよ！あたしは守りに入ろうと自らのコート内へと足を向けようとした。しかし、雫は苦い顔をしていた。勝つ気であるの？じゃあ分かったわよ。負けた時にはどうなるか分かってるわね

?そういう目つきであたしは敵陣側へと足を向け直した。

ボールは八神の手から、空中を何事も無く飛び立った。すると、
どうだろう?英治より先に雫の手でボールは弾かれた。上手い具合
に、あたしの方にボールが飛んで来る。あたしは必死になって駆け
出した。何もこんなに強く弾かなくても良いのに!サイドラインぎ
りぎりの所であたしはボールに追い付き、そして、走り込んで来た
健二にパスを出した。

いきなりの速攻。皆がこうなる事を考えていなかったようだ。相
手きの戻りは遅かった。健二は勢いに任せてドリブルでゴール下へと
突っ込んで行った。後ろから英治が走り抜けて行く。あたしはそれ
を阻止しようと駆け込んだがやはり英治の足は速かった。追い付け
ない。誰か!心の中で叫んでいた。

英治は、ファールを取られようがこのまま得点を許す気はなさそ
うだ。後ろから手を出していた。健二!気付いて!

すると、健二と英治の後ろに真が走り込んで来ていた。

「健二、後ろ!」

雫が叫ぶのが聞こえた。健二はさっきの亮と同じようにシュート
を打つと見せかけて、ポーンと後ろにボールを投げていた。空中に
高々と上がったボールを真は受け止めると、スリーポイントライン
まで素早く下がりシュートを放った。

いつも通りの綺麗なフォーム。パスとネットの中に納まり、シ
ュートは決まった。

この試合。一方的にあたしたちのチームの方が有利であった。初
めてチームを組んだのに、意思疎通が出来ている。それがとても気
持ちが良い。

これで、七対〇。しかし、ここまで差をつけられたら、相手側テキだ
って黙ってはられないだろう。負けると言う言葉は似合わない連
中。勿論それはこっちだって同じなんだけどね。

エンドラインから即座投げ込まれるボール。春樹がそれを受け止
める。ゲームの立て直しを考えているのだろう。ドリブルしながら

ゆっくりしたペースであたし達の陣地に入ってきて来る。ここで止めて、マイボールにしたい。攻める時は、一気に攻め込んでしまいたい！あたしの心は固まっていた。だから、春樹の間合いに一気に飛び込んでいた。

しかし、まだ未熟なあたしの心の中身などお見通しであったのだろう、春樹はヘジテイション（前後に揺さぶりをかける）であたしをいとも簡単に抜き去ってしまった。

シマツタ。と思い、後ろから追い掛ける。が、春樹は既に英治にパスを出していた。雫がそれに付く。今度はどう攻めて来るつもりなんだろう？ボールは既にトップまで運び込まれていた。

あたしは、春樹の動きをマークしつつ、ボールの行方を見定めなければならぬ。どちらも気が抜けないのだ。もし次に春樹にボールが回って来るならば、カットしなければならぬ。一瞬たりとも気を抜く場面など有る訳がないのだ。あたしは手を大きく広げ、いつでもカットが出来る体制を作っていた。

しかし、ボールは回って来なかった。雫にフェイントを掛けた英治が一気にダックインしてゾーン内に入り込んでいたからだ。このまま力技で行くのかと思いきや、ゾーン外にいる陸にパスを送り出す。陸はそのパスを受け、得意のフェイクで、真を交わすとゾーン内に入り込み、一気にゴール下までドリブルで駆け込んだ。陸の場合、ここからが上手いのだ。健二が、勿論カバーでマークしようと駆け寄る。でも、その間にセンターの薫がノーマークになるのを見越しているだろう。さて、ここは自ら行くか？それとも薫を使うか？薫を抑える為のマークがない。誰かがフォローするのが一番なのだが、背の高い薫を止められるのは、あたしのチームには健二しかないのだ。健二！あたしは、ゾーンの外から成り行きを見守るしか出来ない。

陸は、スツと一旦ボールを横に押し出すと、高々と離れた地点でボールは弧を描くように解放された。自ら行った！これはフックシュート？地道な訓練で出来る技ではあるけど、陸のは綺麗に決ま

った。

「二点返したぜ！後五点！張り切って行こう！」

陸はテンション高く声を張り上げていた。これはどう考えてもあ
たし達の敗北。背の高さを利用して来る相手は、どうしようもない。
その代わり、こつちだつて利用価値の有る選手は居るのだから。

「おい！ボーっとすんじやないぞ！向こうはゾーンディフェンスな
んだから、その分体力温存して来てるんだぞ！それを超えるような
お前の頭脳頼りにしてるぜ？」

雫がエンドラインからあたしに声を掛けて来た。あ、そうだった。
ゲームの司令塔であるあたしがここで突っ立って考えていても仕方
ない。とにかく動かなきゃ。そう動かなきゃ！

頭では判っているのに、何故体が動かないんだろう？じれったい
な！ここまでのあたしの役割はちゃんと果たせているのであるのか
？疑問。雫に頼りきっている気がしなくもない。あたしらしさつて
一体？また一つ疑問が生まれた。

同じポイントガードの春樹は柔和な感性。元ポイントガードの二
人……雫は暴走突入型。英治は瞬発力強化型。あたしには……何も
無い？

「何やつてる！ちゃんと集中しろよ！」

ドリブルしながらトップ位置で、あたしはもう少しで危うく春樹
にスティールされてしまうところだった。何とかキープできたのは
救いだ。何か変なんだよね……気持ちがスツキリしないでいる。

考えなきゃ。

動かなきゃ。

押し寄せて来る不安。あたしだったら？でも今はまだ自分が無い。
「健二！」

センターを使いたい。でも、薫が粘つてこの場を凌いでいる。パ
スが出せない。真にもマークが付いている。何？どうすれば良いの
？オロオロしてしまった。こんなの、あたしらしくないのに！

そんな時、雫がトップまで来てあたしのお尻を思いつきり、バチ

ンと叩いた。

「しつかりしろよ！俺が何故お前にポジション譲ったのかこんなじゃ分かんないぜ！」

そのまますり抜けて行く。ボールを取りに来た訳では全く無かった。激励。叱咤。そのどちらにも当てはまる言葉だった。有り難いことである。

あたしは、今の状況をもう一度確認した。右サイドには真。左サイドには友則。そしてゾーン内を入ったり出たりしているのが、健二。そして、さっきあたしのお尻を叩いていった雫はトップ。あたしは、雫にパスをした。

そして、スクリーン状態をキープしてくれた雫は、直ぐ様もう一度あたしに返した。これって、あたしにシュートを打てと？此処から入るだろうか？分からない。だけど打ってみる価値はありそう。これまでシュート練習だけはヒューマノイドに入力するデータを登録する為に、欠かさずして来たのだから。

あたしはスリーポイントライン迄下がってボールを頭上に持ち上げた。ポーンと放つボール。後はセンターの健二の仕事だ。

「リバウンド！」

健二は必死で薫相手にスクリーンアウトしている。ボールは弧を描いてリングへと向かった。入る。そんな気がした。それは確信に近い物だった。

バックボードに当たったボールは、リング内へと収まった。真みたいなリングを直接狙う綺麗なシュートじゃ無いけれど、見事に入ったのである。

「アイーシャ！ナイスシュート！」

雫が、やれば出来るじゃ無いか？って表情で駆け寄ってきた。

「うん。当然！」

生意気にもこんな言葉^{せしご}を吐いていた。促してくれたのは雫。ああ、自信を持たせてくれたのかもしれないな。って気もしてきた。

手を打ち鳴らして、今度はディフェンス。

「止めるよ！この一本！」

あたしは、春樹のドリブルに喰いついてく。点差は八点。時間的にもまだまだこれからであった。

結局、この試合はあたし達のチームの十点差勝利で終わった。入られたら取り返し、シーソーゲームが続く試合内容。各人自らのポジションを考えながらプレーしているかのようだった。

あの時の雫の言葉があたしに力をくれた。ディフェンスで春樹を抑え切るのはまだまだ無理だけど、コツは掴めたのではなからうか？オフェンス時は、あたしの作り出す作戦も少しは視野を広げられたように感じられた。

初めて経験したにしては上々の出来だったと思う。って、これで納得できると言う事ではないけれども。一試合終えて素直に思うことがそれだった。

後は……

「これで今日の練習を終わる。帰ったら、ゆっくり休め。明日も有るからな」

試合後、皆を召集して言った八神の言葉。

「うーん。今日練習試合をやったの感想として言えば、このチームの割り当ては僕の想像と大体一致していた。このままで良いかと思う。負けたチーム。次は勝てるように！各個人については、健二はもっと俊敏に動けるように！真は、もっと積極的にポストプレーやリバウンドに励め。亮は細かい所にも目を配るように。薫は、もっと力強く、粘りを見せられるプレーを。陸はリバウンドに力を入れる。友則はもっと動け。時々足が止まっている。春樹は足腰をもっと鍛えろ！英治は突っ走りすぎ！柔軟性を持って。雫はジャンプ力強化！まだポイントガードとしてしか働いてない。視野を広げる必要があるな。最後にアイーシャ。体力をつけろ！^{スタミナ}後、基本をマスターするように明日から重点を置け！」

あたし達を見ての感想を、何も遠慮せずビシッと決めてくれた。

「以上。解散！」

「お疲れ様でした！」

頭を下げて、あたし達は掃除に取り掛かった。昨日と同じだった。

#6 存在意義

「ねえ。雫？八神って一体何者なの？」

あたしは、モップを掛けながら、常に思っていた疑問を雫に投げかけた。

「監督。それがどうしたの？」

雫は何も不思議に思っていないみたいだった。監督って……あんな少年が？あ、でも、確か病院であたしより遥かに年取ってるって言ってたっけ？でも外見だけ見たら、あたしと本当に年が違わないように見える。だから疑問が残ってしまうんだ。

「何で、雫はこのチームに入ったのよ？」

違う方面から問いかけることにしてみた。

「八神監督に拾われたから。バスケットをやらないか？ってね。アイシャもそうなんじゃ無いの？」

変な事を訊くな〜と言う風にあたしをモップを掛けながら横目で見ていた。同じだけと何かが違う。あたしの場合、強制的な所もあるからだ。

「雫の頭にも……爆弾チップが有るの？」

雫は何を言っているのか判らないと言った風に、

「何それ？チップ？」

と、問い返してきた。チップはあたしだけ？

皆は何故ここに集まったの？日本は一体どういう国なの？疑問符が頭の中をぐるぐる回った。

バスケをするのは楽しいけど、でも、あたし達はヒューマノイドとして参加するわけでしょ？そう言うの判ってるんだらうか？

「じゃあさ訊くけど、ヒューマノイドとして働いてるって意識じかくはある？」

雫はいきなり止まって、

「俺達は人間なんだ！ヒューマノイドである筈がないだらう！」

怒ったのかな……と、一瞬ビクつとしたが、

「何でそんなこと訊くのか？後でちゃんと聞いてやるから今は掃除！」

あたしは、それ以上何も言えなかった。だけど、この後、自由時間が出来たら、早速訊いてみようと言う好奇心が無い筈はなかったのである。

着替えも終わり、自転車で帰宅したあたし達の家。簡素なプレハブ小屋。今日は健二と真が夕飯の買い物をしに出かけた。

あたしは、荷物を片付けて、そして洗濯物を終わらせると一段落が付いた。夕飯までの時間。あたしは雫に聞きたい事を訊くために時間を貰った。

「ちよつと良い？」

皆は色々やりたい事をしていた。あたしは寒いスモッグの掛かった空の下に雫を呼んだ。何だか皆に聞かせることが出来なかったからだった。

「さつきの話……か？」

雫はどおれ？と言った風に自転車に跨ってあたしを見下ろしていた。あたしは地面に膝を抱えて座り込んでいた。風が冷たい。空気がパサパサして喉がザラつく。

「あたしの罪と、八神との出会いを聞いて欲しい」

あたしは、自らの事を洗いざらい話してしまった。それは後味の良い物ではなかったが、判断してくれる人が欲しかった。と言うのが有ったのであろう。それが、雫にとって重荷かウザイ物かなんて考えもしなかったが、話せるのは雫以外いないと思ったからだった。

全部訊き終わった雫は、

「……じゃあ、言わせて貰う。ロサンゼルスは、住むにも、生きるにも豊かな都市だと言う事は八神監督から聞かされている。で、ヒ

ユーマノイド制を本気で実現していると言う事も。ただ、あそこに住む人達は、外を知らない。本当にヒューマノイド制をやっていない他の国々の事を。勿論その中に日本は当てはまる」

真面目に応えた。

「ちよつと待つて！他の国々はヒューマノイド制を……三か条を知らないの？」

当たり前前の世の中。つて思っていたのはあたし達アメリカ人だけなの？どうなっているの世界は？

「知るはずもないだろう？何処に情報手段がある？テレビもラジオもないこの国に。世界を又に掛けている存在は、八神監督だけだ。だから俺達は彼に付いていく。そう一致団結してる」

情報手段は確かにない。ロサンゼルスと全く違う。それはこの目をしている。じゃあ、それが出来る八神は何者？

「八神つて何者なの！」

「……それは言えない。まだ言うべき時期ときじゃ無い。アイーシャ？それでも知りたい？」

知りたい。けど訊いてはならない事の様にも感じられる。雫の目が本気だからだ。

「時期が来ればあたしにも解かるのね？」

「勿論さ」

「そう。なら……良い」

あたしは、好奇心を押し止めた。

「アイーシャ？一つだけ言うておくよ。チップの件。それは、多分八神監督の冗談ジョークだ。あの人にそんなことが出来るはず無いから」

雫は微笑んでいた。

「冗談ジョーク？え？」

「八神監督つて、真面目な顔して冗談言うから判別付け辛いだろうけど、非人道的なことはしない人だから。それは保障する！」

雫は言った後、笑い転げていた。あたしは、座り込んだまま、横にすつ転んでしまった。真面目に冗談なんてやらないで欲しい！あ

あ、あの八神の性格だけは判らないと思った。

じゃあ、あたしは何故生きていられるんだろう？確固たるヒューマノイド制を敷いているロサンゼルスで、法を犯したはずのこのあたしが……そこが、八神という人物の秘めたる所。そして、何を企んでいる？ロサンゼルスにこのあたし達を率いて何をやらかす気だ？

「雫？八神と出逢ったのっていつ頃？」

あたしは、話の流れを変えた。

「あ、そうだなあ〜一年は経つのかな？俺、アイーシャの一つ先輩になるの。ここに入った順番からするとね？」

同じ年で一つ先輩。ってのは言いたい意味だけ判った。

「じゃあ、誰が一番初めに入ったの？」

そう、こちら辺に話が流れていくのだ。

「う〜んと、健二。で次が真」

成る程。それで、キャプテンと副キャプテンになってるのか。今

日は、真の無責任発言が炸裂したけどね……、

「真って無責任って思ってるだろ？」

「あ、う、うん」

言いたいことが、顔に出てたかな？

「本当は無責任って訳じゃ無いんだよな〜ただ、素直になれないんだよ。優しい反面、自分に厳しい。そう言う所見せたがらないんだと思う。試合であれだけ正確にシュート決められるんだからね」

それは才能ではないのか？とも言い切れるが、真は確かに優しい面がある。それは否定出来ない。意外に照れ屋シャイなんだろう？

「で、次に入ったのが確か春樹。お前、ドリブルとかフェイクとか下手なんだから、あいつに習えば？シュートはまあ、見れない事は無いんだけどさ？」

痛い所を突いてくる。確かにあたしは下手ですよ。でも、教えて貰えるものだろうか？

「言えば教えて貰えるぜ？俺が教えても良いけど、俺のボール捌き

はある意味脅威だから？無理だよな〜」

それって自分で褒めてるの？^{けな}貶しているの？無愛想にも問いかけたくなつた。

「それから、亮が。んで少し時間が経つて薫と陸が入つて、で、友則、英治が入つたつて言う順番つて聞いた気がする。俺、同じ年の仲間が居なかつたから、お前が入つて来てくれて嬉しかったぜ〜！」
雫が飛びついてきた。瞬時にあたしの左こぶしが思いつきり雫の右頬にクリーンヒットしてしまった。

「あ、思わず……わらい〜」

あ、でも今日、セクハラされたような覚えもありますな？

「お尻叩いて行った事も、含めてだから〜」

あたしは、笑いながら雫の腕を取つた。

「でも、雫？ポジション本当に良かったの？」

今日の事と言えば、それも有つた。

「ポイントガードの事？ああ、俺お前の方が素質が有るつて感じたんだ。直感なんだけどね？一週間見なくても、良いなつて思える程それに、本当は、前からポイントガードより、センターとかフォワードとか、点稼ぐ方で居たかつたんだ。目立ちたがり屋だから〜」

本当にね。あたしは心の中で思った。でも、ちよつとだけ雫は寂しそつでもあつた。一年間そのポジションをやって来たんだから当たり前か？

「雫？背伸びるつて！大丈夫だよ！」

社交辞令にしかならないけど、あたしはそう願いたかつた。同じチームのメンバーとして。

「お〜い！雫、アイーシャ？」

遠くで健二の声がする。

「あ、お帰りなさい〜今日は何でしたっけ？」

雫はもつすつかり忘れたかの様に、今買い物から帰ってきた健二と真を迎えた。

「今日は、シチューだよ」

真が、のんびりとした口調でそう言っているのが聞こえた。何だかちょっとだけこのチームの結束力の源が分かってきた気がする。厳しい環境の中、共に生活をし、プレーをし、培って来た物が有るからだ。だから仲が良いんだと。そして、その期間を共有出来なかった寂しさって物を感じずにはいられなかったりもする、あたしが居た。

#7 秘密の図書館

洗濯物が外の冷たい空気の中揺れている。

あたしは流石に下着だけは皆と同じ所には干せずにいた。だって、あたしだけ女なんだから……良いよな男は、堂々と干せるんだから！だから下着はお風呂場に干すことにしている。あれをお風呂場と言うのは変だけれどもね？

共同生活で気を配らないといけないこと数点。家族じゃ無いから、少しは相手の事も考えないといけないし。疲れることがしばしば。楽しいけど疲れる。節度ある生活？ってやつなんだろう？日本語も何となく判り始めていた。周りもそれを汲み取って、特別な時以外は英語は使わなくなってきた。そして、あたしも気軽に日本語で接することが出来るようになった。

あれからどのくらい経ったんだろう？半年位？毎日の練習と、生活。学校が無いだけ有難いけど、無いとまた緊張感の度合いが違う。自由時間が増えた。って言っても、ロサンゼルスでは、学校は昼迄。そして、午後からはヒューマノイド造り。それに明け暮れていた。勿論、あたしの場合は、庭に在るバスケットゴールで試し練習をしながらだから余計に時間が掛かった。

そういう時間が有って、今の時間を過ごすとはやはり自由が多いと言っただろうか？

あたしは最近、日本語の書き取りの練習を始めた。読むだけではなく、書く。日記という物をつけ始めた。日本語の練習にもなるからだ。そして、ちょっと思い付いた事があった。それは、エッセイ小説を書くこと。いつか本を出せたら良いな？って思い始めていた。日本で本屋を見かけた事は無いが、本を作ることが可能なら、是非に！今ここに居るあたしの思っている事とか、周りの出来事とか。そう言うのを徒然つれづれに綴った物を読んで貰いたい。

時々、誰かしら本を片手にしてる所を見かける。一体何処で手に

入れてるんだらう？何処かに本屋が在るんだらうか？何て思つて、今本を読んでいる英治に問いかけた。

「本よく読んでるよね？一体どこで手に入れてるの？」

あたしは、ストレートに訊いた。すると、英治は珍しく無愛想に、「悪いけど、教えられないね！」

と、だけ言つて本に目を通し始めた。後、亮もよく本を読んでいるから、尋ねてみることにした。

「ねえ、亮？本つて何処かで売られているの？」

あたしはごく自然に訊いた。だけど、

「悪いけど、ノー・コメント！」

何？その態度！掌をヒラヒラさせて向こうに行けと言っている。全くどいつもこいつも〜！

ぶつくさ言っていると、

「アイーシャ？ちよつと……」

真が声を掛けてきた。

「何？」

真はニコリともせず、ボソリと言った。

「あれはね、売られているんじゃないんだよ。図書館で借りて来ているのさ」

図書館？

「ずっと遠くにあるんだ。滅多に人は来ない様な所。本当は立ち入り禁止地域。だから、誰も教えてはくれないよ」

あたしは、気になった。立ち入り禁止？つて本読むことがいけない事なの？

「図書館が立ち入り禁止なの？どうしてさ？」

食つて掛かる勢いで訊いた。

「歴史に關係するからさ。これ以上は言えない。ごめんね？」

真はサラリと身をかわした。

歴史に關係すること？何かがそこに隠されている。その事が気になつた。何となくだが、感じた。八神や、この日本の隠された真実。

それがそこに有る！調べたいけれど、あたしが調べて何になる？この日本を変えることが出来ると言っているのであるのか？でも気になるんだから仕方ないじゃ無い！

頭が悶々としている所に雫が帰ってきた。

何処行つてたの？って問いかける間も無く、雫はドカツと腰を下ろした。そしてスポーツバッグから古い本を取り出していた。

「雫！ちよつと！」

あたしは、思わず雫の腕を引っ張って、外に出るように促した。

「何だよ〜疲れてるんだからここで良いだろう！」

雫が暴れてるのを良いことに、あたしは強引に連れ出した。

「図書館！何処に在るの！」

あたしの場合、こういうところは隠すことなく聞いてしまう。そういう性格だから、雫も慣れたのであるろう？

「誰から聞いた？図書館の事？」

余り驚いた風でもなさそうだった。

「う……誰でも良いじゃん！」

「なら教えない〜」

意地が悪いな〜雫ってこう言う所、会った時から思ってたけどムカツク。

「ま、言わなくても判ってるけどね？真だろ？俺もあいつから聞いたから」

何だ、教えてもらったんじゃない！隠さなくても良いのに〜！

「行く気か？」

「行きたい！」

真っ直ぐ雫の瞳を見ていた。あ、目線の位置が変わった？雫の背がかなり伸びている気がする。

「あ〜……判ったよ！練習終わったら地圖書いてやるから、一人で行つて来な。遠いぜ？後、決して日本語以外使つなよ？これだけは守れ！死にたくなければな！」

かなりの勢いで念を押された。何故そんな事を言うのか判らなかつたから、頭の中は疑問符だらけ。でも、

「守るよ！練習後にも行つてくる！」

あたしにとって、一つの楽しみが出来た。

午後からの練習。それは何も変わらなく、いつも通り。

あたしも、今では体力が付き、^{スタミナ}フットワークも軽くなった。一番苦手なフットワーク。

これが苦にならなくなっただけ、練習試合も長時間持ち堪える^{こた}ことが出来るようになった。

後、変わった事。それは、ポイントガード同士の交流。一定時間だけだけど、あたしの意向を呑んでくれて、三十分だけ練習に付き合つて貰える様になった。春樹のボール捌きを初めは真似ていただけだが、今はそこそこ様になっている。ドリブルも上手くなったと思う。まず取られるようなドジは踏まなくなった。ああ、やはり地道な練習は大切なんだなと思う。

流石に、司令塔としての作戦などは自分で考えるようにしなければならぬ。健二がポストに入った時のタイミングを計る練習とか、真を使う時のスペースの取り方とか。友則の動きに合わせたパス。そして、予測不可能な雫の動きを汲み取る練習。チームとしての練習を重ねる度に思い知らされる。あたしがゲームの流れを掴む存在であるのだと。

勿論、皆だつて少しずつ練習の成果が上がってきている。特に伸びたのは、雫だった。

勢いだけでなく、柔軟性が出来てきたのではないだろうか？見ていて、ここで初めてあたしが入った試合で見たことの無いプレーをするようになった。これが、雫のやりたいプレーなんだろうなと思う。オールラウンドとしてはまだ身長が足りないのが残念だが、これで身長が健二くらい伸びたら……とんでもない選手に変化するだろう。あ、それで八神は、雫をオールラウンド選手として考えた

のかも知れない。

雫だけではない。健二は、言われた通り瞬発力を。真は、リバウンドを。友則は、確実さを。それぞれ身に着けようと頑張っている。少しずつ、変化はある。

そして、あたし達と、Bチーム春樹達は毎日練習試合をしてきたが、今の所、九十勝九十敗。三引き分け。と言う数字を出していた。どちらも引かない良い試合をして来た。

好敵手ライバルとなる者が在れば、皆気合が入る。負けたくない。と言う気持ちがあるからだ。

闘争心。それは少なくとも、あたしの母国では法律的には罪。だけど、向上心。は罪になるのであるうか？強くなる為に、力を注ぐ。これって、大切な事じゃ無いのかな？

ヒューマノイドを造って来たあたし達は、より良い物を造ろうと努力した。それは向上心。でも、他の誰よりも性能が良い物を！この考えは、闘争心ではないのか？これも、向上心と言う事が出来るのであろうか？

そんな事を考え始めていた。

「ほらよ。地図！」

雫は、練習後合宿所に帰ってから落ち着いた頃、あたしに一枚の紙切れを渡した。

「え」と……これって富士山の裾野付近？」

あたしは、気絶しそうになった。

「ここから自転車で急いで、往復四時間位掛かるかな？ま、頑張っ
て行ってくれ！あ、日本語以外何が有っても話すんじゃないぞ！そ
れから、忘れるところだった。身分証明書を持参！」

ここに至っても、雫は念を押した。

「判ってるって！」

あたしは早速向かう準備を始めた。

「夕飯、あたしの事気にしないで良いから、先に食べておいて！」

今日の当番は、春樹と亮。あたしは軽く声を掛けてから、急いで飛び出していた。

「夜の道は怖い。ああ、朝にすれば良かったかな？」

一人ごちてしまっていた。寒さが身に染みる。が、中頃まで走るとやっと温かく感じられるようになった。

買い物に行く道からの分岐を北に向かって走る。だんだんと大きな富士山が遠くに見えてきた。あの裾野。どうなっているんだろう？

只眺めていただけの富士山を見詰めながらあたしは考えていた。

あ、雪がちらつき始めた。温暖なロサンゼルスでは目にした事のないもの。それは、顔に当たるとひんやりして、そして水になり溶けてしまう。あたしはパーカーを深々と被った。目の前が真っ白になるからだ。

必死で二時間位自転車を走らせた頃、木造で出来た大きな建物が見えてきた。

「もしかして、これが図書館？」

あたしはワクワクしていた。

「かなり古い木造の建物。中は暗いな。もしかして閉館？」

自転車を置いて中に入った。木の匂い？それとも埃？何だか近代的な物は感じられなかった。どのくらい古い図書館なんだろう？そんな事を考えていると、イキナリ蠟燭に炎が灯った。

「ようこそ、図書館へ……」

一人の老人が受け付け台らしい所に腰掛けていた。

「まだ、やってますか？」

あたしは、身分証明書を見せた。すると、

「確認しました。こちらは二十四時間やっておりますよ？ご自由にどうぞ……」

奥へと足を伸ばして良いとそう受け取った。

あたしは、歴史に関係する物を洗いざらい調べて回ろうと思った。

「歴史の文献は、どこかいな？」

ラベルの字に目を通しながら、あたしは歩いて行った。どんどん奥へと歩む。蠟燭の火が次々と点いて行く。凄い。どういう仕掛けなんだろう？

「有った！」

あたしは一番奥にぶつかり、そして、見上げた。高い所にまで本がぎっしり詰まっている。どれを手に取りろう？悩んだが、気になる物だけをピックアップした。

蠟燭の火に目を慣らしながら流して読む。時には、パラパラ捲った。原子暦についての項目など無い、西暦と言うヨーロッパの伝統を伝える物ばかりであった。それは本当に古い文献。

面倒になったので、索引から調べることにした。何処かに、八神と言う人物が無いか探す。こんな古い文献に載っているとは思えないけども。

でも、有った。八神宗次やがみしゅうじ。でも、これはかなりのおじいさんだった。あの八神とは全くの別人。他の本を探した。しかし、八神らしい文献など無かった。そりゃそうだ。有ったら逆にオカルトだ。近代的な本は無いのであろうか？一番下の列の本を漁った。そこに有る一冊に、原子暦の項目が少しだけ記されていた。

「何々？」

あたしは食い入るように目を凝らして読んだ。そして、絶望した。何てことだ！

そこには、さっき見た八神宗次やがみしゅうじの顔写真が貼り付けられていた。核戦争は、日本が発端だったんだ。兵器を持った各国に向けられて核を発射したとの事だった。

日本が一番に沈んだ国。と言う事は、被害を受けたのかと思っていたが、実、根本的に、逆だった。発射した為に潰された。その時の総理大臣が、八神宗次やがみしゅうじと言う人物であり、指導者であった。

「まさか……その子孫が、八神ってんじゃ無いでしょうね……」

あたしは、この日本を好きになりかけていたのに！居るべき場所だっと思って始めていたのに！絶望と、哀しみが一気に押し寄せてき

た。

「……」

言葉が出なくなった。あたしは、この本を借りようと思い、受付まで持って行った。

「お願いします……」

何故あたしは、日本語を喋ってるんだろう？ああ、雫が念を押し
たからか……

「返却は、二週間後ね？」

老人は、そう言って貸してくれた。

帰り道、あたしは何故ここに来てしまったのか？悔やんだ。来なければ知らずに済んだのに……

冷たい氷の様な吹雪の中、あたしは途方に暮れながらも、足をあのプレハブ小屋に向けた。帰ってどうなる？あたしは今まで通り、皆と話が出来るだろうか？出来そうに無い。お腹が減っているはずなのに、何も口にしたくない。それ程ショックだった。

8 八神の正体

帰り着いた途端、あたしは、ゴロンと横になった。

「アイーシャ？飯、残ってるから食べよな！」

春樹が何事も無く話しかけて来た。

「……」

あたしは、喋る気さえなくなっていた。

「おい！飯食えって！」

亮が変に黙り込んでいるあたしに向かって言っている。

「あなた達と話したくない！」

カーツと熱いものが頭に上って来た。駄目だ押さえきれない！

「核戦争を起こしたのは！日本じゃない！何故そんなに平気で居られるの！変よ！」

取り乱していた。何をどうすればこの気持ちの高ぶりを抑えられるんだろう？

「アイーシャ？歴史の本借りて来たのかい？ちょっと見せてもらん？」

真がゆったりとあたしの横に来てゆっくり話しかけてきた。そのうち皆もあたしの周りに集まってきた。足音が聞こえる。

あたしは寝転がったまま、鞆から厚い本を出して無造作に手渡した。

「もう目は通してるのかい？」

目を通してから、これだけの怒りがこみ上げてきているに決まってるだろう！あたしは真のゆったりした物腰にまた腹が立った。

それを当り散らしたかったが、過ぎ去った過去を変えることなんて出来やしない。

「この本に書かれています。半分は真実だよ。八神監督が言っていた。遙か遠い昔の真実。何故これだけがこの日本に残っているのか？それは八神監督が残した、たった一冊の著書だからだよ」

八神の残した？ちよつと待つて！一気に疑問が膨れ上がった。

「八神は一体何者なの？その中に出てくる、八神宗次やがみしゅうじって八神の祖先なの？そうじゃないと、成り立たないじゃ無い！」

あたしは、腰から起き上がり、皆があたしの周りを囲んでいるのを見渡した。皆、顔が真剣だった。

「君が起こした罪は、僕たち日本人に比べれば、ほんの一粒の涙みたいな物だ」

健二は言った。そうだ。小さな事だ。何も、誰も、傷付けたわけじゃ無いのだから。

「僕達は、その大罪を認め、そして、革命を起こそうとしている反逆者なんだよ。そして、八神監督は、八神宗次やがみしゅうじの子孫じゃ無い。その当人。あの人は、この日本の総理大臣なんだから」

ちよつと待つて？何を言っているんだ？当人？八神宗次やがみしゅうじ自身だと言うのか？

「まだ知るべき時期ときじゃ無いってあの時言ったのは……こういう意味だったの？隼！」

隼は、苦笑いであたしを見ていた。あたしはまだ混乱している。

何千年も前のお話。それが、何故今の今まで隠されていたのか？八神が生きている。そのオカルトみたいな話も理解わからない。

「八神は……本当に人間なの？何でそんなに生きていられるの？」

話が、言っている事が自分でも分からない。纏まった言葉が出てこなかった。

「人間の域を超えてしまった人間。死を受け入れることが出来なかった人間……元々この日本は、核保持を許されなかった国だったらしい。だが、ある時、秘密のルートで核を持ってしまった。皆それを知らずに過ごした。平和だった。緑が溢れそして、その時は四季が有った……」

春樹がボソリと言った。

「でも、革命が起こった。核を保持していると言う情報が漏れたんだ。世界は批判した。勿論、国民も批判した。その革命の最中さなかどさ

くさに紛れてスイッチが押された。押した人物は今となっては分からない。だけど、それは外国人だと言う噂が流れた」

亮が続きを話した。

「外国人？その根拠はどこに有ったのよ！」

噂なんか真実じゃ無いじゃない！

「核は、日本の東京（首都）に落ちたからさ。その事が世界を揺り動かした。次は何処に落とされるのか？近代設備が整った国々は、自らの国を危険にさらされたくなくて、日本を集中攻撃した。その火花は次第に各国に広がった。世界の一つのバランスが崩れた。次々と各国の主要都市を狙い始めた。そして、終局を迎えた。それが、原子暦の幕開けだった……」

薫が見てきたかのようにスラリと言つてのけた。

「全ては、日本が核を保持してしまつたと言う事が原点だ。それは動かすことが出来ない真実……」

陸が言葉を切った。

「……あなた達は……この世界に本当に存在しているの？八神もだけど……まるで、その時を知っているかのように話すのね？信じられる物が今のあたしには無いわ……」

そう、夢物語みたいな話だ。人間の寿命は百年有れば良い。もし、本当に八神宗次やがみしゅうじが八神ならお化けか妖怪か、または神。あの写真で見ただけでは六十歳くらいに見えた。なのに、今は少年の姿……

確かに、あたしを助けるだけの力は持っているかも知れない。国一つ纏められる総理大臣だと言うならば、頷ける話だ。だけど、オカルトだ。

「放射能汚染の産物が、時間を狂わせてしまつたんだよ。僕達は、今を生きているが、過去の遺産でもある。君との距離はかなり有るかも知れないね」

真があたしの疑問を解き明かした。今度はSF？混乱する頭は纏まらない。

「信じられるわけ無いじゃない？こんな話！まともな物が何も無い

！過去の遺産？でもここにちゃんと居るじゃ無い！」

あたしは、真の腕を取った。温かい。ちゃんと生きている。存在しているじゃ無い！零にしたってそうだ。身長が伸びてるじゃ無い！僕達には、生まれた時の過去が無い。場所も分からない。両親を知らない。いつから生きているのか？このスモッグに覆いつくされる凍りつく世界で八神監督に拾われて、そして、やっと存在していると分かった」

真は昔を懐かしむように言った。

「俺達は、拾われる前の過去が無い。この日本が本当に存在しているのかさえ疑問だった。買い物に行くだろう？あそこに居る人々。疑問に思わなかったかい？何処から集まって来るのか？」

それは思った。何処に人が住んでいるのだろうか。でも、あたし達だって、こうやってここに住んでるじゃない。だから、きつと町の人々も何処かに住んでいるんだと思っていた。だって、ちゃんと活気があった。生きてるから存在感だってある。不思議に思うけど、目に見える物を信じてない人なんて居ないじゃないか！

「目に入る物が本当に存在すると思うのは、当たり前前の事だと思う。でも、この世にはそれで解決しないことも有るものなんだぜ？」

友則が頭をコキコキ鳴らしながら言った。これはあたしの疑問に対する答え？そんな簡単に答えを見つける事が可能なわけ無いだろう？真実は、自らの中に有るとでも言うのか？

「……じゃあ、話を変えるわ。言ったわよね？あなた達のその大罪を認め、そして、革命を起こそうとしている反逆者としての納得行く説明が欲しい」

あたしは、もうここに居る皆を受け入れてしまっている。ここがあたしの居場所で、帰るべき場所。だから、これからのことに話を変えた。だって、過去に捕らわれている場合では無いからだ。だってあたしはちゃんと生きているんだもの！

「今のこの世界を動かす事！日本をバスケと言う物を借りて表に出す。それが、八神監督の意思であり、俺達の意志。ヒューマノイド

制を打ち立てている人間らしさを欠いた者を、打ち砕く。心がない物を肯定している世界を、俺達が本来の姿に戻す！」

雫が熱く語った。この世界を、元に戻すんだと。皆も頷いていた。「ちよつと待つて！それならバスケットじゃなくても良いじゃ無い？普通に話し合いをすれば良い事だと思うけど？」

そうよ。バスケットと言うスポーツを用いて改革しようなんて馬鹿げてる。言葉で事足りることじゃ無いだろうか？八神は何を考えて皆を集めたのよ？

「八神監督だつてそのくらい承知している。実行して来ただろう。だけどそれが適わないと知つて、考えを変えた。スポーツは、実際に争いごとの一つ。そして、バスケットはアメリカで今一番注目を浴びている。勿論、他にも注目されている種目だつて有る。が、人数的にこれが一番適当だつた。判るかい？人の心を動かすのは、感動させることだと言ふ事を！」

あ、そうか。争いごとは今の法律下、人間にはご法度。そして、人の心を揺り動かすのは、感動を与えることにある。感情と言ふ物を持つている人間。あらゆる動物の中で、唯一複雑な心を持ち合わせている。それを利用しようとしているのか……

「皆の考えている事は判つたよ。そして、あたしはその一員。まだ頭は混乱してるけど、バスケットが好きだと言ふ事は変わらない事実だもの。この話、受け入れたわ。後は、半年後の討ち入りだけだね？」

あたしは、すっかり皆の顔を見据えて言つた。もし、皆がこの時代に生きていないとしても、存在してないとしても、あたしが認めたい仲間だ。絶対に手を離すことなど出来ない、素晴らしい家族だ。それを手に入れる事が出来たのはあたしの些細な罪から生まれた。でも、今更その罪を悔いる事は出来ない。もう、前に進むしかないのだから。

「春樹？夕飯。食べるよ」

あたしは、急に空腹感を感じて、春樹にそのことを伝えた。春樹は笑つて夕飯をよそつてくれた。夕飯は、あたしが初めてここに来

た時の献立。カレーだった。凄く美味しく感じられた。ああ、生きているんだなって実感。それだけでも、今のあたしには必要だった。

あたしはこの時を境に、洗濯物をする場合、下着をお風呂場に干すことを止めた。だって家族なんだもの？そんなの可笑しいよね？だから、皆と同じ場所に干すことにした。

冷たい風が吹く中、あたしの下着が皆の物と同じ所で靡なびいているのを見てクスリと笑った。ああ、ここに来て良かったと心からそう思った。そして、この日からあたしは、八神の事を皆が言うように、「八神監督」と呼ぶようになった。

#9 キャプテン・チーム・意識の意志

半年。それは凄く短い期間だった。ロサンゼルスに向かうその日が来る一週間前。八神監督が、皆にプレゼントを渡した。それは新しいバスケットシューズだった。

「今のうちに履き慣らしておきなさい」

八神監督は、そう言って配った。あたし達のバスケットシューズはもうボロボロになっていた。

「後、一週間で、渡米だ。皆分かっていると思うが、気合を入れて行け！」

「チーム名は何て付けるんですか？」

栗が問いかけていた。そう言えば、決まっていなかった。それに、AチームBチームのそれぞれのキャプテン、副キャプテンも決まっていなかった。

「好きなように名前は付ける。提出は渡米前まで。それじゃあ、練習を始めろ！」

あたし達は、新しいシューズを履き、そして気持ちを新たに練習に入った。

あの日から一年が経とうとしてるんだ……一気に駆け抜けて来た気がする。右も左も分からない日本に来て、日本語に戸惑いそして、仲間と交し合ってきた友情はあたしの支えだった。

絶望と怒りもあった。だけど、それももうあたしの中の疑問を打ち消してくれた。後は、これからの旅立ちに必要な心構えだけ。目的達成のその時まで、あたし達はまだまだ頑張らなければならない。いつもと変わらない練習。それでも、新たな気持ちで取り組んだ。新鮮さがそこに有った。

もう、あたしの苦手な物は克服できた。ディフェンスでは春樹に抜かれることが無くなった。逆にスタイルすることも出来るよう

になっている。成長する自分が楽しかった。

雫もかなり身長が伸びていた。今では真と同じくらいの身長になっている。友則は丁寧に物事を判断できるようになった。健二は、リバウンドに磨きが掛かった。ゴール下では亮と薫を押し留めることが可能になっている。柔軟性が出来てきた。真は力強い積極性が出来た。

見事なまでに成長を遂げた。これって凄いことだよな？何処までも成長を楽しめる。人間ならではの面白さ！エンジンアでいるより、選手としての自分が凄く好き！素直にそう思える。ああ、気持ちが良い〜！最高だ！

そんな感傷に浸っていると、涙が出てきた。

「アイーシャ！何、泣いてんのさ！」

雫が、あたしを見て珍しくオロオロしていた。こんな雫見たこと無かった。

「嬉しいからだよ！嬉し泣き！涙腺緩んじやったよ。チキショー！」
涙を見られて恥ずかしいって思った。だから思わず腕で涙をゴシゴシと拭った。でも、目が真っ赤。まるでウサギみたいに……

「素直になれよ〜アイーシャ？」

ああ、それは分かっている。喜怒哀楽つて必要だよな。あたしはそんな事を感じながら、皆を見た。イキイキとした表情。ああ、このまま時が過ぎていけば良いのに……何故か皆と離れ離れになってしまう気がしてくる。

不安？これは不安なの？でもどうして？

不安なんか感じる様な要素はここには無いのに。何故だかこれらの事を考えると落ち着かない。渡米を前に気持ちがあらぬ方に揺さぶられているとも言っのだろうか？いい加減目覚めないと！あたしが今ここに居ると言う真実は代わりの無い物なんだから！

「それじゃ、試合を始めるぞ！」

八神監督が、皆を集めた。あたしはその言葉を聞いて皆と共に集

まった。しかし何かおかしい。遠くで何かを言っている気がする。何だろう？聴き取りがたい。何を言ってるの？監督！聞こえないよ！存在が、気配が、あたしの前から遠退いていく……気付くと真っ暗な世界にあたしは身を投じてしまっていた。

「アイーシャ！大丈夫か？」

何？これは……

「雫？あたしどうしたの？」

訳が分からない状態で腰から起き上がった。何だかフラフラする。

「どうしたの？はこつちの台詞だぜ！急に倒れやがって！」

倒れた？あたしが？ああ、そう言えば何だか視界が揺れた覚えがある。

「少し熱っぽいぞお前。体調が悪いならそう言えよな？」

体調が悪いとかそんなこと思わなかった。ただ、存在があやふやで。

「雫、ちゃんとここに居るよね？あたしの前に居るよね？」

急に気になった。見えてる物が本当にそこに在るのか？その心配でも、雫があたしの頬に手を寄せてくれてちゃんと存在していることが確認出来たから、あたしはやっと落ち着けた。良かった。ちゃんと居るんだ。

「疲労かな？今日は見学しておけ。八神監督が、帰りは車で運んでくれるそうだから」

「あ、うん」

あたしは、素直に頷いた。皆が寄せ集めてきた衣服があたしの身体に掛けられていた。

汗と埃の匂いがする。生きてる証だと分かってほっとした。

「アイーシャ？」

八神監督が、あたしに声を掛けてきた。

「無理、させ過ぎたか？この僕は……」

「いいえ？」

八神監督は、試合の審判をしながら考え事をしているようだ。あ、あたしのチーム四人しか居ないから、かなり苦戦してる。それに、さつき雫がここに居たって事は、それまで三人でやっていたことになるのだろうか？

今日負けると、百八十二対百八十一、七引き分けになって先を越される……こんな時だったのに勝ち負けを意識してしまった。

「そう。なら良いんだ……あの時、君を助けた事が本当に良かったのか？悩んだことも有る……アイーシャ？君はもう、僕が何者なのかを知っているね？」

まるで、誰かに聞いて知っているかの様に話す。この人は自分の存在をどう思っているんだろう？

「日本の総理大臣。ってことですか？半年前位に知りました。そして皆にも話を聞きました……」

何故か、言葉を紡ぐのが難しい。勝手に人の秘密を知ってしまったという罪悪感から来るものなのだろうか？

「別に、隠そうとか、そんな事は思っただけじゃなかったんだ。でもね、君は余りにも世界を知らなさ過ぎたから。言っても信じてもらえないだろう？そういうのが頭から有ったんだ。その辺は、許して欲しい。でもここに残ってくれたと言う事が、これからの世界を変えることになる一歩だった。僕には君が必要だった。そして、この日本にも」

それは、あたしがここに居て良いってことですか？

「あのヒューマノイドの試合で君を一目見て判った。人間だってね。僕は偶然あそこに居た。ヒューマノイドばかりだから、大した物を見れるとは思ってはいなかった。ただ、現状把握だけをしたかった。何処まで人に近いヒューマノイドを造っているのだろうか？その研究」

研究？只その為だけにあそこに居合わせていたのか。

「社会人のエンジニアが造り出して来たヒューマノイドのプレーも見てきた。でも、ピンと来るものは無かった。全部偽者を感じた」

そうかな？あたしには、やはり格差って物を感じずにはいられなかったが？所詮中学生が造るヒューマノイドが、社会人の造るヒューマノイドに勝る物はない。それに、あたしは、社会人の造ったヒューマノイドを見て育った。ちゃんと生きてるように見えた。でも、テレビという媒体を通しての感想だ。実際にこの目で見た訳ではない。

「アイーシャは、テレビでしか見たこと無いんだろ？知っていたかい？あのテレビ放送は、すべて過去の映像で有るのだと言う事を……」

「過去？って……どういうこと？」

じゃあ、本当の社会人の造ったヒューマノイドの試合は？あたしの両親が造り上げていた物は！

「放送されているのは録画された、何千年も前の過去の遺産。本物の人間の試合だ。実際のヒューマノイドの試合は、ごく僅かしか無い。それも各国のお偉いさん方の目の保養用の為だけに用意されている。だから、一般の者達はその試合を見ることは禁止されている。極秘の事だ」

トレーニングループや、施設は？あたしの両親がやってきた事は、そういう人達用の極秘の仕事？それって重要な（シー）問題じゃない！何故問題にならないの？全てが虚像の世界だって言うのに！

「次世代を創る為の只のまやかしに過ぎないからだ。『自分達は、こういう物が造れます！これ以上を造りましょう！』それを目標にして向上心を掻き立て、やる気を出させる。皆騙され、そして完全な物を目指す。有り得ないのにな？」

ん？有り得ない？

「人間は不完全な物。そんな物から完全な物を造り上げる事など出来ない。気付いている筈なのに……それを求める。ならばいつそ、不完全な物のままでいた方が素晴らしいと言うのに！」

そこで、雫が春樹の手を叩いてしまったらしい。八神監督は、審判の仕事忘れてなどいなかった。ファールの警告。

「雫、ハツキング！ オフェンスボール！」

時間が今に戻った。ハツとあたしは試合に眼を向けた。あたしが居ないから、かなり厳しい状況だ。一人居ないだけで、チームはガタンと形を変える。五人と言う人数。そして仲間。信頼が出来るからこそ成り立つ種目。

人間だから勿論感情が有るし、必要以上に拘こだわる。だから、ヒューマノイドに一縷の望みを見出した。が、それも只の虚像。何を持って完全なる世界を作ることが出来るのであるのか？ いや、無いであらう。

試合は続行した。

「八神監督？ 一つだけ訊いて良いですか？」

始まった試合を見ながら、あたしが今度は問いかけた。

「世界を変える為に、あたし達は存在するんですよね？」

肝心な事。信用して良いのだろうか？ この日本の総理大臣である、八神監督を。この人には疑問しか持っていないかった。でも、信じられる物が欲しい。これって、只のあたしのエゴだけとそれが必要なんだと判った。

「そうだよ。そして、僕も君達を信頼している」

八神はそう言って、滅多に見せない表情であたしに笑い掛けてくれた。安心しなさい。そう言っているように見えた。

試合はその後直ぐに終了した。あたし達のチームの完全なる負け試合だった。

「所で、キャプテンは誰がやる？」

あたしが車で送られて、皆が自転車でプレハブに戻った後、それぞれ話を切り出した。丁度、輪を作るかのように。勿論、直ぐ横では春樹達も話し合いを行っていた。

「健二で良いじゃん。一番の年寄りなんだし」

雫は面倒だつて顔をしてそっけなく言った。

「良いじゃんで、済まされるのか！」

真面目一本やりの健二は反論した。反論もしたくなるだろう。だって、このチームの方向性は健二の性格に一致してないのだから。誰が見ても、ポイントガードの性格が滲み出たプレーが大いに目立つ。

「もつと、真剣に考えてだな」

健二は指を立てて真剣に考えろと言っている。それを真は、

「一理あるね？」

珍しく本気。話に乗ってきた。

「僕が考えるに、年とか関係ないと思うんだ。まず、チームの方向性が重要！僕たちのチームは、アイーシャ？君に掛かってる。今日プレーをしてて思ったんだ。君がいなくてどうもしっくり来ない。君がキャプテンをやるべきだと思う」

突然一番味噌つかすのあたしに話が振られた。

「ちよつと待った！あたしがキャプテン？」

健二や真を差し置いて、そんな大役出来る訳無いじゃないか！そりゃ、経験が無いとは言わないけどさ……

「友則、雫！何とか言ってよ〜！」

でも、あたしの意志など関係なく、

「あ、それ良いじゃん！俺、賛成〜！」

友則はあっさり言っただけで退けた。賛成って……雫、何か言っただけでよ！あたしは、眼で訴えるように雫を見た。でも雫は、

「俺も賛成。アイーシャがキャプテンだったら、ポイントガードの力を十分世間に示せるし？」

あらら……そんな意見があり、多数決で決まった。チームのキャプテン・アイーシャ軍団。

「じゃあ、副キャプテンは……？」

むくれてあたしは言った。キャプテンを支えるのは、副キャプテンの大事な役目だ。

「アイーシャの事、良く判ってる奴がやれば良いじゃん？」

それって、誰よ？あたしは周りを見渡した。

「真、お前やれば？」

雫は、ケロッとした顔で言った。何ともあっさり言っただけのけるな。こいつ……

「僕？僕より雫の方が良いだろ？アイーシャ？」

え？ドキツとした。イキナリあたしに話を振らないでよ！ある意味、あたしを誰が一番理解出来るか？って事は、あたしと一番親しいのは誰か？に繋がるだろう！ああ、これを女のあたしが決めるって事？男が決める！って言いたい。日本男児の名が泣くぞ！

「真だろ？」

「雫だよ！」

ああ、揉めてる……

「多数決採れば？」

友則は我、閉せずだし……健二と言えば、

「う〜んどつちもどつちだよな？」

って考え込んでる。決めるのはあたしなのかい！

「キャプテンが決めれば？」

ああ出たよ……お得意の無責任発言。こついう時は、健二も別に何も反論しない。全く頭を抱えてしまう。とにかく落ち着こう。

真は、確かに優しいし、気配りが出来る。頼ろうと思えばきちんと応えてくれるだろう。だから、素直に甘えることが出来る。

雫は、勝手に判断してしまう。けど、そのヨミは正しい。こちらから言わなくて良いだけ気が楽だ。

「ん〜じゃ、あたしが決める！」

あたしは立ち上がって力説でもするかの勢いを見せていた。後の四人は驚いてあたしを仰ぎ見ていた。何が始まるんだと隣も目を見張り始めた。

「し……」

「し？」

皆が見ている。何だ、この視線は……

「し、雫！あんたがやんなさい！」

ドツと皆が沸いた。何だ？この有様は？

「あはははは、やつぱ稜じゃん！」

「へ？」

あたしは、素っ頓狂な声を出して突っ立ってしまっていた。

「はいはい。掛け金、ここに入れてね。」

もう皆大騒ぎ。何だこれは？友則が、茶色い小袋を持って周りをつろついている。そして、あたしは初めてここで気が付いたのだ。あたしが、車で移動している間に賭けをやったんだと。何にも知らないからって……こいつら！

「そのお金、没収！」

駆けずり回ってあたしは友則を捕まえた。そして、家計の足しにしたのは言うまでもない。

チーム名は、『南風』みなみかぜ

日本名でそう決まった。

「何で南なのさ？東じゃないの？」

東洋の国、日本。ジパングなら東が当たり前だと思った。

「寒い国だろ？ここは……だから南国にちなんで南。気分的に気持ちが良いだろう？風は流動的で、躍動感がある。だから『南風』」
名付け親は稜。あたしはこう言つの考えるの苦手だから、副キャプテンになった稜に頼んだ。皆反対しなかった。あたしは説明を聞いて納得し、そして心から良い名前だなと思った。

「さて、渡米は来週です。まず、皆体調を整えておいってください！練習も、微調整へと移します。でと、ふつつかなキャプテンですが、宜しく願います！」

最後にあたしは締めくくった。もう、夜中になる。身体を休めないと……特に言いだしっぺのあたしは！只でさえ今日倒れてしまった。こんな迷惑を掛ける訳には行かない。それは、責任感から来るものであるし、ヒューマノイドとして参加するのであれば、試合放棄になってしまう。

しかし、革命はどうやるつもりなんだろう？ふと疑問が出来た。

ヒューマノイドとして参加し、本当は違います！って言い出すつもりなのだろうか？そんな事で人が感動するとは思えない。きつと、あたしがあの時出場してしまった様に、観客は批判するだろう。それだけで済むだろうか？国家を賭けた一大博打。そんな波乱が起こる気がする。

眠りに就く。心地が良い夢を見た気がする。

何だろうこれ？ああ、暖かい。まるで、太陽の下のんびりとしていたような気がする。いつまでもこのままで居たい。そんな抽象的な夢だったような気がした。

10 渡米

「皆、集合！」

八神はあたし達を招集した。勿論明日の打ち合わせだ。あたし達はしつかり頭に入れた。

渡米。あたしの祖国アメリカ。カリフォルニア州ロサンゼルス。今、あそこはどうなっているんだろう？思いを馳せてしまっていた。「アイーシャ？向こうに行ったら英語は使わないように！お前は、日本国籍で登録しているのだから。思わず……等無などいように！」

日本国籍？この髪の毛は、地毛なんですけど……金髪ブロンドがライトの光の下煌めいたら誰だって信じないだろう。にしても伸びたな……カットなんてしてない。面倒だし、友則の様にゴムで一つにくくり上げている。皆は時々切りあいつこしている。こう言う事は春樹が上手い。ボール捌きもそうだが、手先が器用なんだな？とつくづく思う。

「では、明日は七時に出発！以上解散！」

八神はそう言ってあたし達を解き放った。

そして運命の日がやってきた。

あたし達は荷物を纏めていた。

そんな中、あたしは大事な日記を自分の棚に置いた。帰って来てから、また書こうと思ったからだ。暫く日記は止めとこう。向こうに行って書けるかどうかも判らないし。

天候は別にいつもと変わらない。八神監督が、あたし達を迎えに来た。車は三台。その一台に乗り込み、空港まで走った。あ、今思い直せば、この車を運転してくれる方々は誰なんだろう？八神の監督の側近か何か？特別な対応をしてくれる。まあ、八神監督が総理大臣であるならば、それに従う者がいてもおかしくない。忠実な人達だなと思った。

あたしは、空港に入る前に渡されたチケットと自ら持参していた身分証明書を見せて、ゲートを潜る。これから、行くんだロサンゼルスへと……行く？戻るじゃなくて？ちよつと言葉が間違っているような気がしたが、ふと可笑しく感じられた。あ、この日本にまた帰ってくるつもりなんだなと思っっている、自分がいることに気がついたからだった。

あたしは、飛行機に乗ると、周りにあたし達以外居ない事に気が付いた。本当に寂しい旅の始まり。しかしまだ寝足りなかったのか、ぐっすり寝てしまった。あの時と同じだ。只違うのは、仲間が、皆が周りで話している声が聞こえてくる事。だけど次第に遠退いて行った。意識がすーっと深い所へと沈んでいく感じだった。

いつの間にか、飛行機は空港に止まっていた。

「いい加減起きろよ！」

雫の音が、耳元近くで聞こえた。

いつの間に乗ってきたのだろうか？他の客がざわめいている。何だか懐かしい響きだ。

空港を出ると、日本で見る事が出来なかった、覆い被さる様な大きな青い空が頭上に広がっていた。太陽の光で周りが輝いている。暖かくて、温暖な砂漠気候特有のロサンゼルス！行き交う人々は薄着であたし達は浮いて見えた。

「暑いね？ここがロサンゼルス？」

真は参ったと言う感じで上着を取っ払っていた。勿論、皆感じていたんだろう。次々と上に着ている物を脱いでいった。

「皆、こっちに来い！」

八神監督が引率して、ホテルへと直行した。

ホテルはきちんと綺麗に整備されていた。

あのプレハブのお風呂呂じゃなくてちゃんとした物。あたし達は、トリプルの部屋を用意されていたので、友則と雫の三人でそこに居座

った。

「すげー綺麗だな！」

まるで御のぼりさん状態。窓から見える街並みを眺めて二人ともご満悦の様子だった。

「良いよな？ロサンゼルスは！ここに住んでたら、日本に帰る気しないよな？」

「そうそう、何たって暖かい！それに、行き交う人々が美しい」
こいつら、自らの国を放棄する気か？なんて、あたしが怒ってどうする。自分で自分を突っ込みたくなつた。が、やはり、このこと、日本を比べてどちらに住みたいか？考えれば普通ロサンゼルスを選ぶだろう。何と言つたつて環境が良いのだから。

「にしても、俺達の今後の予定つてどうなっているんだろうな？」

「試合の事とか聞かされてないし？」

「そうだよね」八神監督が全部指揮してくれるから、それを待てば良いんじゃない？」

なんちゆう、曖昧な会話。でも、誰一人として八神監督からの指示に背かないんだから、偉いものだ。もし、今から試合！何て言い出しても、ちゃんとその通り文句も言わずやるだろう。でも、結局は改まった形で伝えてくれたのである。

夜、ロビーにあたし達を集めて八神監督が言った。

「明後日、試合がある。相手は手元にある用紙の通りだ。目を通しておくこと。練習は、しない。今まで通りのことをやれば良い事だ」
そう言い残して、八神監督は立ち去つた。

「練習しないって、ヒューマノイドとしての立場を考慮しろ！って事なのかしら？」

あたしはボソツと呟いてしまった。だって、ウォーミングアップをしないと、怪我をする原因になるし。

「ウォーミングアップは控え室でもすれば良いだろう！」

でも、この人数で、狭い部屋で出来る？

「俺達はチームごとに違う部屋を与えられるんだろ？な、きつと」
渡された用紙を見ていた。四チームのトーナメント戦になっていた。あたし達は違うライン上に並んでいる。

「ん？これって、社会人^{プロ}のチームじゃん？」

あたしは、驚いてもう一度見直した。『ニュー・ウェーブ』と、『ライト・カミングス』の名前が堂々と載っていた。そのうちの一つ、『ニュー・ウェーブ』は、あたしの両親のチームだ。

「ふーん。そうなんだ？」

雫は至って冷静。皆も別に気にしていない。

「ふーんっ。て、何も感じないの？」

「だって、社会人^{プロ}と言ってもヒューマノイドだろ？大したことないじゃん！」

当たり前だって感じで友則は言い返してきた。

まあ、そうなんだけど。八神監督も、言っていた。テレビの中の彼らは過去の遺産だと。実際の試合は放映されず、お偉いさん方の目の保養だとしても、中学生の造るヒューマノイドも結構な代物だったと思う。だから、あたしにとったら雲の上の世界の者。エンジニアの誉れだ。あれ？あたし、どっちの味方なんだ？

「……」

何も言えなくなった。否定と肯定が入り混じって、自分の主張が出来ない。つまり、この時点であたしは自分に負けてると自覚してしまった。

「さてと、明日は一日ゆっくり旅行気分を味わいますか？」

ぞろぞろと、皆はこの場を立ち去り各部屋に足を運ぼうとしていた。

「アイーシャ！何やってるんだよ？早く戻ろっぜ？明日は観光案内してくれよ〜」

雫が遠くで呼んでいる。あたしはまだ呆然としていた。気持ちが整理できない。過去と今とが一つの天秤にぶら下がっている。そし

て、どちらにも傾かない。釈然としない気分。それを晴らしたくて、あたしは夜道のロサンゼルスロサンゼルスの街へと繰り出した。

「アイーシャ！」

後ろから追っ掛けて来た雫が、呼んでいる。

あたしはその事に気が付かずに、ヒューマノイドと人間が入り混じるこの街を眺めていた。平和だった。ネオンが街を彩り、そして闊歩していく足取りがイキイキしている。

この道を真っ直ぐ行った先には、あたしの家がある。お父さん、お母さん。そして、兄妹。ジョン達が住んでいる。懐かしい顔ぶれが頭に浮かんで来た。まるでその人達が目の前に居るかのようにも、幻だった。

「アイーシャってば！」

走って来たらしい。雫があたしの肩を勢い良く掴んだ。あたしはハッと今に戻ってきた。

「勝手に動き回るな！お前にとって此処ロサンゼルスは庭みたいな物かも知れないが……俺達から離れて勝手に行くなよ！」

雫があたしの肩を掴んで揺すぶっている。ああ、雫の背。伸びたんだな。何て事を思った。同じ背丈ぐらいたったのに、今では遙か頭上に顔がある。たった一年で変わる人間の身長。そして、あたし自身。それはお金では買えないものだ。時間じゆうという大切な物。

「ごめん。どうかしてたよ。帰ろうか？」

あたしは、雫と横に並んで歩いた。忘れちゃいけない、あたしはもう日本人だ。チーム『南風』のキャプテンだと言う事を……そして、それを支える仲間が居ると言う事も。

次の日は観光旅行。それぞれが行きたいと思っている所をくまなく歩いた。

観光案内はあたし、アイーシャの担当。今日の朝、皆に英語が解

かるか訊いたら、案の定解かっているらしい。ああ、遊ばれていたんだあたし……今思い返せば、日本語を覚える事に苦労したなんて事忘れていた。ま、今更だけどね。

最後に西海岸の海に行った。寄せては返す波の音が気持ち良い。そんな中、男共は一気にパンツ姿で泳ぎ始めやがった。情緒を知らぬのか！こいつらは！……なんて思ったけど、これってある意味日本では体験できない事なんだよね？

「アイーシャ！お前も来いよ〜」

呼んでいる。気持ち良さ気にはしゃいでる姿はまだ少年の様だ。あたしはスカートだったから、靴下だけ脱いで波間に足だけ浸かった。気持ちが良かった。

そして、明日の事に思いを馳せた。どうする？アイーシャ？明日が本番。一年の間に培った物を発揮出来るのか？西に沈んでいく太陽の光を浴びながら、あたしは今日というのんびりとした時間を心いくまで堪能した。皆の笑顔が心にしつかり焼きついた日だった。

11 初戦・勝利・敗退

試合当日。朝からバタバタとしている。雫も友則もベッドから抜け出し早くから荷物を整理し、着替えをしていた。あたしも急いで支度した。取り敢えず女なので、バスルームで着替える。そして荷物を纏めた。

ロビーには八神監督は勿論、皆集まっていた。

「遅いぞ！やる気ないのかと思っただぜ！」

英治が苦笑いしていた。

「さて、皆揃ったし、競技場までこれから向かう。レンタカーを借りているので、それを利用しよう」

八神を先頭に、あたし達はホテルを出て車に乗った。運転手はアメリカ人だった。どういう繋がりなんだろう？外交官関係のお偉いさんの運転手？あたし達は、車内では何も話さず無口だった。ヒューマノイドがペラペラ話をするのもおかしい。だから、雫、友則も何も話さなかった。きつとそう言うのを考慮しているのだろう。

ホテルから二時間掛けた所に、競技場があった。近代的なデザインがシンプルで立派な建物だった。周りは緑が多く、ロサンゼルスの名物パームツリーが道沿いに綺麗に植えられている。

あたしは此処を知らない。こんな所、何時出来たんだろう？新しく作られたのかな？何て思って、車外に出た。そして、続いて走ってきた車と合流し、皆揃った。これから此処で決戦がある。人間か？ヒューマノイドか？あたし達の討ち入りの開始だ！

控え室へと二チームはそれぞれ移動した。別に一緒でも良いのだが、別の方が空間は取れる。入って、各自ロッカーを決めると、用意していたユニフォームに腕を通す。赤地に黒文字の『南風』という文字がクッキリ入っていた。そしてあたしは四番。雫が五番。健二が六番。真が七番。友則が八番。背中と胸にしっかり番号が入っ

ている。皆引き締まった顔をしていた。あたしは、

「準備体操を各自行いなさい！」

命令口調で促した。

皆一斉に独自のウォーミングアップを始めた。ああ、これから始めるんだ。ドキドキする。

試合進行は、同時にスタート。だからお互いの試合は観戦出来ない。春樹達のチーム名は『和漢』^{にほん}というらしい。対戦相手は、あたしの両親が率いるチーム『ニュー・ウェーブ』であった。そして、あたし達はもう一つのチーム『ライト・カミングス』と初戦に当たる。程よく体が温まった所で、あたし達は控え室を後にした。丁度その時、隣の控え室のドアが開いた。春樹達もアップし終わったらしい。一汗掻いていた。

「お互い決勝戦でな！」

「勿論。楽しみにしてる。負けるんじゃないわよ！」

『和漢』のキャプテン春樹と、あたしはお互い握手を交わした。ちなみに、副キャプテンは英治。お互い、ポイントガードがキャプテンをやっている。元ポイントガードが副キャプテン。判りやすいチーム構造かもしれない。

あたし達は、ぞろぞろと試合をするコートへと向かった。

天井から照らされるライトが眩しい。日本の物は省エネを重視しているからここまで光を使うことが出来ない。昼間は絶対点けることが無い。今まで暗い中練習してきた。この明るい会場の光を浴びると、一年前を思い出してしまった。

あの時は、生きるか死ぬか？の瀬戸際だった。神にさえどうすれば良いのか？を訊いてみたくて願った。それが、今はこうやって生き延びて再び舞い戻り、バスケットの選手として生きている。それも、ヒューマノイドとして。全く同じ状況なのに、あの時感じた不安は無い。それは、皆が居るから。そして、八神監督という指導者が居るから。もし、失敗してもあたしには、仲間が居る。それが心

強かった。

相手は白いユニフォームを身に纏っている。相手はヒューマノイド。かなり、調整してきているみたいだった。動きが滑らか。やはり中学生が造るヒューマノイドの比ではない。比べるだけ野暮なことだ。

観客席は、非公開だろうから少ないだろうと思っていたが、結構な人数が入っている。満席？かと思えるほどだ。それに、テレビ中継でもするつもりなんだろうか？カメラが数台入っている。八神監督？これはどう言う事ですか？あたしは疑問を感じ始めていた。何か企みでも有るのだろうか？でも今は……

暫くして、人間の審判が集合の合図をした。人間？疑問がまた一つ。でも、あたし達は何も言わず急いで整列した。

あたし達の前に並んだヒューマノイドは、かなりガタイが大きい。アンドロイド（男性）だ。ポイントガードだと確信を持った相手もあたしより遥かにデカイ。これは、高さでは負ける。とそう判断した。

一礼をしたあたし達は、すぐさま行動に移す。ジャンパーは、健二。でも、身長差があるので、こぼれ球狙い。雫と目を交わしながら、あたし達は動く。そして、高々と審判はボールを投げ上げたのである。

背が高い。性能も良い。だけど、あたし達の行動を予測できないヒューマノイド達は、良い所を見せられなかった。

健二のスルーしたジャンプボールは、こぼれ球としてあたしがキープした。そして、速攻。既に走っている雫の手に渡り、見事にゴールを決めてくれた。ここで喜びたい。がしかし、敢えてそっけない振りで試合に戻る。既存のヒューマノイドの様に。

会場はざわついていた。それもそうだろう？社会人のヒューマノイドが、訳の分からない日本チームに点を入れられたのだから。

それから先、何点か点を入れられたが、こつちも負けてはいられない。直ぐに点を入れ返した。やはり、背の差のハンディは大きい。ここでと言う所で、上から攻撃される。ガタイが大きいから、パワーも有る。突っ込んで来られたら、押さえようがない。ファールを取られるのが関の山だ。だから、あたしは、なるべく前で、オールコートを敷いてディフェンスするように促した。ゾーンでは歯が立たないのだ。そして、ステイル狙いで当たる。これが上手く行き一回抜かれた得点を同じにした。

運動量がネツクになる試合展開。一年前のあたしには耐えられなかっただろう。だけど今は違う。みっちり体力は付けた。ただし、相手は疲れを知らないヒューマノイド。だから最後までどうなるかなんて判らないのだ。

ここで、点が欲しい。あたしは必死でディフェンスした。パスを出すタイミングを見計らう。そろそろ前半戦のタイムオーバーだ。その前に点を！ヒューマノイドは顔色一つ変えない。何を考えているのか判らない。けれど、エンジンアだったあたしには判る。プログラムでの動きなら、今だ！あたしは、目の端に友則がついている四番が、左に動いているのが見えた。来る！パスを出そうとしたその瞬間を狙って、手を出した。ビンゴ！あたしはカットしそのまま敵の本拠地へとドリブルした。後ろから走ってくる敵はグングン追いついてきた。あたしの脚では無理！そう思っていた時、

「アイーシャ！」

雫が逆サイドで並んで走っていた。あたしは雫にパスを出した。そして、シュート。タイムアウトギリギリで、二点差をつけることが出来たのである。

休憩時間。ハーフタイム あたし達は、ざわめくコートから控え室へと移った。皆、ヘトヘトであった。

「ああ、ここまで手強いとは思ってなかったぜ？何だよあれ！あん

な精密に出来てるヒューマノイドってありか？」

まず本音を吐いたのは、友則だった。

「あ、それ言ってる。侮りすぎた。あれで心が無いなんて、どう言う事だ？間違ってるぜ或る意味！」

雫も参っているようだった。

「うーん。でも、二点差で終われて良かったよ。アイーシャ？ナイスカットだ！後半は、もう少し僕も粘って行くようにするよ。」

真のあやふやさはここでは無くなっている。真剣に勝ちに拘こだわっているのが判った。

「俺も、高さに対抗するだけの動きに注意するぜ」

皆それぞれ考えていることは同じみたいだ。高さでは対抗できない。ならそれを補う動きでカバー！。

そろそろ時間だ。後半戦が始まる。

「じゃあ、行くよ」『南風』〜ファイト！

「おう！」

あたし達は、円陣を組んで気合を入れた。

まだ体の疲れはピークでは無いけれど、疲労感はある。声を掛け合えば良いのだが、それが出来ないから疲れが余計に出るんだと思う。声を出し合う事は、力の源になるのかも知れない。ふとそんな事を感じた。

再びジャンパーがサークル内に立ち、試合続行。このまま逃げ切らねば、シーソーゲームが続くだけだ。

もう判っている。敵は背の高さを利用して来る。ボールもオーバーヘッドパスを出し始めるだろう。守りもゾーンディフェンス。その代わり、あたし達は下から攻める。バウンドパス主体。ドリブルも低く構えて、敵のスタイルは防げる。

どれだけコートを往復したろう？息が上つて来た。それに比べて、相手は何の変化も無い。ヘトヘトになっても、最後まで続けなければならぬ。これが人間の試合だ！

肩で息をしているのが分かる。これ以上なく疲れている事も。でも、休むことが出来ない。負けたくないから！

最後までシーソーゲームは続いた。あたし達が点を入れれば入れ直し、逆転されたら取り返す。その繰り返し。そして、八十五対八十六点の時、転機が来た。

あたし達が一点差で追い掛け、時間は後三十秒の場面。スコア掲示板を見ながらこのままで終わらせるわけには行かなかった。点を入れられた直後、エンドラインから雫が投げ込んだボールは、あたしに渡り、このまま行こうとしようとした瞬間、敵はオールコートでプレッシャーを掛けてきた。

あたしは必死でフェイクを掛けようと敵のポイントガードを見破った。抜ける！そう思いレッグスルーした。勿論騙されてくれた。

後はこれをどうにかゴールまで運ばなければならぬ。時間が無い！速くも無いドリブルであたしはコートの端まで突っ込むように駆け出した。チェンジしてくるヒューマノイドを交わし、ゴールを目指して一気に走り抜けた。あ、健二が空いた？あたしは、瞬間、視界に見える穴を見つけ、健二にフックパスを出した。健二はそのスペースに走りこみ、見事にゴールを決めてくれた。そして、その後、笛の音とブザーが鳴った。

勝った？あたし達、勝ったの？思わず床にへたり込みそうになるのを、真が受け止めてくれた。

「お疲れさん。見事だったよ？でも、立ってなきゃね？」

真は耳元で囁いた。

「悪い……」

あたしは何とか持ち直して、しっかりと地面に足を着けた。そして、整列した。ヒューマノイドの何も感じてない表情が虚しい。悔しくないの？何も感じないなんて、哀れだよ……あたし、人間で良かったよ！

勝者の号令が掛かり、一礼した。歓声^たが沸きあがり、勝者を讃^たえる拍手が起こっていた。それをバックに、あたし達は控え室に戻る

うとした。が、反対側で行われている試合がまだ終わっていない事に、雫が気づいた。

「おい、あいつらまだ終わってないぜ？観に行くか？」

それはどうだろう？観に行くなんてヒューマノイドがしないだろう？隠れて入り口から観てようとあたしは提案した。

「あいつら、負けてるぜ！しかも、十点差。これって時間的にも厳しくないか？」

友則が、ボソリと溢した。確かに、残り一分で十点を追うのは厳しい……

「春樹、上手い具合に動いてるのに、周りが高いから、封じ込められてる。これは厳しいね」

真が静かに付け加えた。

こつやつて、仲間が負けているのを観るのは悔しい。観てるだけで手伝えないなんて……でも、最後まで諦めないように踏ん張っている姿は、凄く分かった。だから、目に涙が溜まる。頑張れと応援したくなる。同じく練習を重ねた者達だから味わえる気持ち。勝ったら敵になるけど、でも、ここで一緒にプレイしたい！お願い勝って！そう心の中で何度も呟いた。

だけど、時間は無常に過ぎて行った。そして、後三点差と言うところで、終了の笛が鳴った。

それでも、よく頑張ったって褒めてあげたい！悲しいはずなのに、感情が出せない。ヒューマノイドは、泣く事など出来ないのだから……観客席は歓声の渦になっていた。これ以上、あたしは春樹達を見る事が出来なくなって控え室に走った。そこで思いっきり泣いた。声が外に漏れようと関係ない。泣きたいから泣くんだ。それに気を遣ってくれたのか、誰も中に入ってこようとしなかった。あたしが泣き止むまでは……

12 決勝戦（前半）

決勝戦。それは一時間経過後になる。

あたしが泣き止み落ち着いた頃に、雫達は入って来た。

「アイーシャ？パス遠慮せずに投げる！お前時々敵を気にし過ぎる時があるぜ？」

友則が、試合を振り返って言った。あ、成る程。こうやって話を逸らせてるんだと思った。きつと、真辺りが考えて話を切り出したんだと思う。

「ごめん。決勝は気を付けるよ。他に気づいたこと有る？言っておいて！」

あたしは、氣遣っている事を念頭に自分を奮い立たせる方向に摩り替えた。その方が、皆も気が楽だろう。

「あとは^{スタミナ}体力が無い！」

それって悪口ですか？雫！

「却下！」

思わず嘔き出してしまった。

「疲れたら、俺にボールを回せ！ポイントガードの経験が有るの忘れたか？」

雫は仕方ないかと、今度は真剣に言った。

「任せる時が来たら任すよ。多分、次の試合に見合う体力は無いから」

素直に言えた。少しは本音を伝えることも必要。そう言う事だ。

「真は何か無い？」

あたしは、ロッカーにもたれ掛かって話をしている。皆は椅子に座り込んでいた。

「今度は、スリーポイント狙って行きたいから、上手くボール回してくれ」

あ、そうだな。真にボールが集められなかったよ。

「うん。分かった。健二は？」

「お前、シユート打ちたければ打て！後は俺に任せろ」

リバウンド。今度はしつかり取りに行くつもりでいるみたいだった。あの背の高いヒューマノイド相手に。

「取り逃したら、ビンター発！覚悟しておいてね」

あたしは冗談を言っただけだ。皆笑っていた。良かった。こうして話が出来て。

そんな所に、春樹達が入ってきた。英治、亮、薫、陸。皆、目が真つ赤なのに、晴れやかに笑っていた。

「俺らの分も、決勝戦頑張れよ！」

鼻を擦りながら、英治が一発気合を入れてくれた。春樹は、

「相手はかなり手強い。特に四番は気をつける。かなりなプレッシャー掛けてくるから」

アドバイスしてくれた。

「そんじゃ、俺らは着替えて、人間になるよ。で、観客席で観てるな！」

亮がそう言ったら、

「俺達は、人間さ！」

後の、薫と陸が突っ込みを入れた。そして、笑って去って行った。皆、ありがとう！

「さて、準備するわよ！『南風』〜ファイト！」

「おう！」

勢いのままに、あたしが大声を上げたら、雫達はそれに応えてくれた。そして時間まで、各自ストレッチを行ったのである。

時間が来たあたし達は再び、コートに立つ。

今度は、縦にコートが敷かれていた。一面を堂々と使う様に……そして、光り輝くライトの下にあたし達は整列した。

さっきと風景が違うので、一瞬勘が鈍ってしまったが、その内慣れた。ラインの色が変わっている。こっちがそうかと確かめるよう

に見た。

敵は、高いのは分かっていたが、かなり頑丈そうな体系をしている。「特に四番」と言う事でその選手を見た。まるで、プロレスラーかと思うような体つきだった。ぶつかったら、か弱いあたしはヨレヨレって倒れそう。でも、身長的にはこいつはポイントガードだと直感した。あたしの相手だ。力ではまず負けるのは判る。なら、それを利用してもらい、上手いことやるしかない！

今、あたしは両親の造り上げて来たヒューマノイドと相對している。と、言う事は、何処かであたしの事を観ていると言う事だ。バシないだろうか？ちよつと心配だったりもする……

審判が一礼を促した。始まる！緊張で胸がバクバク言っている。落ち着けよ！アイーシャ？自分に言い聞かせた。今はそれしか出来ないのだから！

先取点はあたし達が取った。これは、お得意の作戦。相手の弾いたボールを先に取って速攻を掛ける。この方法は見事決まった。

観客席はまたしてもどよめいた。こう言う方法で点を取るの珍しい事だろうから。

さてと、問題はここからだ。守らなければならない。あたしは、早速四番をマークした。

来るなら来なさいよ！止めて見せるから！出だしから闘志が漲みなぎっている自分を感じた。四番はそれを気にせずに、一気に突っ込んできた。よっしゃ！あたしは、その前にはだかった。手を出さずに。すると、四番は、あたしの作戦に引っ掛かってくれた。

「白、四番、オフエンス、チャージング！」

あたしは思いつきり後方に吹き飛ばされ、お尻から倒れこんでいた。痛い。けれど、これで敵はファール一つだ。そして、あたし達の攻撃が始まる。

スローインで、ボールはあたしの手に収まった。さて、どう攻めようか？相手はオールコートのディフェンスで、しつこく付き纏っ

てくる。四番は特にプレッシャーを掛けてくる。一回離れないと…
…雫が、敵を振り切り、前方に出て来ている。パスを出したい。あたしはステップバックで、一方後方に引く。見事に引っ掛かってくれた。相手との距離が少し出来た。あたしは、その隙を観て、雫にパスを出すのと同時に、四番を抜いて、敵陣のコートへと走り込んでいた。四番は追いかけてくる。雫は、パスを受け取りドリブルで相手を交わし、前方へと走りこんできた。あたしは少しだけフリー。友則も、敵の五番にフェイクを掛けてフリーになっている。

雫！友則が空いている！声に出したいが、出来ない。早く、気付いて！そう思った瞬間、雫は、友則にパスを出した。

「よし！」

あたしはかすかな声を出していた。友則に渡ったボールは既に敵陣のゾーン外。

流石に、チェンジして来た六番が友則に付き、五番がすかさず真に付いた。ここで止められた。

ここからが正念場。三十秒ルールがある。早く攻め込まなければ！友則はピボットで、暫くボールをキープしていたが、苦しくなつてドリブルを始めた。敵はゾーンディフェンスに変わる。さてどうしたら良い？背の高さを利用した形でディフェンスが固まるとややこしい。友則は、トップにいるあたしへとボールを回してきた。取り敢えず、真を使ってみるか？

あたしは、右サイドにボールを運ぶ。ディフェンスの重心は右に傾いた。あたしはスクリーンして、スリーポイントライン外にいる真に手渡した。真はすかさず、ジャンプシュートをした。相手は知らないだろう。真の持ち味を。スパンとボールはネットの中に納まった。完璧！真には恐れ入るよ！

これで、五点リードした。

相手のエンドラインからのスローインは、早かった。こっちが喜びでホッと息を付いている間に行われた。しまった！あたしは、四

番をマークしなければならぬ。しかし、四番は既にあたし達のコートへと入り込んでいた。必死で追いかけた。ボールは縦長にコートと投げられ四番の手に渡っていた。速攻？後ろから追い掛けるが、追い付くことが出来なかった。そして、シュート体勢に持ち込まれていた。しかし、健二が戻って来てくれた。健二なら止められる！そう願っていた。ボールはバシンと弾かれた。そして、転がった。拾わないと！それをカバーしてくれたのが、雫であった。ライン際ギリギリで追い付いていた。そのボールを取り上げると、あたしに渡した。

「ホツとしてるなよ？相手はヒューマノイドだ！」

ボソリと零した。

「悪い！」

あたしは一言返した。雫は聞かない内にさっさと敵陣へと走っていた。それを見てあたしも勢い良く駆け出し、敵コートへとドリブルして行った。

相手は、ゾーンディフェンスに切り替えてきた。先程の失態を挽回する為に、真に七番が付いている。流石、社会人プロが造ったヒューマノイドだけある。機転が利くプログラミングだ。そしてこの形式はボックスワン。

さてと、どう攻撃すべきか？あたしは、トップでドリブルしていた。健二が何やら目配せしている。何？ゾーン内は危険だ。健二にはボールを入れられない。が、何かを言いたげだった。首をゴールへと向けた。あたしにここから打って？首を縦に振った。リバウンドは任せろ？って事なのか？ふーん。真ほど腕は無いけれど、やってみますか？ピンタ覚悟しておきなさいよ？

あたしは、スリーポイントラインまで下がると、静かにボールを放った。ボールは、綺麗に回転が掛かり、ゴールへと向かった。入るか？健二は既にスクリーンアウトの体勢に入っている。長い時間ときが過ぎていく気がした。

ボールはリングに当たり、跳ね返った、それをスペースを上手く

作っていた健二が取った。健二はそこから直ぐにジャンプシュートした。決まった！これで七点差！

時間はまだまだ有る。出だしは快調だった。

それから、前半残り一分。得点は三十対二十五。取り敢えず、あたし達のチーム『南風』のリードのまま試合は流れていた。相手も負けてはいなかった。ドンドン攻めてくる。時間が経つにつれて、慣れてきたのであろう。あたし達のチームの動き方と、弱い所を突いてくる。真がプレッシャーに弱い所。健二が背の割りにジャンプ力に欠ける所。友則の繊細さが無い所。あたしの、体力が無い所などをばっちり捉えていた。だから、攻め込む所は決まっていた。真と友則の所。穴が見つかってしまった。だけど、それをカバーしてくれたのは、雫だった。無鉄砲だけど、カバーに入るだけの余裕があった。それで助けられている。八神監督の人選に感謝だ。

さてと、残り少ない前半戦。今二点敵は入れてきた。三点差まで詰め寄られている。ここはやはり五点差に戻しておきたい。皆限界に近い。後半戦に持ち込むには後二点は欲しい所だった。

エンドラインから、雫が投げ入れたボールを引き継ぐ。相手はやはりゾーンディフェンスでいる。ハーフコートまであたしはドリブルで駆け込んだ。

そして、やった事の無い、ダックインで一か八か？切り込んでみた。力で勝てるとは思えないが、どうしても点が欲しかった。

「ピュウー！」

敵は、まさかあたしが突っ込んで来るとは予測けいさんしてなかったらしい。足を動かさず、あたしを腕で止めようとした。あたしは、後方にかなり跳ね飛ばされた。

「白、四番、ディフェンスチャージング！」

審判の声が聞こえた。これで、四番はファール二つだ。後三つで退場。そして、ゲームオーバー！あたしは心の中で呟いた。

スローインから始まった。時間はまだ三十秒ある。友則があたし

にボールを集めた。真はしつかりガードされているし、健二はガードを外し切れていない。雫は？あたしは雫を捜した。あいつなら何とかしてくれるかも？

トップから、雫がいる左サイドへと動く。中に入って！雫はそれを汲み取ったのか？一つフェイクを掛けて、健二と摩り替わるように中に入った。あたしは、小さなスペースを見つけた。ここなら！小さなバウンドパスを放り込む。それをカットし切れなかった敵の七番は、後方に手を伸ばした。が、取れずに雫の手の中にボールは納まった。雫は上からかぶさるような高いディフェンスを潜り抜けて、下からレイアップシュートをした。入れ！あたしは心から願った。

リバウンドする為に健二と、真がゴール下へと入り込む。でもその必要は無かった。ボードに当たったボールは綺麗にリングの中へと収まった。

どよめきが、会場内を揺るがせた。まるで、こんなことあり得ないと言った風に。それもそうだ、社会人相手にこういう試合をしている子供なのだから。

ここで、前半戦は終了した。五点差でリードしているあたし達は、ゆっくり控え室へと足を向けた。かなり体力を消耗していて、上手く歩けない。けれど、まだ後半戦が残っている。後二十分。それがどう転ぶか？分からないけれど、全力で当たらなければならないのだ。

13 決勝戦・後半・勝負は此処から・・・

控え室には、見学していた残りのメンバーがいた。

「おっしやく！これで、望みはまだあるな？」

英治があたしに向かって背中を叩いてきた。

「痛いよ、英治……」

疲れて痺れている体。ロッカーに寄り添って、あたしはしゃがみこんだ。タオルがもうビショビショである。

「でも、四番にファール二個お見舞いするなんて、やるな〜アイーシャ〜！」

春樹は自分事のように喜んでた。よほど悔しかったのであろう。そんな会話をしていた時、八神監督が初めて顔を出した。

「良くやっているな。後二十分だ。気合を入れて行け！」

「はい！」

あたし達は、その言葉を受け取った。

「あと、後半は、声を出して行け。僕が許す。これが最期だと思っても良い。声を出して、お前達らしく、積極的に行け！」

これが最期？疑問だった。もうバスケットをすることが出来なくなるから。という意味なんだろうか？

「ただしアイーシャ。くれぐれも日本語でな？」

あたしにそう言い残すと、再びドアを開けて去って行った。

「後を託す。って事だろうな。八神監督も心を決めたんだ。さてと、少し休もう。声を出して行けるんなら、希望が少しは持てるぜ？後半戦！」

雲？それってどう言う事？あたしが問おうとしたら、

「そうだな。最期のプレーは華やかに決めよう！」

健二も……それってどう言う事なの？何か皆感づいているみたいなのに、あたしだけ知らない。

「やっと解放か？いやいや楽しかったよ。本当に」

真？

「でも、もつと楽しみたいのにな〜！」

友則？皆口々に訳の判らない事を口走っている。

「アイーシャ？これが最期の試合だ。思う存分やろうな？」

雫が、あたしに言った。ちよつと待って！

あたし達は、まだまだ試合やれるんだよ？その為の革命なんですよ？そう言いたいけど、どう言う訳か、声が出てこない。

春樹？英治？亮？陸？薫？あたし何か変なんだよ、声が出ない！皆を見渡した。消えていくかのように、皆が透けて見えた。

ちよつと、待って！これは幻なの？目に見えてはいけないものだったの？触れてはならない物だったの？あたしは、何処にいるの？ああ、混乱してくる……あたしは、その後ふつと意識が遠退いていった。

「アイーシャ、時間だよ！ほら起きて！」

真があたしの身体を揺さぶった。あ、あたし寝ていた？じゃ、全て夢だったのかな？

しかし、あたしは控え室にいた。夢などではなかった。じゃあ、あたしは何？

「真？あたし、寝てたの？」

「疲れてるんだろ？全くアイーシャらしいな……堂々とイビキ掻いて寝てるから、起こす気にもならなかったぜ。あはははは〜」

イビキは余計です！雫のあんぽんたん！

「さて行きますか！」

あたしは、皆を束ねて部屋を出て行った。

あたし達は、後半戦へとコートに向かった。

会場はたくさんの人で埋まっている。その中に、八神監督の姿が目に入った。来賓格の席を陣取っている。その横には、あたしの両親の姿があった。何も変わっていない様子だった。あたしだって気

が付かないのかな？自分の子供の姿を見忘れる親っているんだ？何て思うと少し複雑だった。

さて、あたし達の結束を観てもらいましょうか？示し合わせた様にコートで円陣を組む。そして、

「『南風』へ行くぞ〜！」

「おう！」

人間らしく、あたし達が日本でやってきたらしく、声を出した。

これには、観客席からの声が上がった。半信半疑で観ているのが手に取るように分かった。これで良い。これからが本当のあたし達の姿を見せる機会チャンスなのだから！

健二対八番。ジャンパー同士の対決。これに対応する方法はもう計算済み。

「四番！」

あたしは、マークする相手と呼んだ。あちらこちらで声が上がったのを確認する。マークすべきヒューマノイドの背番号を声を上げて知らせる。

審判のボールが宙に上った。健二はスルーで、ボールは八番の手で弾かれた。それを追い掛ける。手に取ったのは友則だった。

「アイーシャ、走れ〜！速攻！」

一気に皆が相手コートへと駆け出す。

ロングボールは、綺麗に縦に渡った。あたしはドリブルをしてレイアップシュートを決めた。これで七点差！

「おっしや〜」

あたしは、直ぐ横に追い付いて来ている雲に手を出した。雲も手を出してきたお互いの手が当たり「バチン！」と音がコート内に広がった。

観客席から、ブーイングが聞こえてくる。ああ、人間だってバレちゃったね？でも、審判団は、何事も無く試合を続行させた。良い

の？それで？

「良いぞ〜アイーシャ！」

観客席にいる、春樹達が応援している声が聞こえてきた。もう、隠す必要など無いんだから。あたし達の事は！

「四番オツケー！」

オールコートのディフェンス。こいつに付いて、あたしはどれだけ動いて来ただろう？

「退場させてやる！」そんな風に思う試合も珍しい。敵対心むき出しの自分を、不思議と怖いと思わなかった。

「来い！負けないから！」

言語は通じないはず。あたしは日本語を喋っているんだから。四番は一步引くように、身体を動かしていた。ステップバック？と思わせておいて、しつかりダックインして来た。

あたしは、それを見破ることが出来ず、前に出てしまった。ぶつかる！

「赤、四番、ディフェンスチャージング！」

やられた。こいつに一つファールを取られてしまった。あたしは手を上げた。ちくしょう！

「焦るな！まだ、時間はたくさんある。これからが正念場なんだ。体力使い切るなよ！」

栗が、肩に手を置いて、助言だけして持ち場についた。

「アイーシャ！抜かれても気にするな〜」

友則が、あたし達のコート側から叫んだ。

「悪り〜！次から、気を付けるよ！」

会話出来る事が、力の源になる。ああ、人間は凄いよ！

再びスローインから始まる。今度は慌てずに、四番の動きに合わせて動く。隙が無い。手を出すことは難しい。そのまま、ハーフコートまで持ち込まれてしまった。あたしは、ラインを見てクソツと思ったが、まだまだ、こいつはパスを出してない。守りきれている。

ここまで来たら、マンツーマンよりゾーンを敷いた方が良いかも？と言うところで、

「ゾーンディフェンスに、切り替え！」

指示を出した。あたしは、ボックスワンの勢いで、まだこいつに付いている。三十秒こいつが攻め込めない様に守らないと！でも、やはり、上からの攻撃には弱い。あたしがジャンプした時には、八番にボールが渡った。

「友則！付いて！」

振り返って、あたしはゾーンへと走った。

友則は、上からの攻撃に気を付けて、ハンスアップ。ゾーン内には誰も入れないように皆がカバーしている。これでは、外からのシュートしか出来ないだろう。予想通り、シュートは外から打って来た。

「リバウンド！健二！真！」

二人は上手くスクリーンアウトして、そして、健二がボールを握った。

「走れ！」

健二は、あたしと、雫に向かって叫んだ。言われなくても走ってるわよ！

ロングパスは、雫の手に渡った。そして、そこからあたしにドリブルをしてあたしは敵陣に突っ込んで行った。しかし、一人後ろから走りこんで来た。足音が聞こえる。四番だ。

あたしは、雫を見た。雫は逆サイドを走っている。ラインは二つ。あたしは、雫にパスを出した。雫は待つてました。と、ボールを受け取り、シュートを決めてくれた。これで、九点差！

「着実に行こうぜ！このまま！このまま！」

「当たり前じゃん！このまま勝ちに行くわよ！さて、みんな守り（ディフェンス）一本！」

あたしは、今まで声を出しそびれた分だけ叫んでいた。

それに相反して観客席は、見入っているかのように、静まり返っ

ていた。そこにブーイングは無かった。変な感じだ。まあ、良いけどね？

エンドラインからのスローイン。

「四番！」

あたしの足腰は、もう感覚という物が無くなっていた。でも反射的に動く。人間の体って不思議だ。全ては気の持ちようなのだろうか？

四番の動きが上からの一本になっていた。あたしは、それに届かない。もう、パスは渡っている。五番が受け取り、そのまま一気に陣地に入り込んできた。切り替えが早い。四番にファールを取られるより他を使った方が良いと言う事なのだろう。ここまで綿密なプログラムを組んでいるのは正直凄いと思う。

五番に友則が付いている。ここから攻め込まれる可能性は高い。フェイクに弱い友則。やはり、引つ掛かった。五番はスツと中にワンバウンドしてジャンプシュートをした。そのボールはネットの中にスポット入った。決められた。

「ごめん！」

「次々！まだ逆転されたわけじゃ無い！」

あたしは、友則からボールを受け取った。

すると、目の前に四番が居た。気を抜いたあたしは失敗した。

「アイーシャ！気をつけ……！」

真が叫んだが、事は既に遅く、ボールを叩かれ奪い取られた。ゴール下はフリー。四番にシュートを決められてしまった。頭を叩かれてしまった気分だ。いきなり、マンツーマンに切り替えるなんて！ヒューマノイドと侮っていたあたしの失態だった。また、五点差に縮まってしまった。

「ドンマイ！敵はマンツーマンで来てる。気をつける〜」

健二が、敵陣から声を出していた。

「仕切り直しだわ！行くわよ！」

あたしは、エンドラインからマークを解いていた事に、ボールを

放り込んだ。雫は、了解！と言ってボールを運んだ。あたしは、後を追うように敵陣へと駆け込んだ。

相手は、ここまで来るとボックスワンのゾーンの守りに変わる。何て要領が良いの！あたしは悔しくなってくる。僅差きんさの勝負になっているのに、気持ちにはあたし達だけが苦しい。

あたしは、必死で穴を探した。でも、高い壁に穴は無い。作るしかない。スペースが欲しい！切り込んでいける人物！

「雫！」

あたしは、頼みの綱である雫にパスを出した。しかし、雫のダツクインは止められてしまった。何だかんだやっているが、攻め込めず、三十秒が過ぎてしまった。

「ブブー！」

時間切れ、ブザーが鳴った。あたし達のボールは敵のボールとなった。

スロインでボールは四番に渡る。あたしはそのボールをチエックしたが、もう攻撃パターンは決まったみたい、五番に渡った。あたしは、必死で陣地内に戻る。

「真？友則のカバー宜しく！変わりに四番、七番はあたしが付くから！」

あたしには出来ないから、真に頼む。まだ真の方が背の高さ的に余裕がある。だから、指示した。が、結果は裏目に出た。二人が五番を押さえるのに、空いたスペースが広すぎた。六番が、ゴール下の中に潜り込み、パスが通ると、見事にダンクシュートを決めてしまった。これで、三点差。

ああ、やはりあたし達では歯が立たないのか？弱気になってしまふ。駄目だこんな事では！気持ちなが萎える前に、立て直したいのだが、追い詰められてしまうと、上手く動けなくなる。流れは、敵に移った。このまま、取られてしまうのか？点を……

「何やってる！アイーシャ！気合が足りないぞ！」

雫が檄げきを飛ばした。キャプテンとしての今のあたしは空回っ

るだけ。それを補佐するのが副キャプテンの役割。雫は承知して、あたしの背中を叩いて行つた。でも、今のあたしに何が出来るんだ？作戦が思いつかない。これなら、雫が指示を出した方がいくらかマシだ！

エンドラインから、雫がボールを投げる。あたしは四番のマークを外し、ボールを受け取り、再び攻撃の作戦を練る。とにかく運ばないと！虚ろうつろに頭の中で考えていた。ハーフコートまで遠い。そんな感じを覚えてしまう。

でも、負けられない。勝たなきゃ！という気持ちも突き上げてくる。

レッグスルーで四番を抜き去ると、あたしは何とか敵陣へと入り込んだ。此処からなんだよ！頭がボーっとする。疲れてるからか？そんな事言つてはいられないのに。

八神監督に言われた、あたし達らしい試合つて何？その答えが欲しい。今のあたしには分からない！

「アイーシャ！何呆けてんだよ！いい加減怒るぞ！」

雫がキツイ目付きであたしを見ていた。なら雫がやってよ！なんて言える訳が無い！試合放棄などしたら、あたしの生き方を、考え方を放棄してしまうからだ。それだけは避けなければ！あたしは、やっと気を入れ直した。

「あんた達！ちゃんと動きなさいよ！足が動いてない！」
声を出して、そして動かなきゃ！改めて行動に移した。

スペース。何処か……あたしは、トップでドリブルを繰り返していた。右にも左にも動いてみた。しかし、穴が見つからない。雫をスクリーンにし、敵と向き合ってもみたが、動じない。ああ、このままでは時間制限タイムリミットになる。あたしは、ドリブルを止めて、スリーポイントラインまで下がった。一か八かだ。リバウンドは、健二と真に任せる！

狙いを定めてボールを放つ。綺麗な弧を描いたボールは、リング

内に収まった。

「よし！ナイスシュート！」

真があたしの肩を叩いた。雫が、

「これで、六点差！やるじゃん、ドンドン打て！だけどまだまだ気は抜くなよ」

人差し指を立てて一本！と言う余裕な振りしてる。一体何企んでるんだか？雫らしい。

しかし、残り十分。ここからが敵の攻撃の始まりであった。

必死にオールコートでプレッシャーを掛けるが、思った以上に疲労感が出ているあたし達に対して、遠慮など知らないヒューマノイドは俄然身長を生かしてプレーしていた。

隙があると切り込んで来て、軽々とダンクシュートをするし、外からの攻撃も凄まじい。ジャンプしても手が届かないから、簡単に点を取られてしまう。

狙い目はあ^{あな}たしに変わっていた。必死で動こうと努力するにつれて、脚が絡みつく。肩で息をしている自分が情けない。皆疲れているけど、そんな風に見せてないのに……やはり、たった一年の修行^{れんしゅう}では所詮この程度なのかも知れない。

残り三分、この時点で得点は六十二対七十。八点差のリードで『ニュー・ウェーブ』があたし達を上回っていた。

「アイーシャ！パスをくれ！」

エンドラインからあたしはパスを入れる所で、雫は要求してきた。相手は、変わらずオールコートのディフェンスで、プレッシャーを掛けてくる。その中の出来事だった。

「雫？」

何を目論んでいるのか？雫は敵のディフェンスを交わし、パスが出来る所にフリーになってやってきた。あたしは、その要求を呑み、雫にパスを出した。

「俺達は、負けるわけにはいかないんだ！」

言い切るや否や、チャージングを取られるかも知れないと言うの

に、一気に敵陣へと駆け込んでいた。それは、気迫の籠った物で、あたしはハツと気が付いた。自分の弱さに甘えていたのだと。

雫は、元ポイントガードとしての才を發揮して、ぶつかると敵を交わして行く。空いたのは真。

「雫〜！真！」

点数を稼ぐには真を使うのが有効的だから、あたしは指定したのだが、雫はゴール下まで駆け込んで行き、最後の相手を一気にねじ伏せてしまったのである。

「だ、ダンク？」

雫が、ダンクシュートをかました時は、皆、呆気に取られていた。凄いジャンプ力！たった一人で二点をもぎ取ったんだから……

「これで六点差！次、守るぞ！」

雫は、今まで沈黙を守っていたのを、ここで挽回でもする気でいるらしい。でも、一人でなんて無理だよ！あたしは、思い込んでいた。諦めそうになった途端のこのプレー、気持ちに火がつかない訳はなかった。

「雫のバカ〜！出来るんなら始めからしなさいよ！」

「相手^{てき}を欺くには、まず味方からってね？」

何気取ってんのよ！あたしは口の端をキュツと上げて笑っていた。

「ディフェンス一本！奪い取る勢いで行くわよ！」

「よ〜し、来い！」

皆の士気は上がった。

「本当に嫌になっちゃうわね〜！ヒューマノイドなんて！」

四番に付き纏いつつあたしは文句を吐いていた。脚は動く。さっきの雫のプレーに影響を受けたかのように。一人で美味しい所持つて行かれたら、あたし達の立場がないじゃん！四番のドリブルを抑えて、あたしはパスを出すその時を待っていた。

ピボットでやり過ごしている四番。次パスを出すのは……後方から足音が聞こえる。ここだ！あたしは必死でジャンプしていた。

手の先にボールが掠^{かす}った。指先で弾かれたボールが、サイドライ

ンへと転がっていく。

これを取らなきゃ意味が無いじゃない！あたしは、必死でダッシュした。そして、ギリギリの所でボールにジャンプし掴むと、空中に飛んでる少しの間に友則の姿が目の端に映りこんだ。

「友則〜！」

あたしは繋ぐ為に、友則にパスを出した。パスは見事に通った。

あたしの身体は、コートの外に思いつきり弾かれた。ゴロゴロと大きな石が転がるかの勢いで。

「痛っ！！」

立ち上がろうと、手を床に着いた時、膝から太腿に掛けて血が出ている事に気が付いた。摩擦熱で、擦りむいてしまったらしい。あたしは座り込んだまま、成り行きを見ていた。

友則に渡ったパスは、見事にゴール下の健二の手元に渡り、健二がシュートを決めてくれた。

「これで、四点差！」

守りに入ろうと立ち上がったあたしの傍を通りかかった、真が、

「行けるかい？」

と声を掛けた。

「行けなくてどうするのよ？あたしの変わりはいないわ！」

「言っと思ったよ」

真はクスリと笑って、ディフェンスに付く。あたしも、今運ばれてきたボールを持って四番に付いた。ハーフコートのディフェンス。まだ負けた訳じゃ無い。試合が終わるその時までやってみなくちゃ分からないんだ。勝負^{ゲーム}って物は！

#14 決勝戦・決着・全ては平等の世界へ・・・

ここから先は、シーソーゲームが続いた。敵がポイントを入れると、あたし達が追う様に取り返す。その繰り返しだった。

ここまで来ると、疲労感は返って緊張感に変わった。残り一分。三点差で、リードされている状況。これを引き分けにするには、スリーポイントシュート一本は必ず必要。そして、後は地道に攻め込むしかない。

今、手元に有るボールをあたしは、丁寧に扱っていた。が、真が、健二が、雫が、友則が、

「打て！」

と指示を出してきた。後は天に任せろって事？あたしは、トップでドリブルしながら残りの時間を考えていた。既に一分を切っている。

一歩引いた所にスリーポイントラインが有る。あたしは、スッと跳ねるように下がると、ボールを掴み、素早く構えた。審判の指が三本立っている。

ボールを丁寧に放った。四番があたしの前に立ちはだかろうと飛び出してきたのが見えた。しかし、その腕の中にボールは入らなかった。空中にゆっくり上っていくボール。まるでスローモーションの様だった。ここだけ時間の流れが違わない？そんな事が頭を過ぎった。あたしは、四番の身体でボールの行方が分からない。このままじゃ嫌だとフェイクを掛けた。そして、ゾーン内に入り込む。皆が、スクリーンアウトをして、リバウンド体制に入っている。ボールは、フツと下降して来た。入れ！多分みんなそう思っている筈だろう。

願いは、天に届いた。スパンとネットの中に入る音が響いた。

「おっしや〜！守り抜くぞ！」

雫が、既にディフェンスに入っていた。

「守るんじゃない無くて、攻めるわよ！」

このまま引き分けなんてごめんだった。ここまで来たら、春樹達の分も汚名返上したい！だって、日本での試合では、あたし達の一敗が有るんだもの！

「了解！」

何の表情も見せないヒューマノイド。エンドラインから投げ込まれる、四番に渡るボールに飛びつく。カット成功。あたしは、ゴール下まで入り込むと、レイアップシュートを放った。これで、勝てる！そう思った。

しかし、八番が、後ろからそのボールを押さえ込んだ。

「ピピピー！」

「白、八番、ディフェンスファール！フリースロー！」

やった、これでフリースロー！

そう思った瞬間あたしは、気を緩めてしまっていたのだろう。床に脚を付いた瞬間、捻ってしまったのである。鈍い痛みが走った。あたしは足首を抱えて呻いた。痛い……蹲すくまったまま立てなかったのである。

審判が駆け寄ってきた。

「レフリータイム！赤！」

既に人間だとバレてはいるけれど、ここであたしが試合放棄したら、負けだ。冷や汗が背中を伝う。痛いのに、勝ちたいという気持ち先走った。

雫があたしの所に来て、

「これ以上は無理だな。リタイアしよう」

と真面目な顔をして言った。

「じよ……冗談じゃ無いわよ！勝たなきゃ意味が無いでしょ！あたし達の今までは何だったのよ！くっ……」

口だけは達者だった。でも、痛くてズキズキと足首が疼く。

「無理するな……」

健二が、あたしの腕を取った。そして、運ぼうと身体に手を回し

てきた。

「待つて！嫌よ！」

あたしは、頑固に否定し足首を押さえながら、健二の肩に手を回して、腰を上げた。このまま終わるなんて、死んだって嫌！

「栗……肩貸して！」

栗は、何も言わずに肩を貸してくれた。

「……フリースロー。あたしがやるから、サークルまで運んで頂戴……」

何も言わずに、フリースローラインまで運んでくれた。審判は、続行の合図を送る。会場は沸き立っていた。フリースローラインに選手達は並ぶ。

左足に負担が掛からないように、あたしはボールを握った。こんな中途半端な体制でシュートが出来るだろうか？そんなこと今までやったことが無い。でも、やらなきゃ！周りはシーンとしていた。誰も居ないかの様に静まり返っていた。瞼を閉じて、集中する。足の事を考えないようにしなくちゃいけないから。

そして、一本目を放った。ボールがリングを回るように、何周かしてコロリと零れ落ちた。外れた！足がズキズキ痛むのが分かった。

後一本。これは入れたい。時間は後、二十秒。反撃されてもおかしくない時間が残っている。審判がボールを渡してくれた。あたしは、再び瞼を閉じた。そして、リングをキツと睨み付けた。この一本入れ！

ボールを投げた。それは、放った瞬間判った。入る！

「守って（ディフェンス）！」

まだ入ってもいないのに、あたしは声を上げていた。皆があたしを見ていた。

「了解！」

まだ動くことが出来ないから、ラインにいるけど、皆承知してくれた。ボールは、ネットをすり抜けた。一点差であたし達『南風』

のリード！

エンドラインから、投げ込まれるボール。それを、雫が追い掛けた。あたしは使い物にならない。只居るだけの存在。そして五対四の構図。残り、十秒！守りきって！あたしは、その場から足を引きずるように、自分達のコートへと足を向けた。

皆、頑張ってくれている。一人欠けた中、一点を守り切る為に、走り回っている。

「真！右サイド空いてるから、スペース空けないで！」

とか、

「友則、腰が引けてる！」

とか、

「健二！もっとプレッシャー掛けて！」

とか叫んでいた。そんな中、六番がスリーポイントライン外にいることに気が付いた。

嫌な予感がする。

「雫！六番！打ってくるわよ！」

残り、三秒。六番の手にボールが渡った。シュートの構え。やはり打つつもりだ。でも雫に声を掛けたのが幸いした。雫は、シュートを打ったそのボールを弾き返した。そこで、試合終了のブザーと、笛が鳴ったのである。

「うわーっ」

観客席が会場内に響くような歓声を上げた。あたし達は、お互いを見て、そして抱き合った。勝ったんだと喜び、お互いを讃え合った。

「アイーシャ！来いよ〜」

雫が、あたしの腕を掴み、そして皆があたしを胴上げした。上下に放られて身体がふわふわ浮く。

「もう〜やりすぎだっば〜」

それでも、まるで気にしていなかった。勝った事の喜びで、皆、

舞い上がっていた。あたしもまた嬉しくて、床に再び足を着けるまで痛みを忘れ去っていた。

そんな中、英語で放送が入った。賞の授与についてである。時間は、今から直ぐとの事だった。あたしは、ギョツとして、その放送に聞き入った。人間であるのに、表彰を受けることが出来るのかと言ふ疑問。皆は、平然としていた。何？その表情は？雫が、

「お前が、ちゃんと受け取るんだぞ？」
と言った。まるで遺言の様だった。

「只今より、表彰式を行います」

各チームが縦一列に並んで、その時を待った。あたしは、松葉杖を借りて立っていた。

「優勝、『南風』チーム」

放送が流れると、あたしは前に出た。

お偉いさん？何だろうか？確か何処かで見覚えがあるような気がする……あたし達の前にその身を晒したその人物。貫禄のある、長い白髭がトレードマークだった。

表彰台の所で受け取った賞状。そして、賞金。あたしは代表としてそれを受け取った。

「おめでとう（コングラチュレイション）」

一言そう言つて、その人はあたしに握手を求めてきた。あたしは不思議な感覚でその手を握り締めた。

それから、放送が聞こえてきた。

「観客席の皆さん。僕は、日本の総理大臣です。この大会を無事開催出来て、大変嬉しく思います」

この声は、八神監督？あたしは来賓席を見た。するとそこで、マイクを持ち、英語で話しているのが目に入った。

「皆さんには、人間の価値を判つてもらえたでしょうか？この試合は、この日の為に極秘で進められてきました。アメリカ、日本と言ふ二国の極秘計画だったのです。そして、一つの賭けをやったので

す。どちらが人の心を掴むのか？その賭けを！」

観客席はざわめいた。当たり前だ。極秘計画だとか、賭けだなんてそんな事を言われて、誰が肯定できるだろうか？

「そして、今この時点での見解を求めたいと思っています。ヒューマノイドが悪いと言っわけではありません。肯定派、否定派。それは皆さんの心にあると思います。過去の過ち。それを振り返る人もいると思います。しかし、人間の手でこれ以上のヒューマノイドを完成させられるでしょうか？感情の無い。ただ、^{ブレイン}頭脳だけで動いているヒューマノイド以上を！」

八神監督は、ここで一区切りつけた。会場内は、シーンと静まり返った。

「ヘイズさん？あなたの口からお聞きしたい。これ以上のヒューマノイドは可能ですか？」

あたしの父がマイクを持っていた。

「『ニュー・ウェーブ』のエンジニア、ヘイズです。この場を持ちまして断言させていただきます。不可能です。感情は、人間特有の物。これ以上の物は、神の領域に達します」

父はそう言っ言葉を切った。

「ヒューマノイド開発チームの、長たる方のお話でした。さてここで、皆さんに意見を聞かせて頂きたい。この試合で、大切な何かを感じ取った事と思われます。ヒューマノイド制をこれからも続けていくか？それとも、新しい人間らしさも含めた世の中を創り上げていくか？その返答が欲しい。これは、国際ネットで放映されています。そして、それを判断する為の処置を施しています。手元のボタンを押して下さい。イエスが先を、ノーが後です。それで、全てが決まります」

八神監督は言い切った。国際？でも、日本はテレビさえないのに……他の国だつて有るかどうかなんて判った物ではない。有るとしたら、このアメリカだけでは？そんな事を思っていると、パッと会場が暗くなった。そして、天井に光が差し込んできた。ざわめきが

起こる。イエスとノーのライトが点滅していた。あたしは固唾かたすを呑んでそれを見上げていた。

光は、ノーに灯った。

「皆さん、ありがとうございます……」

八神監督の声が聞こえたその後、大きな銃声が響いた。真つ暗闇の中、何が起こったか判らなかつた。が、直ぐに元の通りライトが灯った。

来賓席から、悲鳴が聞こえた。八神監督が、胸から血を流して手すりからずり落ちた。あたし達は、必死でその場に走って行った。

「八神監督！」

誰？打ったのは誰！

あたしの頭の中はパニックだった。何故打たれなきゃならないの！あたしはまだ御礼言っていないのに……涙が溢れ出てきた。

「……アイーシャ？僕は過去の幻影なんだ。嘆くのはおよし……何千年も生きてきて、そして、やっと眠りに就くことが出来るんだ。それを判って欲しい……それから、君に一つだけ嘘を付いていた事を謝りたい。日本は、海の底に沈んでいる。もう無い国なんだよ？それじゃ……また会おう……」

静かに目蓋を閉じた。銃が、八神監督の手に握られていた。あなたが選んだ道がこれだったんですか……悲し過ぎますよ……目に溜まった涙で視界が滲む。でも待つて？日本が海の底なら……

あたしは、周りを見回した。健二、真、雫、友則、春樹、英治、陸、薫、亮は？

皆が、あたしの周りですこりと微笑んでいる。

「さよならだ！アイーシャ？」

健二！

「足、早く治すんだよ？」

真！

「また一緒にバスケやりたいぜ？なあ、アイーシャ？」

友則！

「お前、凄かったよ！」

春樹！

「イビキ、気をつけるよ？」

英治！

「寝言も凄かったっけ？ははは……」

陸！

「ま、アイーシャらしいけどな？」

薫！

「もう少し、女らしくしろ！」

亮！

「そう言う訳だ。目に見えるものが真実って訳じゃ無いんだよ？前にも言っただろ。大切なのは、心のつながりだぜ、アイーシャ？それより、泣き虫……直せよ！みつともない。じゃあな！」

雫！

皆、煙のように、跡形も無く消えてしまった。さつきまで血を流して倒れていた八神監督までも……あたしは、大声で泣き臥せってしまった。

一年……その間、あたしに幻を見させたのか？こんな残酷な別れって有るのか？

しかし、この終わりは、皆の目にちゃんと焼きついていた。静かなざわめきが、起こっている。

そして、泣き崩れているあたしを、さつきの白髭の男性が抱き起こしてくれた。

「え……？」

そして、松葉杖を拾い、あたしは立ち上がった。

「全て、この日を想い実行してきた計画プロジェクトだった。私達は、過去の日々を繰り返しはならないと言っ意見と、それ以上を求めてきた。

そして、今は無き日本の幻影と話をして来た。信じられないかも知れないが、これは、現実だ。誰も幻影だと思わなかったらう？目に見える物を信じた。これが、現実なのだ」

そして知事は、あたしの肩に手を乗せて言った。

「民衆の諸君？ここに、私から偉大なる日本人達が残してくれた者を紹介する。彼女の名前は、アイーシャ・ヘイズ。そして、カリフォルニア州知事より、もう一度この者を讃える！」

あたしに、拍手と、あたしの名前を讃える声が沸き起こった。それは、人間としての誇りを取り戻した歴史的瞬間でも有った。

あの日からどれだけの年月が過ぎたのだろうか？あたしは、日々執筆を続けていた。とある小学校のバスケットの監督をしながら、過去と今のエッセイを書き続けてきた。

本当は戻るべき日本に、残してきた日記を取りに行きたかったが、どんなに調べても日本は海の底で、その希望は適わなかった。

だけど、今でも鮮明に思い出す。あの短かった日々を……確かにあたしは日本に居た。そして、皆と一緒に生活をした。それは、あの試合を見た人々が信じてくれた。だから、もう今はそれだけで十分だった。

「アイーシャ！そろそろ時間だぜ？用意しろよ」

夫のジョンが、あたしを呼んだ。

彼はあの運命の試合後、罪にさいなまれて、州知事に懇願したと言っていた。でも、あたしが生きていた事を一年後の試合で知り、胸をなでおろしたとか。試合後、あたしに泣きついて来た事は今でも忘れられない。

日本国籍を持ったアメリカ人、アイーシャ・ヘイズ。あたしは今口サンゼルスでの平和な光溢れる街並みに囲まれて幸せに暮らしている。皆が残してくれた言葉を噛み締めながら、人間とヒューマノイドが平等な法の下で……

FIN

#14 決勝戦・決着・全ては平等の世界へ・・・（後書き）

あたし自身、学生の時バスケットをし、試合を数多くやってきました。個人プレイの多い選手でしたが、そして、今の今でも愛しています。

いつか、バスケット小説を書きたいなと考えておりました。なので、専門用語の多い小説になりましたが、特にバスケットを愛してくださる方に読んでいただければ幸いです。

キャラクターに関しては、実際こういうキャラ達いたら、チームとして楽しいだろうな。何て感じで作り上げました。

アイーシャ。彼女を主人公にしてみたのは、かなり自分でも楽しかったです。紅一点。てのは良いですね。

また違った形でバスケットに関する物を書ければ良い名と思います。過去の産物となりえた、アイーシャ以外のキャラ達に愛をこめて、これにて締めくくります。

ここまで読んでいただいて大変ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667d/>

ループ

2010年10月8日15時53分発行